白昼堂々

結城昌治

Yuuki Shouji

結城昌治
コレクション

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫

結城昌治コレクション

白昼堂々

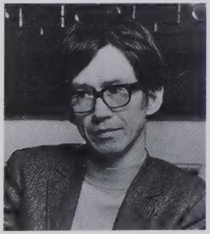
結城昌治

KOBUNSHA

光　文　社

結城昌治　ゆうき・しょうじ

1927年東京生まれ。早稲田専門学校卒。東京地方検察庁に在職中の'59年に「寒中水泳」で、第1回「EQMM」短編コンテストに1席入選。'60年に同庁を退職し、作家専業になる。'62年に発表された『ゴメスの名はゴメス』、'63年の日本推理作家協会賞作品『夜の終る時』、'66年刊の『白昼堂々』などで、ユニークな推理作家としての地歩を固めた。『軍旗はためく下に』で、'70年に直木賞を受賞。'85年には、『終着駅』で、吉川英治文学賞を受賞した。'96年1月に死去。



カバーデザイン——髙林昭太
カバー写真——銀星アド社
カバー印刷——萩原印刷

目次

Digitized by the Internet Archive
in 2024

https://archive.org/details/unset0000unse_o4p8

ハゲ寅 195
ゴマ安 206
張込み 217
大耳 228
切符とマッチ 239
接見室 250
講中十四名 260
平和商会 271
赤字 282
先納（せんのう）トランク 293
下検分 304
行動開始 314
夢の形見 326

あとがき 338
ノート 341
解説 山前（やままえ）譲（ゆずる） 343

帰郷（一） 9
帰郷（二） 20
帰郷（三） 31
帰郷（四） 42
モサガン 52
シケ張り 63
ズヤ 74
南天館 85
合唱 95
捜査三課スリ係 106
専従捜査班 117
坂下弁護士 128
やがて十月 139
江間川警察署 150
泥棒村 160
雁渡る 172
弥勒菩薩（みろくぼさつ） 183

白昼堂々

帰郷（一）

一

北九州市小倉から支線に乗り換えた富田銀三は、単調な列車の振動と窓からさしこむ春の日にうとうとして、危うく江間川駅を乗り過ごすところだった。

銀三は慌(あわ)ててホームに下りた。小さな旅行鞄(かばん)を提(さ)げ、白髪まじりの短い口ひげをこすって改札をでた。すぐにタクシーを拾うつもりだった。

しかし駅前に客待ちのタクシーはなかった。引き返して改札口の駅員にきくと、この町のタクシー会社は、

「もう何年も前に潰(つぶ)れちしもうたですよ」

だが、川又へ行くなら間もなくバスがくると教えてくれた。

銀三は数人の客が退屈そうに立っているバス停へむかった。町の気配の異様な静けさに気づいたのは、そのときが最初だった。駅の乗降客も少なかったし、町全体が閉園後の遊園地のようにひっそりとしている。

どす黒く濁っていなければ景気が悪いのだ。見渡す限り、ピラミッド型にボタ（廃石）を積み上げたどのボタ山も、風雨に曝されて老人の皺のように深い溝が刻まれ、今やボタの落ちるひびきひとつ聞こえなかった。

銀三は川に背をむけ、雑草に狭められた緩い坂道を上った。上りきった一帯が川又鉱業所だった。そのボタ山の麓に近く数棟の炭住（炭鉱従業員住宅）が建ち並び、その六軒一棟の長屋のどれかに銀三の姉夫婦が住んでいるはずだった。

ところが、銀三は炭住に近づいて呆然とした。建物の屋根瓦は崩れ落ち、壁土は剝げて簀子がむきだしになっている。軒は朽ち果て、羽目板も破れて、もはや到底人の住める家ではなかった。他の棟もみんな同じだった。四囲は伸び放題に雑草が伸びている。窓の枠木は辛うじて残っていても、ガラスなどは一枚もはまっていない。家じゅう風が吹きぬけるばかりで、むろん人の気配はなかった。

まさしく廃墟だった。炭住を通り抜けたが、坑道のレールは外され、埋められた坑口はどこにあったか見当さえつかない。選炭機などもむなしく赤銹びて、枯草の間に眼につくのは貯水槽や共同風呂跡のコンクリートだけだ。

やや離れた窪地でボタを拾っている婆さんのモンペ姿が見えた。ボタの中から燃えそうな石を拾っているのである。

「そこの炭住にいた菊地さんが何処へ移ったか知りませんか」

銀三は近づいて声をかけた。菊地というのが姉の嫁ぎ先の姓だった。

——商店街の定休日か。

銀三はそう思った。

しかし、ぼんやりとそう思っただけで、駅前通りの商店がそれぞれ商いをしていることはじきに分ったが、それ以上深くは考えなかった。

やがて車体の古びたバスがきた。

車内は空いていた。

銀三は後部の席に腰をかけた。十年ぶりの帰郷だった。バスがごみごみした商店街をぬけると、窓の左右にボタ山の風景が流れた。なつかしかった。少年時代に家をとびだして以来滅多に帰らない故郷だったが、むしろそれ故に、銀三は故郷が懐しかった。

十分ほどで川又に着いた。

下車したのは銀三ひとりだった。

バスが土埃を巻き上げて去った道に沿って、江間川が浅く流れていた。鉱害による陥没などのために、現在は川又という地名に合わないが、往年の江間川はこの辺りで遠く英彦山から流れてきた遠賀川に合流し、さらに筑豊の盆地を縫って玄界灘に注いだ。この遠賀川の流域に発展した炭鉱地帯が、かつてわが国随一の出炭量を誇った筑豊炭田である。

しかし、それがもうむかし話になったことは銀三も知っていた。朝鮮動乱の終結をさかいに石炭産業は急速に不況の坂を降りつづけ、石炭合理化法案の有無に拘らず大小の炭鉱がつぎつぎに倒れていった。銀三は江間川の水がきれいに澄んでいることに気づいたが、ヤマの川は

余分な質問ではないかと思ったが、警察官には逆らわない習慣がついているので銀三は素直に答えた。
「東京から、何ばしにきたとな」
巡査はますます不審そうな顔をした。
「墓参にきました」
「ボサン？」
「おふくろの墓参りです。寺はここから少し離れてますが、その前に姉に会うつもりでした」
墓参にきたというのは事実だった。八年前に母親が死んだとき、銀三は指名手配中で故郷へ帰れなかった。当時は住居も転々としていたから死亡通知も届かず、ようやく知ることができたのは死後二年も経ってからで、それも刑務所に入って初めて係官の話で知らされたのだ。そして、刑務所を出てからも故郷へは足が遠く、つい今日に至ったのである。
「あんたと渡辺勝次との関係は？」
巡査は無遠慮に質問をつづけた。
「むかしの友だちです。もう十年くらい会いませんが、風の便りで姉と同じ炭住にいると聞いたもので、彼に会えば姉の行方も分ると思います。川又鉱業所はいつ潰れたんですか」
「もう五、六年前になるやろう。経営者はヤマば売りとばして雲がくれしちょったとばい」
「それで、渡辺勝次は現在どこにいるんですか」
「泉口におる」

老婆は顔をあげた。ショボショボした眼をして、年は七十歳を越えているだろう。

「………」

老婆は首をかしげ、警戒するように銀三を眺めた。知らないようだった。

「それでは渡辺さんを知りませんか。渡辺勝次というんですが……」

渡辺勝次は銀三の旧友だった。渡辺の渡と、綿屋に奉公していたことがあるという両方に掛けて通称ワタ勝という。刑務所で知り合ったが、故郷も職業も同じところから、時は兄弟以上に親しかった男だ。

「駐在できいたら分るですばい」

老婆は首を振り、黒く汚れた指で江間川の流れのほうをさした。

二

駐在所は銀三がバスを下りた停留所の近くにあった。

中年の巡査は菊地夫婦を知らなかったが、渡辺勝次のことは知っている様子だった。疑い深そうな細い眼をした巡査である。

「あんたはどちらの人ですか」

巡査は勝次の住所を教えずに、不審訊問(ふしんじんもん)の口調できいた。

「東京です」

気分を誘うに相応(ふさわ)しかった。
江間川の流れが美しく澄んだように、炭坑が滅びて自然が息を吹き返したようである。
銀三は川の下手を迂回(うかい)して橋を渡った。何やら含むことがありそうな巡査の態度が気がかりだったが、いずれ勝次に会えば分るだろうし、たとえ分らなくても銀三にかかわりがなければ差支(さしつか)えなかった。
銀三の足どりは軽やかに弾(はず)んだ。新調の背広を着てきちんとネクタイを締め、腕には金張りのカレンダーつき時計が光っている。錦を飾るとまではいかないが、決して恥ずかしい帰郷ではあるまい。
ボタ山の裾(すそ)をまわった。
荒れ果てた川又の炭住長屋を見てきたばかりの銀三の眼に、泉口の長屋はかなり立派に見えた。よく見れば羽目板などもツギハギだらけなのだが、とにかく人が住めるようにできていた。建物は五棟、テレビのアンテナが立っているくらいだから、そうひどい暮らしでないことは確かだ。窓際に三色菫(すみれ)の鉢植を置き、あるいは、長屋と長屋の間の通路とも庭ともつかぬ地面にチューリップを咲かせている家もあった。
しかし、多くの人が住んでいるにしては妙に静かな炭住長屋だった。
「おっさん」
足を踏み入れた途端(とたん)に、銀三はうしろから声をかけられた。
突然だった。

「泉口というと？」
「あのボタ山の向うや」
巡査は指さした。
江間川を隔てて、長年の鉱害で痛めつけられた田畑が広がり、ボタ山はその間に腫瘍のように盛り上って散在しているが、巡査が指さしたのは中でも一際高いボタ山だった。遠く、英彦山につらなる山々が霞んで見える。
「渡辺勝次は、あのヤマで働いているんですか」
「何も知らんとかね」
「知りません。とにかく長いこと会っていない」
「本人に聞いちみるとええ。泉口のヤマもとうに潰れちしもうたけんど、あの炭住の連中は生活保護の厄介にもならんで後生楽に暮らしちょるげな。まあ行っときんしゃい」
巡査は思わせぶりに言った。

二

筑豊の春は酣であった。
ボタ山の荒涼たる風景とは逆に、川べりの柳はいっせいに緑色の芽を吹きだし、桃と桜と杏が、どきに花を開き、黄色い絨毯を敷いたような菜の花の風にさやぐさまは、むしろ行楽

「それでは、桶屋の銀という名を知らないか。いい名前じゃないが、桶屋といっても棺桶屋ではない。家業が風呂桶を作っていたのでそう呼ばれた。むかしは一流の箱師（列車内のスリ）として名を売った男だ。もちろん現在は堅気になっている」

銀三は余裕を取り戻して言った。長年の習練によるカンで、銀三は娘と話すうちにスリか万引の常習者とみた。とすれば、その手ほどきは勝次から受けたはずで、その間に銀三の名も聞かされているに違いなかった。

「おっさんが桶屋の銀というんか」

娘は利口だった。銀三が名のる前に先を越した。

「そうだ」

「違うな。桶屋はおっさんみたいにむくむく肥えておらんで。それにもっと男前のはずや」

「六、七年前まではわたしもこんなに太っていなかった。ひげも生やしていなかったし、太りだしてから勝次に会っていない」

「ふん」

娘は小生意気に鼻を鳴らした。相変らず信用しないらしい。

銀三は弱って名刺を出した。

「これを勝次に渡してくれ。そして、左顎に一円玉くらいのホクロがある男だと言ってもらえば分る」

「――」

振り返った。
デニムのスラックスをはき、男物の黒いナイロン・ジャンパーの胸を開いた女が立っていた。十七、八歳のまだほんの小娘といった感じだが、彫(ほり)の深い野性的な顔立ちは化粧をしなくてもかなり美しかった。切れ長の眼は鋭く、小鹿のようにしなやかで敏捷(びんしょう)そうな体をしている。
「何うろうろしてるんや」
娘は挑(いど)みかかるように言った。
「渡辺さんのお宅はどちらですか」
銀三はきいた。狼狽(ろうばい)気味だった。
「渡辺の何という名や」
「渡辺勝次」
「知らんな、そげん名は」
「ここにいると聞いてきた」
「逮捕(パク)りにきたんか」
「なぜ」
「とぼけてもちゃんと分るわ。おっさんの眼は刑事(デカ)の眼や」
「ちがう。勝次の友だちだよ。東京からわざわざ訪(たず)ねてきた」
「ごまかしにはのらん」
娘は毅然(きぜん)と首を振った。黒い長い髪が頬(ほお)にかかった。

娘は名刺を持ったまま行ってしまった。

「水をくれ——」

家の中で男の声がした。勝次の声だった。家人を呼んだ声のようだ。

その声を聞いて、銀三は懐しさがこみあげてきた。

娘は黙って名刺を受け取り、しばらく銀三の顔と見較べた。
娘が先に立って歩きだした。
――最後にワタ勝と会ったのはいつだったろうか。
銀三は思い出そうとした。やはり十年ほど前になるようだ。東京の有楽町で偶然出会ってコーヒーを飲んだ。どういう風の吹きまわしか、そのときワタ勝は堅気になると言った。両親が年老いたので、故郷へ帰って孝行をしたいという神妙な話だった。役人などと違って、スリは年季のいる稼業である。高度の技術と細心の注意力とを要求され、一人前になるまでには何度もヘマをやって刑務所の飯を食わねばならない。しかし、いったんこの技術を習得してスリ取る瞬間の甘美なスリルを味わうと、いわば麻薬の魅力に憑かれたと同じで容易なことでは足を洗えなかった。
それを、ワタ勝は見事に足を洗った。せっかく磨いた腕だったが、間もなく両親が死んだあとは、川又の炭鉱で元気に働いているという風の便りだった。
しかしいま銀三が帰郷してみると、どうやらワタ勝はもとの稼業に戻ったようだった。しかも子分を養成している趣さえある。
いったいどんな事情があったのか。
「ここや」
娘は長屋のはずれで足をとめた。
表札はなかった。貧しい長屋なりに、一応人間が住んでいておかしくない構えだった。

「東京では相変らずか」
勝次がきいた。
「いや」銀三は首を振った。「五年ほど前に思い切って仕事を変えた。意気がってみても、もう年齢だ。体が思うように利かなくなったし、刑務所の暮らしもガックリこたえる。それに暴力スリなんてのがのさばるようでは、この仕事も終りだと思った」
「仕事を変えたというと？」
「デパートの保安係だ」
「なんや、モサ（掏摸）を廃業したら、今度はモサを逮捕る側か」
「パクるのが仕事ではない。実を言うと、この仕事は本庁の刑事さんに世話してもらった。普通、デパートの保安係には刑事あがりの者が多い。しかし、モサを見つけるのは刑事より本職のモサだった者のほうがうまいだろうというわけだ。それで、堅気になりたいという話をしたら早速デパートを紹介してくれて、デパートの人事課も喜んで採用してくれた。店内でモサや万引を見つけたら、注意して店から追い出すのが仕事だ。そうすると、あのデパートには腕ききの保安係がいるという評判が立ってモサたちが近寄らなくなる。たまにむかしの仲間に出会うことがあるが、チョンチョンと肩を叩いてやればおとなしく出ていってしまう」
「なるほど考えたな」
「おれが保安係になってから、万引の被害が半分に減ったそうだ。モサの被害もめっきり減っている」

帰郷（二）

一

渡辺勝次は十年前とあまり変らなかった。額がぬけ上っているのはむかしからそうだったし、すばしっこそうな小柄な体つきもむかしのままだ。

しかし、疎(まば)らにのびた不精(ぶしょう)ひげにチラチラ白いものが光ってみえるのは、やはり十年の歳月を経たしるしだろう。眼尻の皺(しわ)にも五十[illegible]歳という年齢の蔭(かげ)が刻まれている。銀三と同じ年の生れだった。

銀三は歓迎された。

「女房の梅子や」

と紹介されたのは、水商売あがりらしい愛想のいい女だった。三十五、六歳、確か先妻も梅子といったはずだが、人のよさそうな色の小白い丸顔も先妻に似ていた。勝次の前歴を承知の上で夫婦になり、銀三についても日ごろ聞かせてあるから話に遠慮はいらぬという。

ただし勝次は、銀三が堅気になっていることをまだ知らなかった。

うな感じだった」

「あのヤマが潰れたのはとうのむかしや。おれたちがここに移ってからでさえ三年になる。底なしの不景気が何年もつづいた」

「菊地夫婦はどうしてるだろう」

銀三は姉夫婦の消息が気がかりだった。

「知らんのか」

勝次は呆れたように聞き返した。

「知らない。ずっと音信不通だった」

「菊地には娘がいた、その娘の居どころを知ってるか」

「いや」

「それじゃ分らんな。娘が北海道のキャバレーで働いていて、その娘を頼っていったという噂だ。おれがまだ川又にいる頃、ある日いつの間にか消えてしまった」

「生活に困っていたのか」

「腹がへると、よく夫婦喧嘩をしていた」

「――――」

銀三は気が沈んだ。幼い頃から縁の薄い姉弟で、そう思うとなおさら姉の顔を見たくなった。しかし、北海道のどことも知れぬキャバレーを探し歩くわけにいかない。

「そのうち、北海道をくいつめて戻ってくるさ」

「お給料はいいんですか」
梅子が口をはさんだ。給料がよければ、亭主の勝次にも保安係をやらせたそうな気配だった。
しかし、保安係の給料とスリの収入とでは比較にならない。危険がなく安定している代わりに、給料は人なみに暮らしていけるという程度だった。
梅子はその額を聞いて、がっかりしたように口を噤んだ。
「しかし女房が洋裁店をやっているんでね、おれの勤めなどは小遣い稼ぎみたいなものだ。結構気楽にやっている」
銀三は、惨めな生活をしていると思われたくないので付け加えた。
「おれは――」勝次はふっと溜息を洩らすように声を落とした。「こっちに来てからひどい苦労をした」
「今でも石炭を掘ってるのか」
「ボタ山を見れば分ったろう」
「うむ」
銀三は頷いた。
銀三が見たのは、ピラミッド型の稜線が崩れ、頂がまるく磨り減ってしまったボタ山ばかりだった。炭鉱の活動がとまり、新しいボタが積み上げられなくなったからである。それは死んだヤマの象徴だった。
「最初、おれは事情を知らないで川又へ行った。びっくりした。真っ昼間から幽霊がでてきそ

「警察でんがな」
「ハゲ寅のやつ、大阪でパクられたのか」
「起訴されたさかい、当分帰れへん言うたはりました」
「何でパクられたんや」
「チボの現行犯や」
「それで、おれによろしくと頼まれてきたのか」
勝次は不機嫌に唇を歪めた。大阪ではスリのことをチボという。
しかし用件がそれだけなら、野田がはるばると北九州までくることはなかった。彼がよろしくと頭をさげたのは、むしろ最初から彼自身のことらしかった。
「おっさんの下で使てくれへんやろか。やくざから足洗うて、更生したい思てますねん」
「あんた、やくざだったのか」
「大山組を知ってまっか」
「知らんな」
「知らんでもええ、もう解散しよったさかいに……」
野田はまだるっこしい口ぶりで話した。
大山組は名うての暴力団だった。表向きは商事会社の看板をかけ、本業の賭博のほかに大阪市内のバーやキャバレーにピーナツ、クラッカーなどのオツマミ類を卸しているが、市価より高い品を売りつけ、買わぬ店があれば子分をくりだして営業を妨害するという商法だった。問

勝次は慰めるように言った。
そこへ、彼を訪ねてきた二十四、五歳の男があった。

二

「野田いいますねん」
男は馴れ馴れしかった。ひょいと頭をさげて自己紹介すると、上り框に腰をかけて、
「ワタ勝のおっさんでっか」
無遠慮にきいた。人なつっこそうな細い眼と愛嬌のあるまるい鼻をして、派手なチェックの背広はその顔に似合わず、サイズもずんぐりした体よりやや大きかった。
「あんたは？」
勝次は毒気をぬかれたようだった。
「野田いいますねん」
「名前はわかった」
「よろしゅうお願いしま」
「どうも分らんな。だれにここを聞いてきた」
「ハゲ寅さんだす。曾根崎で一緒だした」
「曾根崎というと？」

三

梅子は途中から席をはずしたが、勝次と野田の会話を聞いて、銀三にはおよその察しがついた。
「苦労が多いようだな」
銀三は言った。
「気がついたか」
「とうに気がついている。ここへくる前に駐在で道を聞いたが、巡査の態度がおかしかった」
「わけを話そう」
勝次は眼を細めて記憶を辿った。
――彼が帰郷したとき、炭鉱の不況はすでに始まっていた。不況の原因は世界的潮流としてのエネルギー革命、石炭に対する需要が大きく変化して石油へむかい、しかもその石油に較べて、炭価が高すぎるせいであった。
しかし、それが相つぐ閉山に伴う炭鉱離職者への「黒い羽根」募金運動となり、あるいは三池争議となって世間の注目を集めた問題の背後には、つねに一方的な犠牲を強いられた坑夫たちの悲惨な生活が横たわっていた。このほうの原因はわが国石炭産業の構造自体のヒズミであり、また合理化政策の貧しさである。

屋からの仕入れも相場の半額以下で、やはり言うことをきかねば暴力を用いて商売の邪魔をするというあくどさである。

もっとも野田自身は、仕事にあぶれ空腹をかかえていたところを誘い込まれて組員になったので、せいぜい働いてオツマミの配達ていど、どうみてもやくざのガラではなく、足を洗うなどという文句自体がおかしくないくらいだった。

「とにかく、こう取締りがきつうてはあきまへん。組は解散したし、といって、わてはどこへも行くところがあらしまへんのや。それでハゲ寅さんに相談したら、おっさんとこへ行け言うてくれましたんねん。経験はおまへんけどな、真面目にやりまっさかい……」

「親兄弟はないのか」

「おまへん」

「ふむ」

勝次はムッと唇を結んだ。困った様子だが、頼まれるとなかなか厭とは言えぬ男だった。

「考えておくから、しばらく外の日にあたっていてくれ。今は客と話し中だ」

「おっさんも一緒に行けへんか」

「おれが一緒に行ってどうするのだ」

「ええお天気やで」

「つれが欲しければ、外へ出てから犬でも誘え」

勝次は怒ったように言った。

でスクラップになるのは見ておれん。まず、炭住の連中に働く意欲を起こさせなければ駄目だと思った。ところが、やつらは発破を仕掛け石炭を掘り炭車を転がすことしか知らん。ほとんどが宿なしカラスの渡り坑夫で、あちこちのろくでもないヤマを渡り歩き、人間以下の苦労には馴れているが、ヤマを下りたら甲斐性なしで赤ん坊と同じだった。そうかといって、そのまま放っておいたらみんなイワシみたいに腐ってしまう。どうや、わかるか」

「わかる」

銀三は深く頷いた。

確かに勝次は堅気となり、生れ変ったように働き、苦しい生活と戦ってきたに違いなかった。だが、自分だけならいつでも苦しい生活から抜けだせると思っても、彼の性格が仲間たちを見捨てさせなかったのだ。

「おれ自身も、ザリガニやタニシにはいい加減うんざりしていた」

「その気持もよくわかる」

「あんな暮らしは人間の暮らしじゃない。ネズミだってもっとましに生きている」

「あたりまえだ」

「しかし、おれが彼らを更生させるにはたった一つの方法しかなかった。度胸があって手先の器用そうなのを選び、それでまずケッパーの買い方から教えた」

スリの専門用語で、ズボンの尻ポケットをケッパー、同じく横ポケットをテッポーという。上着の内ポケットが内パーで、外ポケットなら外パーである。そしてスリ取ることを買うと称

その皺寄せはとりわけ中小炭鉱において苛烈をきわめ、川又鉱業所も例外ではあり得なかった。

「とにかく、いくら石炭を掘っても金にならない。給料代わりにパッチン（金券）をよこすが、そもそも売店に品がないのだから使いようがなかった。大根の葉や豆カスをまぜても飯を食える間はまだいい。カボチャやムシ芋で空腹をおさえ、ザリガニはもちろん、しまいには犬や猫まで殺して食った……」

いつの間にか、経営者は整備事業団にヤマを売って逃げてしまった。廃山である。置去りにされた坑夫が職場を移ろうにも、事情はどこも同じだった。

もはや、赤旗を振っても相手がいない。労働歌は飢えた子の子守唄にさえならなかった。

――アホくさ。

気力のある連中は新しい生活を求めてヤマを去った。

ヤマは荒れ放題に荒れた。

そして残ったのは老人、坑内事故による身体障害者、あるいは家族が多くて容易に移住できぬ者や災害未亡人だった。なかでも多いのが労働意欲を失った連中で、彼らはやがて生活保護法を適用されるようになると、貧しければ貧しいなりに、のんびり寝そべっていたほうがいいという心境に達した。なまじ失対事業の道路工事などで働いても、せっかく稼いだ分は保護の給付から削られてしまうので、どうせなら寝て暮らそうという生活方針である。

「おれはずいぶん考えた」勝次は続けた。「ヤマがスクラップになるのは仕様ないが、人間ま

帰郷（三）

一

渡辺勝次の話がつづいた。

彼に手ほどきをうけた者は、仕事熱心にたちまち技術を身につけていった。ドジをふんで捕まっても、前科がなければたいていデキモサ（出来心によるスリ）ということで釈放（しゃくほう）される。出来心の犯行にたいして、警察はつねに寛大である。逮捕されたときの弁解から涙の流し方まで、彼の指導は懇切（こんせつ）を極めていた。

「それだけじゃない――」勝次は言った。「彼らを社会（シャバ）へ送り出す前に、おれは標準語の教育もした」

「標準語の教育？」

銀三はわからなかった。スリはアナウンサーでも俳優でもない。なぜ標準語の教育が必要なのか。

「彼らが宿なしカラスの渡り坑夫だったことは、さっき話したとおりだ。東北からきた者もい

し、初心者は平場（ヒラバ）（交通機関以外の雑踏する場所）でこの技術をおぼえ、やがて練達して箱師となる。

勝次自身は箱師として知られ、仲間うちの評判だけではなく、かつては警視庁スリ係の刑事たちの間でもその技術を高く評価されていた。

「うまくいったのか」

銀三は話の先をうながした。

「うまくいきすぎた」

勝次は憮然（ぶぜん）と答えた。

もはや、生活保護をうける必要もない。

「……みんな腹ぺこの捨犬みたいなその日暮らしから、ようやく人間らしい生活ができるようになれた。今さらザリガニの生活へ戻れとは言えない。とにかく自力で更生したんだからな。破れた天井から月の光がさしこむ川又の炭住を引き払って、やがてこの泉口へ移ってきた。閉山したあとの炭住を、それぞれ稼いだ金で買い取ったのや。しかし……」

話し続ける勝次の顔色は相変らず冴えなかった。

およそスリの親分というものは、明治の末年に名を売った仕立屋銀次でも湯島の吉でも同じだが、自分では決してスリをしない。子分がスリ取ってきた品を、ズヤ（故買商）に売り捌いて上前をハネるのである。

ところが、品物なら親分の手を通すという手順が守られるが、現金となると親分の手を煩わす必要はない。子分はスリ取った現金を自分のふところにしまいこんで、収穫がなかったといえばそれまでだ。わざわざ正直に報告して親分にピンハネされる筋合いはなく、親分側が収入の何割を納めろと命じたところで、子分にトボけられたら糾明の手段がないのである。

勝次も現金に関しては半ば諦めていた。本来の目的が各人の自力更生であり、子分を養成してカスリを取ろうというケチな了簡ではなかった。

「……しかし——」

勝次の冴えぬ顔色は、そこに何か事情がありそうだった。

銀三は話の先に興味をもった。

れば関西からきた者もいる。それが各地の炭鉱を渡り歩く間に地方地方の方言が入りまじり、さらにここへきて北九州の方言がまじった。つまりもうデタラメ弁や。しかしデタラメといっても、長いことここに住みついていれば、やはりこの地方の言葉にいちばん影響される。それでは困る。逮捕(パク)られたときに出身地が割れて、度重なれば警察の手配がまわり、場所(ショバ)を変えても手口でわかってしまう。デキモサの言訳(いいわけ)どころか、あちこちで何人もパクられるうち泉口に仲間がかたまっていることを知られたらどげんしようもない。それで標準語を教えたんや」

そういう勝次自身も、依然ついこの辺りの言葉がでて、あるいは大阪辺の言葉遣いもまじるようだった。

どんな標準語を教えたのか心許(こころもと)ないが、しかし勝次の着想は悪くないと銀三は感心した。貧しいための出来心だと言って取調官(とりしらべかん)をホロリとさせることに成功すれば、いい加減な住所氏名を答えておいても、指紋照会や身許照会をされずに直(す)ぐ釈放される場合が多い。釈放されさえしたら、あとは白浪である。

新しい仕事を得た彼らの生活は、収入に比例して向上した。そうなると、おのずから欲がでて励(はげ)みたくなるのが自然だった。

しかし、それが小人数のうちはよかったが、勝次の表現をかりると、――類は友を呼び水は低きに流れた。資本いらずの仕事は親から子へ、兄から弟へ、そして仲間から仲間へと伝えられた。体の不自由な者を除くと、ついに大半の者が生活意欲に目覚めて、男はスリ、女は万引に精をだすようになった。

挨拶ぬきで尋ねた。
「腰石よし子？　女ですか」
勝次は刑事むけの間ぬけ面に変って聞き返した。
「よし子ちゅうたら女にきまっちょる」
「知りませんね、そんな名前は聞いたこともない」
「嘘ば言うたらいけんぞ」
「本当に知りません。その女が何かやったんですか」
「知らん女なら聞かんでもよか。だいたい、おれがここにくると軍艦マーチを鳴らすのはどういうわけかい。しかも、おれがここに入った途端にピタリととまっちしもう」
刑事は胡散臭そうな眼で銀三まで眺め、奥の部屋へ視線を走らせた。
梅子は台所に引っこんだきり出てこなかった。
「おまえがレコードば鳴らすのか」
刑事の視線が勝次に戻った。
「とんでもない」
勝次は慌てて首を振り、軍艦マーチには気づかなかったと答えた。
「ま、よかばい。その代わり、腰石よし子の家を教えち貰うけんな」
「ほかで聞いたらどうですか。とにかく、その女の名前に聞き憶えがない」
「ほかで聞くことはいらん。ここのことはおまえがいちばんよう知っちょる」

ところがその時、どこで鳴らしたレコードか、ふいに「軍艦マーチ」の音楽が流れた。
「あんた、マーチよ」
台所のほうから梅子の声がとんだ。
「わかってる」
勝次は泰然とあぐらをかき直した。

二

素早く走る靴音や下駄の音が聞こえ、ほんの何秒間か、家の外の気配が慌しく動いた。そしていつの間にか音楽がやむと、水を打ったように元の静けさに戻った。
「何かあったらしいな」
銀三はきいた。
「うむ」
勝次は渋い顔をして煙草に火をつけた。
そこへ、玄関の戸があいて四十歳がらみの色の黒い男が入ってきた。眼つき鋭くチョビひげを生やして、銀三にはあとで分ったことだが、地元の江間川署の刑事だった。勝次とは顔馴染らしく、
「腰石よし子の家はどこかい」

ときと野田が現れたときにレコードが鳴らなかったのは、二人ともよくよく刑事に見えなかったか、あるいは、見張りを立てているわけではないので発見者がいなかったせいだろう、と勝次は注釈をつけた。
「それにしても――」銀三が言った。「刑事がここにくるようでは困るだろう」
「困りきっている。どうにも統制がとれなくなった。てんでんバラバラに仕事をして、物を捌くときにしかおれの前にこない。ハゲ寅が大阪でパクられたと聞いたばかりなのに、今度はよし子が長崎でパクられた。こんな調子では、そのうちみんな刑務所で顔を合わせるようになるだろう。余計な仕事を世話してしまって、今さらのように後悔している。共済組合も赤字つづきだ」
「共済組合？」
銀三には聞き馴れぬ言葉だった。
「失業保険みたいなものだ」
「わからねえな」
「たとえば仲間の一人がパクられたとする。いや、現にパクられているハゲ寅を例にとれば、女房は愛想をつかして何年も前に逃げてしまったが、家には娘と伜が残っている。まだ五歳と四歳、起訴されたらハゲ寅はいつ帰れるか分らんのに、その間、この子供らの面倒を誰がみるか。それに、彼にはさっそく弁護士をつけてやらねばならんが、その弁護料もいる。彼が野田というアホみたいなのを寄越した本当の狙いは、ここの住所を警察で喋らなかった代わり

「それじゃ確かです。腰石よし子なんて女はここにはいません。いったい、どんな顔の女ですか」

「知らん、長崎から照会してきよった」

刑事は不機嫌そうに勝次を睨みつけ、よし子の家を教えろという質問を繰り返したが、やがて諦めて引き揚げた。

「全く世話のやける話や」

刑事の姿が消えてしまうと、勝次も不機嫌そうに呟いた。

泉口の炭住長屋には一つの掟があった。刑事の質問にはいっさい知らぬ存ぜぬで押し通せという決まりで、この点に関しては小学校にも上らぬ子供にまで徹底して教えこまれていた。泉口に現れた刑事は、どこで誰が検挙されたかを伝えにきたような結果に終るのである。

「軍艦マーチは、刑事がきたという合図か」

銀三はそう解釈してきいたが、泉口の状況はまだわからぬことが多かった。

「そうだ」

勝次は頷いた。

中古のポータブルを後生大事にしている男がいて、怪しい姿を見つけた者は直ちにレコード係に知らせ、レコード係が不在のときは遠慮なくその部屋に上りこんでレコードをかけるのである。多分プレスの間違いだろうが、レコードは裏も表も軍艦マーチで、それ一枚しかない。そして軍艦マーチが流れたら、身に憶えのある者は素早く姿を隠す仕組みだった。銀三がきた

三

ユキはボタ山の頂上に立っていた。銀三を勝次の家へ案内した娘である。
ユキの顔を眩しそうに眺めているのは、勝次に日向ぼっこを命じられた野田だった。
ボタ山の下から眺めると、二人はすでに親しそうに見えた。
「親なし子なら、うちと同じやな」
ユキの声は明るかった。両親は坑内のガス爆発事故で死んだのである。兄弟はなかった。
「おれは孤児院で育ったんや。親の顔なんか全然知らん」
「そのほうが思いださんでいいよってに、のんきでいいわ」
「そうやろか」
「そうに決まってるやないの」
「そうやろな。どこへ行たかて文句言う者あれへんし、警察でもずっとのんきやったさかいな」
「あんたみたいな人がどうしてボタかぶったん」
「ボタかぶった？」
「警察にパクられることや」
「恐喝だんねん」

に、早く弁護士をつけてくれということなんだ。組合費をちゃんと納めていれば、遠慮なく弁護士をつけてくれと野田に言伝てさせたろう。しかしこの半年ばかり、彼は全然納めていなかった」

「つまり組合というのは、パクられた者の留守宅の生活保障か」

「それと弁護料だ。収入の一割を納めることになっている」

「しかしハゲ寅は現金のモサ専門で、アガリを全部隠していたというわけだな」

「ハゲ寅は別名ケチ寅ともいう」

「そんなにケチか」

「ビールの泡も残さない。他人が残しても気にさわって文句を言う」

「腰石よし子も滞納してるのか」

「いや、女は万引したブツを捌かねばならん。自分では捌けんから、厭でもおれの手を通す。したがってアガリをごまかすことはできない。金を渡すときに組合費として一割ピンハネしてしまう」

「そうすると――」

銀三の脳裡に、ふいとある考えが浮かんだ。

ユキにきいた。

「知らんわ」

「腰石よし子だよ」

「聞いたことないわ」

「お前は正直な娘と聞いてきたんやけどな」

「正直に言うとるんやないの」

「よし子がお前に会いたがっちょる」

「どこのよし子や」

「長崎のよし子……」

刑事は失敗(しま)ったと気づき、慌てて言葉をのんだ。長崎のよし子では、ユキが知るはずはなかった。

「あんたのこと言うてるんよ」
「もちろんやがな」
「信じられへんわ」
「おれは何もせえへんけど、友だちがパクられたついでにいてこまされたんや」
「ほなよう分る。でも、ここでワタ勝の子分になるのはいいけど、あんただったら、しょっちゅうボタかぶって商売にならんやろ」
「そんなに難しい仕事だっか」
「易しゅうない。ハゲ寅がボタかぶるのも八度目くらいや」
「ハゲ寅さんは名人と違うのか」
「名人ならボタかぶらん。ハゲ寅はボタかぶりの名人や」
ユキは愉しそうだった。足もとのボタを拾いあげ、野球のピッチャーのようにモーションをつけて投げようとした。
「危い」
そのとき下のほうから声がかかった。
左ギッチョのモーションがとまった。
汗を拭きながら上ってきたのは、最前、渡辺勝次を訪ねた江間川署の刑事だった。
彼は初対面の野田を眺めて不審そうな顔をしたが、
「腰石よし子を知らんかい」

通りがかりに、勝次は小粋な感じのする狐格子のガラス戸を銀三に教えた。それまで見てきたなかではいちばん小綺麗な玄関で、これが東京の下町あたりなら、爪弾きの三味線につれて小唄の一節も洩れてきてもおかしくない造りだった。
しかし室内はシンとしている。
「家族はいないのか」
銀三は通り過ぎてきいた。
「亭主は五年前に坑内事故で死んだ。子供もいないのに、それ以来後家をとおしている」
「若いのか」
「三十三歳だが、四、五歳は若く見える」
「再婚する気はないのか」
「分らない。近ごろ妙に色っぽくなって、ハゲ寅が惚れているけど望みはないらしい。川又の炭住にいた頃の話だが、夜這いに入って失敗したことがある」
そのころのハゲ寅は、まだ女房に逃げられていなかった。しかし女房がいたところで、惚れたからには惚れぬく以外にない。ハゲ寅は頭がぼんやりするほど惚れぬいた挙句、ある晩、駅前の酒屋で飲んだ焼酎に勢いをかりて夜這いに及んだ。
しかし生憎月夜ではなかった。
「……最初ハゲ寅は成功したと思った。ところが、暗いうえに酔ってもいたので、よし子の家に忍ぶつもりで隣の自分の家に入ってしまった。そして、女房を抱いて口説いた途端に、横っ

帰郷（四）

一

梅子は、東京からはるばる訪ねてきた銀三をもてなすために買物に行ったが、それにしても、夕食までにはかなり間があるようだった。

銀三は勝次に誘われて外へ出た。夕食待ちの散歩だった。

仔細にみると、五棟の長屋のうちには人の住んでいない家もあった。空家は羽目板が破れて、窓ガラスも畳もなく、痩せた犬が寝そべっていたりした。人のいる家は一応修理ができていて、銀三たちが通ると、時折りあまり人相のよくないのが窓から顔を出した。言葉をかけてくる者はなかったが、大体において頬かむりすれば似合いそうな顔だった。つまり銀三の観察では、みんなコソ泥の人相でスリの人相ではなかった。他人のふところへ手を伸ばして、気づかれなかったらむしろ不思議という顔である。

彼らの顔を眺めて、銀三は勝次の苦労と焦躁が理解できた。

「ここが腰石よし子の家だ」

犯の役を果すわけだが、子供のいない女は、近所から赤ん坊を借りて出かけるのである。この場合、むろん赤ん坊の借賃を払わねばならない。
「その女房のほうは組合費を納めているのか」
「さっきも話した通りだ。万引した物は、おれの手をかりなければ金にならん」
「だったら、モサをやめさせて男にも万引をやらせればいいじゃないか」
「しかし、野郎たちはもうモサの味を覚えてしまった。今さらやめろと言っても無理だ」
「無理ではない。とっておきの仕事だが、おれはデパートの保安係をしていて、ひょいと思いついたことがあるんだ」
「ふうん」
勝次はあまり気のりのしない返事をした。

二

「第一に――」銀三はかまわず続けた。「モサはパクられる危険が多い。近頃はスリ係の優秀な刑事がふえて、全国どこへ行っても安心して仕事をできないというじゃないか。それに収入が不安定だ。せっかくいい仕事をしたつもりでも、財布をあけたら百円札しかなかったり、ひどいときはバスの回数券しか入ってないこともある。この危険率と不安定な収入を考えただけでも、モサが時代おくれになったことがわかる。どうだ、そう思わないか」

面を張り倒されて酔いがさめた。これはハゲ寅の女房に聞いた話だから確かだろう。ハゲ寅自身は、タヌキに化かされたようだとボヤいていた」

勝次は面白くもなさそうに話した。

ハゲ寅は曾根崎署に留置されているという野田の伝言だが、彼もまたスリを稼業とする器ではなさそうだ。このままでは、やがて泉口の住人全体が自滅するに違いない。

炭住長屋を通り抜けると、雑草の生い茂るにまかせて荒地と化した田畑にでた。眺めはひろびろと遠い山脈につづき、その山脈の霞むあたりに、江間川べりを彩っていた季節の花が、ここでも、やはり美しい色調を灰色の風景ににじませていた。どこを向いても自然はあくまでも美しく、そして、視界には必ず灰色のボタ山が映る風景だった。

「よし子とハゲ寅のほかにも、現在パクられてるのがいるのか」

銀三は、肩をならべて立ちどまった勝次にきいた。

「松山で服役中のが一人いる。組合費を滞納していた奴だから、こっちでは面倒をみない。そのぶん女房がせっせと働いている」

「万引か」

「ベタ買いをやらせている」

ベタ買いとは万引の一種である。単独で行う場合と共犯の扶けをかりる場合とがあるが、単独の場合は赤ん坊を背負って、ネンネコの袖下から盗んだ品をさしこみ、赤ん坊をあやすふりをしながら自分の背中と赤ん坊の間に品を隠して売場を離れる。単独犯といっても赤ん坊が共

ないという大きな隙がある。盗難防止の心がけもいいが、嫁入り前の娘が刑事みたいな眼つきになっては困る。彼女らは本能的に精神美容を心得ていて、あまり万引を気にしない。そんなことよりも、彼女らの多くは金持で男前がよくて前途有望な青年に見染められることを期待している」

「しかし、大の男がネクタイの一本や二本万引したって仕様がないだろう」

「ネクタイはつまらん。洋服、靴などのサイズ物は捌くときに単価を叩かれて損だ。オモチャもかさばるばかり、そうかといって、貴金属や時計類はショーケースに入っているから簡単に盗めない。ピアノやステレオは運び出すのが無理、とすると、残る狙いは呉服売場だな。おれだったら反物をやる。売台にごっそり積んであるやつを、五反や六反抜いても分りはしない。あとで棚卸しのときに分ったところで、棚卸しは三月に一度だし、デパート側は損勘定に落とすだけで滅多に警察へ届けない。届けたって、店のレッテルを剝がされてしまえばどこの品か分らず、盗品は絶対といっていいくらい返ってこないからだ」

「うむ」

勝次は唸った。いつの間にか銀三の話に引きこまれていた。

「デパートは儲かっている。東京ではほとんどの店が売場を拡張した」

「うむ」

「被害者はデパートという大会社であって個人ではない。つまり被害者はいないようなものだ。万引されて泣き叫んだり一家心中したりする者はいない」

勝次は低く頷いたが、まだ話に乗ってくる様子はなかった。

「もう一つ――」銀三は話に熱中するときの癖で短い口ひげをこすった。「これは、おれがモサを廃業する気になったいちばん大きな理由だが、汗水流して働いた人の金を、ほんの二、三秒で盗んでしまうのはよくないということだ。仏心でモサはできない。そんなことは分っている。しかし被害者の身になって考えると、収穫が多ければ多いほど後味が悪かった。その金は、そいつの命にも替えられるほど大切な金だったかもしれないからだ。おれたちに虎の子をスられたために、ある者は勤めをクビになり、ある者は世をはかなんで首をくくったかもしれない。そう思うと、おれはいつでも寝覚めが悪かった」

「驚いたな。銀さんはそんなしおらしいことを考えながら、長い間モサをやっていたのか」

「生存競争の世の中で、スられるやつが間ぬけだと言いたいんだろう」

「あたりまえだ。世界は決して平和ではない」

「待て。おれの話はこれから先が肝心なんだ。とにかくおれはデパートの保安係になった。毎日店内をぶらついている。そして万引を見つけたら、品物を取り戻し説教して帰らせる。常習犯なら警察送りだ。ところが、そのうちひょいと思いついたのは、デパートくらい安全確実な稼ぎ場はないということだ。警備がまず手薄な上に、スリ係の刑事は箱師を追うほうに忙しくデパートまでは眼が届かない。売場の店員はどうかというと、親切丁寧をモットーとして商品を売りつけるほうはよく仕込まれているが、盗難防止のほうは、盗まれたって自分の品では

刑事は間もなく他の二人と別れ、山の向う側へ下りて行った。
「あの娘もここの者か」
銀三はボタ山の頂上を指さし、刑事と間違えられた話をした。
「ユキらしいな」
勝次は眼を細めてボタ山の二人を眺め、彼女の境遇を話した。
「うちの隣にひとりで住んでいるが、すばしっこい娘でモサをやらせても一人前だ」
「しかしあれだけの器量なら、博多あたりのバーかキャバレーで勤まるんじゃないのか。芸者に仕込んだって相当の売れっ子になる」
「おれもそう思ったが駄目だった。世話する者がいて、博多でも一流のバーに勤めたけれど、三日でやめてしまった。しつこい客が彼女の手を握って放さなかったら、肩先をガブッと食いつかれて気絶した」
「本気で嚙んだのか」
「もちろん本気だろう。純毛の服が破れて、肩から血がでたそうだ」
「まるで狂犬だな」
「耳たぶを食いちぎられそうになった者もいる。それでも客の人気があって、店では辞めさせたくなかったようだが、本人が厭がって跳びだしてしまった。ここの水のほうが性に合っているらしい」
「道理で威勢のいい娘だった」

「うむ」
「しかも、白昼堂々と人が多勢いるなかでやるのだから、犯行が容易な割にはスリルもある」
「うむ」
勝次は唸りつづけた。
かりに捕まって警察へ送られた場合も、万引はスリより遥かに軽く扱われる。
確かに、部落の平穏を守るためには、男たちにスリをやめさせることが必要なのだ。そして万引へ転向させることができれば、盗品はすべて勝次の手を通ることとなり、全体の統制が保たれるのではないか。要するに、彼らがスリを始めたのは生活の手段である。生活の手段を他に求められるなら、強いてスリの危険を冒さなくてもいいはずだった。
「うむ」
銀三が何も言わないのに、勝次はひとりで唸った。

三

勝次が神妙な顔つきで唸っている間に、銀三は左手のボタ山を見上げて三人の姿に気がついた。
いちばん図体の大きいのが野田で、次が銀三を案内した娘、いちばん背の低いのが江間川署の刑事のようだった。

勝次は何度も頷いた。

「無理にすすめるわけじゃないぜ。困っているというから話したまでだ。惜しい仕事だが、そうでなければ話さなかった。もしブツの処分に困るようなら、おれが正札の半額で引き取ってやってもいい」

「よく考えてみよう」

勝次の返事には力がこもった。

銀三はふたたびボタ山を見上げた。何を話しこんでいるのか、ボタ山の若い二人はいっこうに下りてきそうになかった。

「そんなことより、さっきの話を続けてくれ。呉服売場の話だ」
勝次はもはや充分に乗り気だった。
「やるか」
銀三も自分の提案が受け入れられることは嬉しかった。
「とにかく方針を変えて何かやらなければならない」
「だったらデパートを推せんする。堅気になっていなければ、おれ自身がやりたい仕事だ。多少の訓練は必要だろうが、モサに較べたらぐっと易しい」
「銀さんは仲間にならないのか」
「おれはもう引退した男だ。デパートでサラリーをもらっていながら、同じ勤め先で二股かけるわけにはいかない。ここの連中がほかのデパートで稼ぐぶんには構わないが、おれのいるデパートで稼がれるのもやはり困る。義理があるからな」
「しかし反物ばかり買いこんで、ブツの処理がうまくゆくだろうか」
「大丈夫さ。デパートのレッテルを剝がして、暇なやつに行商させたっていい。いざとなれば、おれの女房が洋裁店をやっているから、その方面から捌く手もある。狙いは呉服売場と、それから婦人服地売場だ。正絹の小紋地で、一反一万二、三千円から二万五、六千円という見当だろう。婦人服地なら九十センチ幅の綿物で、メートル五百円程度、一巻でたいてい三十メートルくらいあるから、どっちをやってもかなりの金額になる」
「なるほど」

銀三はエレベーターの脇に立ちどまり、さりげなく婦人服売場のほうを眺めた。

一人の女と視線が合った。

三十歳前後、色っぽい視線だった。左手にかかえた風呂敷包みを胸もとに当て、涼しそうな白地の着物姿は小粋にみえた。銀三との距離は十メートルほど離れている。

女はすぐ視線を伏せた。

もし銀三がただの男だったら、このときの女の色っぽい視線を、男心を誘う秋波と錯覚したに違いない。

しかし銀三は、伊達に保安係として雇われているのではなかった。もとを洗えば前科七犯、その経歴を買われた男だった。女と視線が合った瞬間に電流が通じた。長年の経験により研ぎすまされたカンである。

スリ（モサ）の眼くばりを称して刑事はモサ眼と呼ぶ。獲物に眼をつけながら獲物を直視せず、周囲を警戒しながら犯行に移ろうとする寸前の、スリとしては最も気合の充実した一分の隙もない眼だ。

銀三の鋭いカンは、その女の視線をモサガンと睨んだのである。

しかし銀三が気づくと同時に、女もまた銀三に気づいたようだった。堅気になったとはいえ彼の眼もまたモサガンにちがいなく、刑事の眼つきもまた往々にしてモサガンに似る。つまりスリの側からみると、モサガンは刑事の眼ということになった。

——こいつは玄人らしいな。

モサガン

一

銀三は丸急デパートの三階をぶらついていた。三階は婦人、子供服売場だが、むろん買物が目的ではなかった。店内の防犯という職務のためである。十年ぶりに帰郷して渡辺勝次に会い、墓参をすまして東京に戻ってから三か月あまり経っていた。

もう真夏だった。帰郷した頃は江間川べりの桜が満開だったが、今は店内に冷房の風がわたり、中元大売出しも終りに近く、七階の特売場では夏物衣料品のバーゲン・セールが始まっていた。そして、外はカンカン照りの暑さだ。

時刻は正午をまわったところだった。保安係は売場の混雑の度合いに応じて各階に一人乃至(ないし)二人ずつ配置されているが、午前十一時から午後二時頃までは店員も保安係も交替(こうたい)で昼食をする時間なので、防犯面は自然手薄になった。もとより万引常習の専門家たちはこのデパート側の事情を心得ていて、この時刻は、一どきに客が立てこむ開店直後と店員の顔色に疲労が浮かぶ閉店間際の慌(あわただ)しい時刻とともに、店内犯罪の発生しやすい時刻だった。

銀三は追いついて声をかけた。

二

女は階段の踊り場で足をとめた。
「何でしょうか」
落ち着き払って、顔色ひとつ変えなかった。むしろ熱っぽい眼差(まなざ)しを銀三に注いで、相変らず気を誘うようだった。
「お買物をされたようですが、お勘定は店員にお申しつけ願いたいので……」
銀三は丁重(ていちょう)に言った。相手を犯人ときめてかかることは禁物(きんもつ)だった。もしそうでなかった場合に、人権蹂躙(じんけんじゅうりん)の何のと大騒ぎされかねなかった。
「さあ？　何のことかしら」
女はとぼけた。
銀三の経験によると、たとえ犯行現場を見られた者でも、十人のうち九人までが白とぼけて、素直に謝(あやま)る者は稀(まれ)だった。
「婦人服売場でお買物をなされたでしょう」
「いえ」
「わたしはこの店の者です。恐れ入りますが、保安係まで御足労願えないでしょうか」

銀三はそう思った。心が浮いた。仕事が愉しく、彼のいちばん幸福な瞬間だった。女に近づこうとした。

すると、ふいに女の姿が消えてしまった。

銀三は慌てなかった。女が売台の蔭にかくれたことが分っていた。

彼は依然さりげなく客の一人を装い、視野を広げた前方を見守りながら、女がいた売場のほうへゆっくりと歩いた。

日曜日なので客は混んでいた。うっかりしていると逃げられてしまう。和服の客も洋服の客も白地が多く、だから銀三の目標は、束髪ふうに結い上げた女の頭だった。額が広く、色白の頬はふっくらしている。

やがて、さらに十メートルほど離れたスカート売場に女の頭が浮かんだ。

ふたたび視線が合った。やはり色っぽく誘うような眼だったが、銀三は騙されなかった。

女の姿が、人ごみに紛れるようにまた消えた。

女は敏捷に売場を移動し、潜水艦のように浮かんでは、売台や客の蔭に沈んで潜行をつづけた。

銀三は辛抱強く冷静に追った。本職の刑事ではないから、犯行現場を押さえる以外に逮捕する権利も訊問する権利もなかった。逃げるから追うので、風呂敷包みの中身が気がかりだった。

ついに、女は銀三を撒いたつもりか、東側の階段へむかった。二階へ下りて行こうとする。

「失礼ですが――」

「もし間違いましたら幾重にもお詫びしなければなりませんが、その風呂敷を解いて頂けるでしょうか」

「つまらない物ですわ」

「つまらなくて結構です」

「ほんとにつまらない物なんです」

「どんなにつまらぬ物でも結構です。わたしどもは強制できません。もしお厭と申されるなら、やむをえませんので、警察の方にきてもらいます」

「…………」

女は恨めしそうに銀三を見上げ、しぶしぶと風呂敷をひろげた。

現れたのは、大柄の花模様をプリントしたワンピースだった。正札がついていて、デパートのラベルもそのままだった。むろん包装紙に包まれていたのではない。

銀三のカンに狂いはなかった。かりに包装紙がなくても、買った品ならレシートを渡されたはずだった。

「レシートを見せて頂けますか」

「…………」

女は急にしおらしく肩をすぼめて俯向き、と見る間に、涙が膝の上にポツンと落ちた。

「泣かれても困ります」

銀三は冷く突き放した。こうなれば、言葉遣いにも遠慮はいらない。

「あたし、忙しいんですけど」
「お手間はとらせません」
「妹がこの近くの旅館で待っておりますの」
女は親しそうに体を寄せたかと思うと、着物の袖に包みこむように銀三の手を握った。
女の感触は暖かく柔かだった。微かに香水の匂いもした。
「ご用でしたら、ご一緒に旅館へ行ってからお話しくださいません？」
女は甘く囁くような声で言った。そして、爪の先で銀三の掌を軽くコチョコチョッと掻いた。
こそばゆかった。こそばゆいだけではなく、ゾクッとする快感を伴った。銀三とて木石ではない。これが勤務に無関係だったら、喜んで誘いに応じたはずである。このように女性から誘われることは絶えて久しかった。
しかし、銀三は女の手を振り放した。この程度の色仕掛けにふらつくほど職責観念が甘くはなかった。
「とにかく、保安係まできて頂きます」
銀三は毅然として女を促し、五階家具売場の奥の、店員専用通路から保安係室へ導いた。
女は諦めたらしく、黙ってついてきた。
隣の休憩室には三、四人の同僚が体を休めていたが、保安係室には誰もいなかった。
銀三は女に腰をおろさせた。

直しがきくからである。
　銀三はうまく言い逃げられたと思った。
「子供はいるのかね」
「長女がまだ幼稚園にあがったばかりで、その下に二人おります」
「もちろん亭主がいるわけだな」
「はい。こんなことが主人に知れたら離婚されてしまいます。もう二度といたしませんから、どうぞお許しください。お願いです。ご恩は一生忘れません」
　女は涙をいっぱいに浮かべて、縋るように銀三を見つめた。
　じっと見つめられると、胸のあたりがもやもやして今度は銀三のほうが視線をそらした。心中大いに迷わざるを得なかった。すでに彼女を常習犯と睨んだ以上は、警察へ引き渡すのが本筋だった。常習者は再犯のおそれがある。
　しかしデパートの保安係は、犯罪を摘発するのが本来の目的ではなかった。目的はあくまでも防犯につきる。犯罪を未然に防ぎ、商品に被害を与えず、また、スリの指先から客の懐中を守ればそれでよかった。
　しかも、彼女の場合はたかがワンピースを一着盗んだにすぎない。どうみても常習くさいが、あるいは中立て通り素人の出来心だったかもしれないだろう。とすると、ワンピース一着で離婚されてはあまりに不憫ではないか。銀三の決断如何で、彼女の人生が暗く閉ざされることにもなりかねないのだ。

「申しわけありません」

「いつからこんなことをやっているんですか。見たところ、いい着物を着て、生活に困っているとも思えないが」

「いえ、きょうが初めてです。急いでいたものですから、つい出来心を起こして……」

「そんなことは言訳にならない。急いでいるからといってみんなが万引したら、デパートはたちまち潰れてしまう。売台の蔭に引っこんで、カニみたいに平べったくなって移動するなんて馴れたものじゃないか。とても素人とは思えない。それに、色仕掛けでごまかそうというのも心得ちがいだ」

「でも、本当に妹が旅館で待っているのです」

「あんた、東京の人じゃないのか」

「浜松からきました」

「わざわざ浜松から万引にくるとはご苦労だな」

「いえ、妹のお見合についてきたのです」

「このワンピースは、あんたが着るつもりだったのかね」

「お見合用に、妹に買ってあげるつもりでした」

「ふむ」

銀三はワンピースを掲げて床に垂らした。サイズは女の身丈より大きかった。万引常習者は、品物を捌きやすいようにスーツでもズボンでも大きいサイズを狙うのが常だ。大きければ仕立

い女をつれて入ってきた。

子供は四歳くらいの娘で、団地住まいの女房ふうの痩せた女が母親らしかった。

「静かにおし」

母親はヒステリックな声をあげて、泣きじゃくる娘の背中を叩いた。

保安係も母娘も手ぶらで、万引ではなさそうだった。

「どうしたんだ」

銀三は退職刑事の同僚にきいた。

「掻っ払いか詐欺か強盗か、娘の話が曖昧でよくわからないんだが……」

同僚は説明した。

母親がハンドバッグと買物袋を娘に預けてトイレに入っている間に、親切そうなオバサンなる者が現れて、娘の手からハンドバッグと買物袋を持って行ってしまったというのである。オバサンが何者かはもちろん不明、母親は血相変えて娘の手をひき、デパート中くまなくオバサンの行方を探したがついに分らなかった。そのオバサンは太っていて、娘にチョコレートをくれたということが分っているだけだ。

なるほど、娘の隙を窺って持ち去れば窃盗、その稚い知能に乗じ騙して持ち去れば詐欺、娘がしっかり抱えている物を強引に奪い去れば強盗罪になる。

どの道犯人が捕まってからの話だが、娘の証言が決め手になる。

悪質な犯罪だった。

銀三は見逃がすことにした。女に甘いからではなく、寛大を好むからである——彼は自分にそう言い聞かせ、自分でそう納得した。
「二度と間違った心を起こすんじゃないぞ」
「はい」
「あんたの名前も住所も聞かないでおく。帰ってよろしい」
「ありがとうございます。ご恩は決して忘れません」
「恩にきる必要はない」
銀三はいい気持だった。むかしは助けられる側だったが、現在は助ける側だ。助けられたときの有難さは今でも忘れられない。
「このワンピースはどうしましょうか」
「それをやるわけにはいかない。売場に戻しておくから、欲しければちゃんと金をだして買いなさい」
銀三はほんとにいい気持だった。二か月前、渡辺勝次にデパートの万引を推せんしたことなどはすっかり忘れていた。

三

万引女が何度も頭をさげて立ち去ると、ほとんど擦れ違いに、同僚の保安係が子供づれの若

シケ張り

一

銀三は口惜（くや）しかった。スられた中身は五千円札が一枚と千円札も一枚、それに半年分買ったばかりの定期券と身分証明書くらいだが、何よりも口惜しいのは、たかがワンピース一着の万引と思って見逃がした自分の甘さだった。

いい気になったのがまずいけない。階段の踊り場で女を呼び止めたとき、女はもたれるように体を寄せて銀三の手を握り、爪の先で掌（てのひら）をくすぐった。銀三はそんな色仕掛けにのらなかった。しかし女の誘いを潔（いさぎよ）く退けながら、その瞬間、彼の注意力はこそばゆい掌にとらわれていたに違いなかった。女のもう一方の手が風呂敷包みをかかえたまま彼の胸ポケットを探ったことに気づかなかったのだ。

見事な腕と度胸である。

銀三は感心したが、むろん感心している場合ではなかった。こう不恰好（ぶかっこう）にスられたのでは往年の名スリ師桶屋の銀が泣く。保安係の名誉にかけても、このまま逃がすわけにはいかなかっ

しかし珍しい犯罪ではない。

「まったくこの子はばかなんだから」

母親はまた娘を叩(たた)き、娘はいっそう声を張りあげて泣いた。

不用心な母親のほうが遥(はる)かにばかにみえた。

銀三は母親の金切り声と娘の泣声をあとに部屋をでた。

階段をゆっくり下りて、ふたたび二階の持場へ戻ろうとした。

そのときだった。銀三はふいと気づいて開襟シャツの左ポケットに手をあてた。心臓にじかに触れたようにギクッと体が震えた。財布を兼ねた革製の定期券入れが失くなっていた。

――あの女だ！

愕然(がくぜん)としてあたりを見まわした。

とうに女の姿はなかった。

っていない。
銀三は悄然と引き返し、三階の婦人、子供服売場に戻った。
意外な人物を発見したのは、それから間もなくだった。
──確かにあいつだ。
銀三は急いで記憶を辿った。細い眼、丸い鼻、ずんぐりした体……、ホテルのフロント係みたいに蝶ネクタイを締めて一見紳士ふうの服装をしているが、それもやはりどことなく板につかぬ感じで、確かにあの男に違いなかった。やくざの三下から足を洗い、ハゲ寅の紹介で勝次の子分になりたいと北九州まで訪ねてきた野田である。
あいつ、泉口に住みついたと思っていたが、いつの間に東京へきていたのか。
銀三は近づいて声をかけようとした。その後の勝次の消息も聞きたかった。
ところが、彼の足は二、三歩あるきかけてとまってしまった。野田につれの女がいるとわかったのだ。そのつれの女にも確かな見憶えがあったのである。
銀三は厭な予感がした。
つれの女はユキだった。

二

ユキは見違えるほど美しかった。小麦色の野性的な顔立ちには、純白のレースのワンピース

た。

一階へ駆けおりた。

東正面と南北に出入口があった。それぞれに売場案内のボックスがあり、案内係の女店員が客の応対に当っている。銀三はその三か所の案内係に、犯人の人相や服装を話した。

「それらしい女を見かけませんか」

「さあ……」

三人とも細い首を傾けた。

無理な質問だった。客の出入りは多く、これといった特徴もない客の顔をいちいち憶えているわけがなかった。

出入口は地下鉄へ通じる地階にもあったが、そこには案内所がない。

銀三はほとんど諦めた。かりに案内係が犯人の出てゆく姿を憶えていたところで、果たしてそれから先をどうして追って行けるか。店内をうろついているはずはないし、といって店を出たなら、とうに何処かへ消えてしまった頃である。

しかし、銀三はそれでもまだ諦めきれず、エレベーターで七階へ上った。あれだけ度胸のいい女だから、ことによると、七階の食堂で昼食をしているのではないかと思ったのだ。

だが、結果はやはり徒労だった。

混合っている広い食堂を眺めて、銀三は太い吐息をついた。空腹を感じたが食欲は起こらなかった。何か食べたいと思ったところで、ズボンのポケットの小銭入れには三、四十円しか残

手並みを見届けたいという気持が強かった。そしてどっちにするとも心を決めかねたまま、ずるずると事態を傍観した。
梅子たちの近くにいる女店員は、白いハンチングをかぶった中年の男に話しかけられていた。
三人の後ろ姿のうち、まずユキの肩が動き、つづいて梅子の肩が動いた。
仕事はこの一瞬に終ったようだった。
踵を返したとき、妊婦用のドレスを着た梅子の腹は臨月のようにふくらんでいた。沈着冷静、少しも慌てる様子がない。
その梅子を依然かばうように、野田とユキを加えた三人が一団となって出口の階段へむかった。
銀三は唖然とした。
これまで反物を万引する現場は何度も押さえているが、板芯に巻いてある洋服生地を一巻まるごと飲みこんだ現場は見たことがなかったし、手口としても聞いたことはなかった。
彼が職務に忠実ならば、直ちに万引現行犯として梅子を逮捕すべきだろう。急いで追わねば逃げられてしまう。
銀三は戸惑うばかりだった。
友人の女房を逮捕するなどということは到底できない。しかも、銀三はあのような手口を教えなかったし彼の勤め先を狙えとも言わなかったが、そもそも彼女らにデパートの万引をすすめた張本人は彼自身なのだ。

がよく似合った。どうみてもシックなセンスを身につけた都会の娘で、筑豊のボタ山にかこまれたおんぼろ長屋から出てきたとは思えなかった。野田のほうはいささかシマリがないが、二人が肩をならべてショーケースを覗く姿は恋人同士と受け取れぬこともない。

しかし銀三の体験によると、厭な予感はたいてい当った。野田とユキの姿を見つけたとき、その瞬間から彼らが買物にきたとは思わなかった。

銀三の職業意識は感度のいい磁石(じしゃく)のように働いた。

野田とユキの二人は、銀三に気づかぬ様子だった。ブラウス売場からランジェリー・コーナーへ移り、ぼんやり立ちどまってマネキン人形のブラジャーを眺めていた野田がユキに小突かれてまた歩き出し、やがて婦人服売場へむかった。

銀三は慎重に尾行した。

すると、その服地売場に銀三はまたしても顔見知りの女を発見した。今度は渡辺勝次の女房梅子だった。ベージュ色の地味なワンピースは腰のあたりがダブついてマタニティ・ドレス(妊婦服)のようである。しかしそれにしては腹部が目立たず、梅子は近づいた野田とユキに気づいたはずなのに、素知らぬふりで服地の陳列台の前に立った。

野田とユキが左右に分れ、梅子の両脇についた。店員の眼をさえぎるために幕を張ったのである。この手口はスリの応用で、スリの場合は相手の注意をそらすと同時に自分の手許(てもと)を見られぬために新聞紙などをつかう。

やめてくれ——、銀三は跳びだしていって引き止めたかったが、そう願う一方で、彼女らの

しかし確かに勝次である。新調らしい麻の背広を着て、胸ポケットには白いハンカチを覗かせ、一流会社の重役とまではいかないが県会議員くらいにはふめる変りようだった。不精ひげをきれいに剃って、顔の色艶もよく、泉口の炭住にくすぶっていた面影はない。しかし勝次に違いなかった。

「たった今、お梅さんを見たぞ」

「知っている」

「野田とユキが一緒だった」

「それも知っている。銀さんがいたことも初めから知っていた」

「おれをからかったのか」

「ちがう。おれたちの働きぶりを見てもらいたかったのだ。とにかくここでは話ができない。通行人の邪魔だ。屋上へ行こう」

勝次は落ち着き払った態度で促した。

エレベーターで屋上へあがった。

屋上は子供づれで賑わっていた。日射しは暑いが吹きわたる風は涼しく、明るい色彩のテントの下のベンチでは、気持よさそうに眠っている老人もいた。子供たちは元気よく跳びまわり、アイスクリームを舐め、木馬に揺られ、あるいは母親にせかされても熱帯魚売場から離れない少年がいた。草花売場のサルビアや松葉牡丹なども今が花の盛りのようだ。

「観覧車に乗ろう」

いずれにせよ、どういう次第でこういう成り行きになったのか、梅子たちに会って事情を聞かねばなるまい。
銀三はようやくそこまで決心して、梅子たちのあとを追って階段を下りかけた。
そのときだった。
「銀さん――」
横合いから声をかけられた。
振り向いた銀三の前に、渡辺勝次が嬉しそうな笑顔で立っていた。

三

銀三は呆気にとられた。夢を見ているのではないか――そう思ってこの場の状況を理解しようとした。
「勝次か」
念のためにきいた。喉が渇いて舌がもつれた。
「もちろん」
「ほんとうに勝次だな」
「そうだよ、忘れたのか」
「忘れはしない。自分の眼を疑っているんだ」

「東京タワーが案外近いじゃないか」
勝次は子供みたいに浮き浮きしていた。
東京タワーは観覧車に乗らなくても見えたし、かつて東京に住んでいたことのある彼は、デパートの屋上から眺める風景など珍しくも何ともないはずであった。
「話をつづけてくれ」
銀三は催促した。
「うまい」
勝次はコーラを一気に飲み干した。
喉が渇いていた銀三は、彼より前に飲んでしまっていた。
「何から話そうか」
「何からでもいい。とにかく、おれはお梅さんたちの仕事をみてびっくりした。眼の前が真っ暗になった」
「しかし鮮かだったろう」
「大胆にもほどがある」
「あそこまでゆくには、毎日のように猛訓練をしたんだ。これも銀さんが智恵を貸してくれたお蔭と思って感謝している。今ではみんなモサをやめた」
「万引に転向か」
「そのとおり。銀さんが帰ったあとで、おれは真剣に考えた。言われたことはいちいちもっと

勝次はスタンドでコーラを二本買ってくると、一本を銀三に渡して言った。
「あれは子供の乗物だ」
銀三は気がすすまなかった。滅入っているのだ。そうでなくても、観覧車などに乗る気はしない。
「大人も乗っているぜ」
勝次はいそいそしていた。
「なぜ、あんなのに乗りたがるのだ」
「天にも昇りたい気持だ」
「おれは土の中にもぐりたい」
「元気をだせ」
「だめだ」
「おれの話を聞けば元気がでる」
勝次は切符を買ってしまった。
銀三はやむをえず勝次にしたがった。
小型の観覧車はほぼ満員だった。下りた客に代わって、彼らは二人がけの座席に並んだ。大きな水車のような観覧車は、ゆっくりと、赤や青や色とりどりの弧を描きながら上昇する。スモッグのため遠景が霞んでいるが、空気の澄んだ日には御台場の海を見下ろし、反対側の遥か西のほうには富士山が見えるはずだった。

負っている。これもかなり重要な役だ。
「すると、きょうの仕事は四人がかりか」
「いや、都合で一人欠けたが、そのほかにもう一人店びきがいた」
観覧車は緩やかな回転をつづけ、銀三と勝次のボックスはちょうど半円を描いて頂上にきた。

もだった。梅子に相談すると三日間考えさせてくれと言って、三日経ってから賛成した。あいつはおれよりも頭がよくて用心深いから、その意味でもあいつが話に乗ってくれたのは心強かった。そして、さっそく手口の研究にとりかかった。第一方針は安全確実、そのためには共犯がいたほうがいい。集団行動となるとチームワークが必要になって、自然に組織の統制がとれるという寸法だった。そして、少しくらい頭が足りない奴にも間に合うように仕事の割振りを考えた」

「お梅さんが真打ちで、野田とユキが幕らしかったな」

「ユキは幕と飲ませ屋を兼ねていた」

真打ちとは万引の最も主要人物で、盗んだ品を体につけて持ち去る役である。

その真打ちのポケットや買物袋などに、陳列台から品物を落として入れる役が飲ませ屋だ。

万引用語で盗むことをノムという。彼らがノミに行く先は、決して酒場ではない。

「それで勝次の役は？」

「おれはシケ張りだ。だから銀さんの姿は初めから気づいていたが、銀さんなら逮捕りゃしないと思って安心していた」

「ふむ」

銀三はいよいよ気分がすぐれなかった。

シケ張りは保安係や店員に対する見張り役で、事前に危険がわかればもちろん仲間に合図をするが、犯行がバレて追われた時には、保安係や店員の追跡を妨害して真打ちを逃がす役目も

り稼いでおかねばならない」
「すると――」
銀三は思いだした。梅子たちの犯行現場近くで、しきりに店員に話しかけている中年の男がいた。横顔をチラッと見ただけだが、白いハンチングをかぶり、眼玉の大きい太った男だった。あいつがハゲ寅だったのか。
勝次は、そうだと答えた。ハゲ寅は保釈中なので、真打ちのように現行犯で逮捕される危険のある仕事はさせられないのである。保釈中に再犯を犯せば、保釈を取り消され収監されてしまう。
勝次の心遣いは行き届いていた。
「そのほかに欠けたのがもう一人いるというが、そいつにも役があったのか」
「もちろんあった。無駄な人間は集めない」
「言ってくれ」
「吸取りだよ」
勝次は誇らしげに言った。
五年前に足を洗った銀三にとって、つぎつぎと勝次の口からでてくる単語はすべて懐しいひびきを保っていた。
吸取りはこれもスリ用語だが、真打ちから盗んだ品をリレー式に預かり、真打ちが訊問された場合の安全を守る役である。盗んだ品を持っていなければ、真打ちはたとえその場で百人の

ズヤ

一

店びきというのは、万引を行う真打ちから店員の注意をそらす役である。買物客を装って店員に話しかけ、その隙に真打ちが品物をノミこむという組合わせだった。勝次の創案ではないが、一方で仲間が喧嘩をしかけその騒ぎに紛れて真打ちが仕事をするスリの手口に似ている。
「店びきもおれの知っているやつか」
銀三はうんざりしてきいた。店びきまで揃っていたとは気づかなかった。
「いや」勝次は首を振った。「しかし名前は聞いているはずだ」
「誰かな」
「ハゲ寅だ」
「ハゲ寅は、起訴されて拘置所に入っているんじゃなかったのか」
「二月ほど前に保釈で出てきた。弁護士の費用と保釈金は、おれがあちこちから借り集めて立て替えてやった。今後の弁護料も要るし、あいつには幼い子供が二人いる。今のうちにしっか

——なるほど。

一人が賛成すると、つぎつぎに賛成の声が挙がってどよめいた。安全で儲かることさえはっきりしていれば、あとの小理屈は無用であった。

直ちに演習が開始された。

水泳の練習が水中で行わねばならぬように、万引もまた机上の学習では意味をなさなかった。初歩からして実地演習である。女たちはすでに万引の心得があったし、男たちを仕込むにしても手口はすべてスリの応用だから、さして難しい訓練ではなかった。多少頭の働きが鈍い者にも幕になるくらいの役目が果たせぬことはない。

稼ぎ手の総員二十数名を四班に編成し、それぞれなけなしの貯金をおろしたり家財道具を売りとばしたりして、まずデパート側に怪しまれぬように服装を整えると、各班順繰りに博多のデパートへ出張して演習を始めた。

もちろん、勝次が陣頭に立って実地の指導である。

最初はハンカチ一枚、靴下一足の万引から次第に技を練って自信をつけ、およそ一と月たらずで優秀な者は巻反をノミこむに至った。

やがて九州一円の巡回演習が無事に終ると、もはや勝次の指導は無用だった。ある班が広島へとぶと、ある班はさらに足を延ばして大阪へとび、仕事場を拡大した。

盗んだ品は勝次と梅子が主になって売り捌くのである。

刑事に訊問されても、シラを切って言い逃れることができる。盗んだ品は素早く吸取りに渡してしまうのがスリの要諦（ようてい）であった。
勝次は、それを万引に応用したのだ。
真打ち、飲ませ屋、幕、シケ張り、店びき、吸取りと、同勢はこれで六名になった。
「しかし——」銀三は言った。「巻反（まきたん）をノミこんだ手並みには感心したが、あんな大きな物を抱えたまま店の外へ出るのは容易じゃないだろう」
「その点も充分考えてある。あれから直ぐ、梅子は二階のトイレに入ったはずだ。そして板芯を抜き、そうすれば生地は畳んで風呂敷（ふろしき）におさまる。冬はオーバー、春と秋はダスト・コート、夏は軽装で妊婦服という具合だ」
「真打ちはいつも女か」
「いざとなると、女のほうが欲張りで図々しくて度胸がいい。パクられた場合に泣きの手がきくし、第一、男が妊婦服を着るわけにはいかない」
勝次は組織の建て直しを決意したとき、長屋中の者を集めて全員万引へ転向するように説いた。——いいか、よく考えてみろ、今は何事においても個人経営の時代ではない、団結こそ力であり、オートメーションというわけにはいかないが、仕事もまた近代化されねばならない……。
勝次は懇々と説き聞かせた。
異論を唱える者はなかった。

銀三はまた厭な予感がしてきた。
「智恵を貸してもらったお礼に、おれたちの仕事ぶりを見てもらいたかった」
「それでわざわざ丸急デパートを選んだのか」
「もちろん」
「しかし、おれの勤め先ではやらないでくれと断(ことわ)ったはずだぜ」
「気にすることはない。そのうち銀さんは勤めを辞める」
「なぜだ。勤めているのは、このおれだぞ」
「実は、おれが上京した目的はもう一つあった。甘えるようだが、銀さんに物(ブツ)を扱ってもらいたい」
「何のブツだ」
「ブツといえば盗品に決まっている。おれ一人では扱いきれなくなったのだ。北九州にはおれの懇意なズヤが何人かいるが、みんな警察(サツ)にマークされているから、いつ手入れをくってこっちまでとばっちりがこないとも限らない。この際、専門のズヤを避けたいんだ。察してもらえるだろうが、おれも地元の警察とはウマが合っていない」
「おれにズヤをやれというのか」
「頼む」
「しかし、おれはせっかく足を洗って五年にもなる。今では堅気のサラリーマンだ」
「それは分っている。だが、デパートの万引を推せんして、ブツの処分に困ったら正札の半値

二

盗品を売り捌く場合、親分というのは仲介業の一種、あるいはズヤ（故買商）の片割れにすぎない。

ズヤの語源は系図屋（けいずや）の上部二音を略した泥棒用の隠語だが、この系図屋とか系図買いというのは発音を混同した当字（あてじ）で、窩主屋（けいずや）、窩主買いと書くのが正しい。窩は穴ぐらの意味とともに泥棒をかくまったり盗品を隠しておく場所を意味し、窩主（かしゅ）、窩家（かか）、窩贓（かぞう）などと用いられる。

余事にわたったが、親分は子分が稼いできた品をズヤに売り渡して、代金をピンハネするのである。

このピンハネは二割から三割程度が江戸時代からの不文律で現在も通用しているというが、勝次は已む（や）なくズヤを引き受けたので親分のつもりはなかった。したがって、彼が一割の上前をハネるのはごく良心的な売買手数料であり、さらにもう一割ハネることにしたのは例の共済制度を維持するためだった。

しかし連中の指導者たる勝次自身が、シケ張り役まで買って上京したのはなぜか。

「みんなが東京で仕事をしたがっていたのと、おれも銀さんに会わねばならぬ用があった」

勝次は言った。

「用というと？」

「――――」

銀三は黙って熱帯魚の水槽を見ていた。

三

水槽には、ネオンテトラとしるされた名札がかかっていた。群遊しているのはメロンの種子ほどの小さな魚だった。透明な墨色の体の中央に、輝くような青い神秘的な線が流れ、尾は美しく澄んだオレンジ色に彩られていた。

となりの水槽はスマトラといって一匹百円の値札がでている。縞模様の美しい敏捷そうな魚だ。

銀三は飽かずに眺めていた。デパートに勤め、これまで何度も屋上に上りながら、こうしてしみじみと熱帯魚を眺めるのは初めてだった。

「お魚はなぜ泳いでいるの」

銀三の近くで、幼い娘が父親らしい眼鏡をかけた男にきいていた。

「水の中にいるからだよ」

父親らしい男は優しく教えた。

「でも、なぜ泳がなければいけないの」

「いけないことはないけど、泳がなければ沈んじまうじゃないか」

で引き取ってくれると言ったのは銀さんだった」
「うむ」
「忘れたのか」
「いや」
銀三は憶えていた。ボタ山を眺めながら勝次の苦労話を聞き、つい同情してそんな話をしたのだ。その後勝次から音沙汰がないので忘れていたが、言われてみれば、確かにそう話したことを憶えている。今さら、あれは口が滑ったのだとは言えない。すでに勝次たちは銀三の思いつきを実行に移して、はるばる東京にまで乗りこんできたのである。
観覧車が一回転して、銀三たちのボックスは地上に平行した。
観覧車をおりた。
勝次は、今度は木馬に乗ろうと言った。
銀三はさすがに強く断った。五十づらをした男が二人ならんで、四つ五つの子供らと一緒に木馬に揺られる図など見られたものではあるまい。しかも銀三は勤務中だった。
どちらが誘うともなく熱帯魚売場にきた。
「銀さんに断られたら——」勝次が足をとめて言った。「モサをやめたと誓ったやつもみんなもとへ逆戻りだ。ブツが捌けなければ、煙草があって火がないようなもの、水道管を敷いたが断水しているようなものだ、どうしようもない。またてんでんばらばらにモサをやって刑務所の飯を食うか、人間廃業の腹ペコ生活に戻るしかなくなる」

しかし、勝次が専門の故買商を避けたい気持も銀三にはよく分った。安全確実が彼らの第一方針である。

「引き受けよう」

銀三は心を決めた。魚が泳がねばならぬように、人間もまた生きねばならない。そのために困っている者を、黙って見過ごせる彼ではなかった。

「ありがたい」勝次は銀三の肩を叩いた。「しかし忙しくなるぞ」

「暇なようでは仕様がない」

「勤めはどうする」

「ほんとに忙しくなったら辞める」

「カミサンが反対しないだろうか」

「女房は大丈夫だ。情にもろくて欲が深い。おれより乗り気になるだろう」

「それでは、今夜にでもおれたちのいる旅館へ来てくれないか。取り敢えずみんなを紹介しておきたい」

「みんなといっても、あと、おれが知らないのはハゲ寅くらいじゃないのか」

「いや、十二人きている。上京希望者はもっと多かったが、幹部以外はクジ引きで十二人に減らした。二班に分れて、他の一班は新宿で仕事をしているはずだ」

「一軒の旅館に十二人か」

「目立ってもおかしくないように、みんな観音講のタスキをかけてきた。諸国巡礼、南無阿弥

「溺れてしまうの」
「溺れやしないさ、魚だもの」
「あのアブクはなに」
「ポンプで魚に酸素をおくっているんだ」
「サンソって？」
「幼稚園で教わらないか」
「知らないわ」
「それじゃまだ知らなくていい」
父親は娘の手をひいて離れていった。
父と娘の会話を聞いているうちに、銀三は鼻の奥がツーンとしてきた。なぜだか理由は分らなかった。魚はなぜ泳ぐのか――溺れるわけではないが、泳がなければ沈んでしまうから……、確かにそのとおりだと銀三は思い、何故とは知らず鼻の奥がツーンとして、そしてふいに、義をみてせざるは勇なきなり、という言葉が浮かんだ。
泥棒に故買商はツキモノである。盗んだ品が金に換えられなければ、泥棒稼業は成り立たない。時計なら時計、電気製品なら電気製品と、それぞれの品別に専門の故買商が古物屋や質屋の看板をかけて盗品を扱っている。アシがつかぬように関東の品は関西へ流し、関西の品は関東へ流すというように流通機構が完備していて、国内で捌き難い品は遠く海外へ輸出する専門の業者もあった。

南天館

一

銀三は同僚に千円札を一枚借りた。まさか店内で財布をスられたとは言えないので、出がけに財布を忘れたと余計な言訳をしなければならなかった。

スリ時代にスった財布の数は数えきれないが、スられたのは初めてだった。つくづくスリはよくないと痛感した。そして、勝次たちを万引に転向させたのはやはりいいことなのだと思った。

日曜日なので丸急デパートの閉店は六時半だった。店を退けると、銀三は地下鉄で浅草へでた。

田島町の南天館へむかう途中、同僚に借りた金で一級酒を買った。勝次たちへ手土産だった。道順を聞いておいたから、南天館の所在はすぐに分った。二階建の屋根の上に赤いネオンサインを点し、木造ながらかなり大きな旅館だった。

愛想のいい女中が、銀三を二階の奥まった部屋に案内した。

陀仏だな、このたびは浅草の観音さまへお詣りという趣向だ。旅館でもすっかり信用して、ほかの客より待遇をよくしてくれているらしい」

勝次たちは、浅草田島町の南天館という旅館に泊まっていると言った。

ま、

「マーチのマーチ」

と簡単に名のった。軍艦マーチのレコード係をしているマーチという意味だった。数年前に上山田の小さな炭鉱で働いているときガス爆発に遭い、一命はとりとめたものの一酸化炭素中毒で記憶を失ってしまった男である。まるい鼻よりも頬骨が高く、四十五、六歳にみえるが、年齢はもとより名前さえ当人は思い出せない。

かつてその話を勝次に聞いたとき、

——上山田にいたころ呼ばれていた名前があるだろう。

銀三はそうきいてみたことがある。

——そのころからマーチだった。

勝次は答えた。つまり上山田の事故以前にもガス爆発に遭(あ)ったことがあり、記憶喪失も二度目らしいということだった。

本人は軍艦マーチを聞くと何か思い出せそうな気がして、いつも胸がいっぱいになるのだという。

マーチの隣りはいそという六十二歳の婆さんで、銀三とは泉口で顔を合わしていた。息子が水没事故で死んだあと嫁に逃げられ、三人の孫を育てているという気丈そうな婆さんだった。

つづけて銀三は大耳、上海(シャンハイ)、豊代の順に紹介された。大耳は耳が大きいから大耳で、トンカツみたいに薄く平べったい顔をした男である。上海は上海生れというだけでそのほかは誰も

勝次たちは酒盛りを始めていた。大きな食卓を囲んでずらりと並んだ顔ぶれのほとんどは、泉口で一度は見かけたことのある連中ばかり、銀三を迎えて年来の友人のように懐しそうな声をかける者もいた。

銀三は上座に招かれて勝次と並んだ。

「昼間は失礼しちゃったわ。ごめんなさいね」

勝次の向う隣にいた梅子が、すでに酔い加減の口調で言った。

「いや――」

銀三は言葉を濁した。わざと見逃がしてやったのだと言いたかったが、勝次に真相を知られているのでそうも言えなかった。

案内の女中はすぐに立ち去った。

「一応みんなの顔は知っているだろうが、寅さんだけは初めてだったな」

勝次はそう言って、銀三の向いにあぐらをかいていた男を紹介した。

「桜岡寅太郎です」

ハゲ寅はきちんと坐り直し、かしこまった挨拶をした。梅子たちが巻反(まきたん)をノミこんだとき、近くで店員に話しかけていた男に違いなかった。ずんぐりした体、眼玉はギョロッと大きいが眉がさがっているので凄味(すごみ)はない。頭はカッパの皿のように裾(すそ)の部分だけ薄い毛を残し、つい叩いてみたくなるほど見事に禿(は)げ上っていた。

つづいて紹介された男は、不精(ぶしょう)たらしく浴衣(ゆかた)の開きすぎたふところに右手を差しこんだま

盗品(ブツ)の処分は任(まか)せてもらう、と胸を張った。

二

乾盃が終り、めいめいの手酌(てじゃく)で宴席はふたたび賑やかになった。
「モサは駄目ね、パクられてぱかりいて、ちとも商売にならなかった。もっと早く万引教えてもらいたかったよ」
上海が銀三に話しかけてきた。
「そんなに何度もパクられたのか」
「何度も何度もね、しょっちゅうパクられてた」
「その代わり」勝次が口をはさんだ。「こいつは泣きがうまくて、一度も起訴されていない。たいてい三、四日で釈放された」
どだい節くれだった炭坑夫の指では、余程の習練を積まぬ限りスリは不向きなのだ。
「仲間が多くなると、どうしてもパクられる率も多くなるが、かかりつけの医者みたいに弁護士を決めておいたほうがいいんじゃないのか。得意先になれば、弁護士だって大切に扱ってくれる」
銀三は勝次にむかって話を変えた。
「九州方面は前から決まっている」

知らないし、知ろうともしない。濁音がうまく発音できないが、呼名さえあれば国籍や経歴などを気にする者はなかった。大耳と同様、三十歳前後から四十歳くらいまでという年齢的に幅の広い曖昧な人相をしている。

豊代は肉づきのいい胸をして、亭主が松山刑務所に服役中だが、よく食べよく喋り、彼女がジャガイモの山を崩したように笑いころげると、周囲はいつも明るく春の日が射したようで、人々は屈託を忘れていっしょに笑った。

勝次の紹介ぶりによると、誰と誰が幹部という定めはないが以上の八人が組織の幹部どころらしく、他に同行したはずの四人は都内の見物にでかけ、野田とユキも、夕食をすますとそうそうに連れだって外出したという。

紹介が一通り終った。

「上京前に話しておいたように、富田銀三氏がおれたちの仲間になってくれたからには、もう何も心配することはない。みんな仕事に打ち込めばいいんだ。お互いにしっかりやろう」

勝次が乾盃の音頭をとった。

「よかばい、張り切るとぞ」

ハゲ寅がまっ先に盃をあげた。

銀三は何となく心細くなった。しかし乗りかかった舟である。彼らと一緒に沈みたくはないが、

「およばずながら――」

きすぎた。それをカバーするために、幕をもう一人か二人ふやしたほうが安全だ」
「マタニティ・ドレスはどう？」
「よく似合った」
「あたしは赤ちゃんを生みたいわ」
梅子は皮肉そうに言って勝次を見た。
勝次は視線をそらして盃を重ねた。
そこへ、襖が開いて白っぽい着物を着た女が現れた。
銀三はその女を見た瞬間、心臓のあたりが冷くなった。

三

女は、婦人服売場でワンピースを万引した上、色仕掛けで銀三の財布をスった犯人に間違いなかった。
狼狽すべきは女のはずなのに、逆に銀三のほうが体が固くなった。
女はすました顔をして空いていた席に坐った。
「腰石よし子さんだ」
勝次が早速紹介した。
「初めまして——」

「東京はまだか」
「心当りはある。地元出身の弁護士で、もと大臣をやっていた坂下弁護士だ」
「顎ひげを生やしたじいさんだな」
「あのじいさんが立候補したとき、おれは頼まれて運動員をしたことがある。おれの顔を憶えているはずだ」
「そいつはいい。東京に事務所があるのか」
「新橋にあると聞いた。電話帳をみれば分るだろう。絶対にウンと言わせてみせる」
「そう意気ばらなくても大丈夫だ。あのじいさんなら、金さえ出せば必ずウンと言う」
「こっちは有権者だからな。しかも一票や二票の有権者ではない。ざっと百票は固いと吹っかけてやる」
勝次は、さっそく明日にも頼みに行くと言った。
「それから……」
銀三は逮捕者がでたときの対策を続けた。考えておかねばならぬことはいくらでもあった。仕事を無事に永続させるには慎重すぎることはなく、ハゲ寅やマーチ、大耳などの頼りない顔ぶれを眺めても、あくまで慎重を期し、いずれは足を洗う時期もきめておきたかった。
「銀さんが見て、あたしたちの仕事ぶりはどうだったかしら」
梅子が賞讃を期待するようにきいた。
「見事だったね。感心した。しかし巻反をノムのだから無理もなかったろうが、肩の動きが大

「悪い癖だわ」
「おれの財布をスったのも癖か」
「あれは出来心よ。申しわけないと思ってるわ」
「しかしいい腕だったな。おれを富田銀三と承知でやったのか」
「知らなかったわ。あんたのことはワタ勝さんに聞いて知っていたけど、もしあんたなら、あたしなんかにスられやしないと思った。もちろん試しにスったわけじゃないわ。でも、スってみて桶屋さんじゃないと分り、だからあんたの名前を聞いたりしないで泣いて謝ることにしたのよ」
「ところが、やはりおれが桶屋の銀だった」
「定期券の名前をみてびっくりしたわ」
「――――」
銀三は憮然（ぶぜん）とした。ひどく面目を失した話だった。色仕掛けに誘いこまれなかったのがせめてもの幸いである。
よし子は滅多（めった）に捕まるようなヘマをせず、たった一度だけ大阪のデパートで捕まったが、そのときの保安係は掌をくすぐられて好色な野心を抱き、誘われるままに旅館へついてきた。しかし寝室へ入る前に、トイレに立つふりをしてよし子は逃げることに成功していた。
今度の場合、よし子は万引を発見され、その代わり銀三は財布をスられた。この勝負は技術的に見る限り五分五分といえた。ただし人間的に甘いのは銀三のほうである。

よし子は依然顔色ひとつ変えず、ハゲ寅が惚れたという妙に色気のある眼差しで微笑さえ浮かべた。長崎で逮捕されたが、その後間もなく起訴猶予で釈放されたのである。

銀三は落ち着かなかった。酒席は東京における初仕事について話が弾み、銀三もみんなからいろいろ話しかけられたが、返事は上の空で、視線はついよし子へ走った。すると、そのたびによし子の色っぽく物問いたそうな視線に会ってしまうのである。彼女にくすぐられた掌の感触が、未だに残っているような気がした。

銀三はどうにも落ち着かぬまま、トイレへ行くふりをして席を立った。ひとりになって冷静に考えたかった。

「銀三さん――」

銀三はトイレへの曲り角で声をかけられた。

振り返ると、よし子が立っていた。あとを追ってきたのだった。

よし子の合図で、近くの空部屋につれこまれた。

「怒ってるのね」

よし子は銀三の財布を差し出し、中身には手をつけてないと言った。

銀三は財布を受け取ったが、怒っているのかどうかよく分らなかった。

「お蔭さんで、あのときは本当に助かったわ。あたし、決められた時間より早く行きすぎて、売場をぶらぶらしているうちについワンピースをノミたくなったのよ」

「やはり出来心かね」

合唱

一

銀三は席に戻った。
いささか長すぎた彼の小用を怪しむ者はなく、一座の連中は相変らず勝手な熱を吹き合っていた。
よし子は何事もなかったように、なにやら豊代と話しこんでいる。
「もし百万円あったら」大耳が盃を置いて言った。「おれは寅さんみたいに牛鍋屋ばやりたいなんちシビッタレなことは考えん。牛鍋屋のおやじにならんでも、金さえ出せば牛鍋なんか食えるけんな。好きな女とハワイへ旅行する」
勝次の話によると大耳もよし子に惚れていて、ハゲ寅とは恋敵なのである。
ただし両名とも振られ放しで、いかにせりあっても共倒れの形勢が濃く、互いに憎み合ったり同情し合ったりしている仲だった。
「フラダンスくらい江間川でん見られるばい」

「おれの財布をスった話は、勝次も知っているのか」
銀三はいちばん気がかりだったことをきいた。
「あんたに悪いと思って話さなかったわ」
「しかし勝次の話では、きょうの丸急デパートの仕事に都合で欠けた者があったと言った。その欠席者があんただとすると、理由をきかれたはずだろう」
「遅刻してごめんなさいと謝ったら、それで済んだわ」
「そうか」
銀三はようやく安心した。安心すると、女と二人きりでいることが気になってきた。
「こんなところを誰かに見つかったら大へんだ。かならず誤解される」
「あたしは構わないわ」
よし子は甘酸(あまず)っぱい声をだして、倒れるように体を寄せてきた。
銀三は慌てて胸ポケットを押さえ、返してもらったばかりの財布を確かめた。
「用心深くなったのね」
「いや、そんなつもりではない」
銀三は心をとり直し、おもむろに腕を伸ばして彼女を抱き寄せようとした。
しかし今度は彼女が許さなかった。銀三の腕の下を、素早くすり抜けてしまった。
銀三は急に落胆した。そして気づいたとき、ズボンのポケットに入れておいた小銭入れが消えていた。

よし子は冷く一蹴した。
ハゲ寅と大耳の胸中に無情の風が吹きぬけたようだった。肝心の彼女がこう冷淡では、論争もまったく無意味だった。
「よっちゃんやったら、百万円ば何に使うね」
マーチが口をはさんだ。
「入らん銭の勘定をして、夢を見たかて仕様ないわ」
よし子は話にのらなかった。現実的である。処世観はハワイ旅行の大耳より牛鍋屋開業のハゲ寅に近い。
「お婆あはどや」
マーチは質問の向きをいそに変えた。
「苦労はもう沢山じゃ、老人ホームへ行てのんびり暮らすとたい」
「孫はどげんするんや」
「一緒や」
「孫は老人ホームに入られんとやろうが」
「入られんことはなかばい、有料の老人ホームじゃけんな」
いそはそう信じているようだった。
マーチはつづけて同じことを上海にきいた。好奇心が強いのである。自分が不安なので、他人のことが気になるのかもしれない。

ハゲ寅が直ちに応酬した。
「あげなストリップ小屋のフラダンスとは違う。こっちはワイキキの浜辺や。椰子の葉蔭やで」
「ふん、おまえみたいな耳のいかいのと、どこの女がハワイへ行くもんかい」
「ま、黙っち見ちょればよか」
「ガキッコのごと何言うちょるとか。女ちゅうのはな、もっと堅実な暮らしば願うちょる。おまえは尻振りダンスば見て嬉しゅうなろうけんど、女は嬉しゅうも悲しゅうもなか。アホくさいばっかしや。椰子の葉蔭より牛鍋がええ。そうやろうが、なあ、およしさん」
ハゲ寅はよし子に声をかけた。彼女の同意を得て、大耳を失望させる魂胆にちがいなかった。しかし、よし子は彼らの会話を聞いていなかったらしく、
「なんや」
気のない声で聞き返した。
「好きな男に百万円入ったら、牛鍋屋のかみさんになるんとハワイへ連れてってもろてフラダンスば見るんと、どっちがええか、そげん言うちょるげな」
おいそ婆さんがスルメをしゃぶりながら橋を渡した。意地の悪そうな窪んだ眼を瞬き、お節介好きな婆さんだが、そのお節介が親切にみえることもある。おいそ婆さんがまとめた縁談は、きまって夫婦仲がうまくいかないのである。
「どっちもアホらして話にならんわ」

「何が決まってるのさ」
「参議院選挙の全国区に立候補する」
「あんたが？」
「もちろん」
「気がおかしゅうなったんと違うか」
大耳が口をだした。
「おれはな、爆発事故で記憶ば失うちしもうた。女房やガキがいたかどうかも分らん。自分の名前も分らんのや……」
だから立候補するのだ、とマーチは言った。そうすれば、全国の有権者に洩れなく配布される選挙公報によって哀れな記憶喪失者マーチの存在が知られ、妻子や友人が駆けつけてくれるだろうというのである。
「金もうけや売名のホウマツ候補とはわけが違う。おれは、おれが誰なのか知りたいだけや」
マーチはすでに立候補して演説会に臨んだように痩せた胸を張った。
「なるほど」
いちばん感心したのはハゲ寅と大耳と、それから坂下弁護士の選挙に駆りだされた経験のある渡辺勝次のようだった。
候補者は新聞に国費で顔写真入りの広告をだせるし、供託金（きょうたくきん）を没収されても百万円あればたっぷりお釣りがくる。

「おれは上海帰るね、金持ちの叔父さん心配して待ちくたぴれてるよ」

金持ちの叔父さんが上海にいるというのは、彼の口癖であり唯一の自慢だった。しかも世界的な大金持ちで、広い庭には噴水つきのプールがあり、大きな池にはイルカを飼っているという。それなら旅費くらい郵送してもらえばよさそうなものだが、住所を忘れてしまったので手紙を出せないというのである。

彼の話を信ずる者はなかった。

「あたしはラーメン屋をやる」

豊代がきかれぬうちに言った。

ハゲ寅同様に食べ物商売だが、ただし発想は違っていた。ラーメン屋に住み込んでいたことのあるぐうたら亭主を働かせる算段だった。

「今まではあたしばっかり苦労して、たまに父ちゃんが働く気い起こすと、すぐボタかぶって刑務所行きやもんね。とてもかなわん。父ちゃんが服役しとる間に百万円たまったら、今度は父ちゃんが稼いで、あたしは何もせんで遊ぶ番や」

「そいつは名案やな。そんときは、おれもラーメン食いに行くで」

マーチが賛成した。

「ひとの話ばかり聞いているけど、そういうマーチさんはどうするつもりなの」

梅子の声がとんだ。

「おれは決まっちょる」

ではなかった。侮られているようで、どうにも居心地がよくない。小銭入れを諦めるのは簡単だが、いまいましくてならないのだ。侮られても已むをえぬと分っているだけに、尚さら無念なのである。といって、騒ぎたてれば恥の上塗りである。

銀三はチビチビと酒を酌み、時にはハゲ寅たちの話題に加わりながらそれとなくよし子の様子を見るうち、いつの間にか、いまいましい気持がどこかへ消えて、彼女の容姿に見惚れている自分に気づき、それも腰が落ち着かぬ原因になっていた。

――ハゲ寅や大耳が惚れたのも無理ではない。

銀三は不本意ながらそう思った。

勝次の訓戒が一段落したところへ、外出していた野田とユキが戻ってきた。

「昼間はどうもご苦労はんで――」

野田が厭な挨拶をした。もちろん、丸急デパートの一件をさしているのである。

「東京見物をしてきたのか」

銀三は挨拶をぬかして話の向きを変えさせた。ついでに自分の気分も変えたかった。

「東京タワーでんね」

野田が答えた。

「景色がきれいだったろう。東京タワーからの眺めは、昼間より夜のほうがいい。赤や青のネオンが宝石みたいで、横浜のほうまでダイヤモンドみたいな光がつづいている。銀座辺の眺めはどうだった」

「おれが応援演説ばしちゃるか」
ハゲ寅は勇んで言った。
話が賑やかになった。もしマーチが当選したらと言う者まで出てきた。

二

「待て――」勝次はさすがに一同を制した。「マーチの立候補もいいが、みんな、どうも言葉遣いが直らんな。東京へ行ったら特に気をつけろと注意した。ところがどうだ、酒のせいもあるだろうが、まるっきり泉口にいたころと変らない。たとえ仲間同士で話すときも、普段の心がけが大切だ。そうしないと、ボタかぶったときつい地方弁がでてしまう。寅さんなんか、この女中と話したときはちゃんと標準語でやったじゃないか」
勝次は訓戒した。
「そうでしたな」
ハゲ寅は早速言葉を改めて頷いた。
確かに、銀三に保安係室へつれて行かれたときのよし子は、訛のない標準語を使いこなしていたのだ。それが、仲間うちになるとたちまち下地がでてしまう。そのほうが親しみやすくていいが、刑事に訊問された場合を考えると困るのである。
もっとも、親しみやすいとはいうものの、よし子に関する限り銀三は依然として心おだやか

マーチの発言で、話題がまた百万円の夢に戻りそうになったが、
「いっちょう唄うたるか」
大耳が炭坑ぶしを唄いだした。浪曲師のような低音で、声は悪いが節まわしは上手かった。かつて炭鉱の全盛時代には、都会の酒場までさかんに唄われた唄である。
しかし今、一同が聞く大耳の唄声には哀調があった。
「おれも唄うたるで」
湿っぽいのは彼らの肌に合わない。ハゲ寅のガラガラ声が加わり、マーチや豊代たちも唄いだして賑やかな合唱になった。
すると、いそと上海が浮かれたように踊りだした。
みんな程よく酔いがまわっている。
銀三は手拍子を合わせ、この連中の一人一人に百万円の札束を握らせてやりたい、と思った。

三.

銀三はほろ酔い機嫌で帰宅した。表戸が閉まっているので裏口から入った。
「酔ってるわね」
女房の春子が銀三を睨んで迎えた。不機嫌なわけではなく、亭主の顔を見ると文句を言いたくなる性質なのである。

「どうもこうもあれへん。スモッグで何も見えへんかったわ」
　ユキが代わって言った。
「混んでいたか」
　勝次は若い二人に席をつくってやった。
「団体客がぎょうさん来とったわ」
「やらなかったろうな」
「やらん」
「その包みは土産か」
　勝次は、ユキが食膳に置いた包みを指さした。スカーフでくるんであった。
「野田くんのプレゼントや」
　ユキはスカーフを解いた。青い水玉のワンピースだった。ただし正札は、店員が売り渡す際に切り取るはずのカードつきで、包装紙なしである。
「やっぱりやってきたんじゃないか」
「モサはやらん言うたわ」
「同じこっちゃ」
　勝次は慨嘆したが、ユキも野田も悪びれる様子はなく、ハゲ寅は野田の心意気を賞讃した。
「ユキちゃんにも知られんようにノミましてん、えろう難しおましたわ」
　野田はテレていた。

「東京における初仕事だ」
「明日もやるつもりかしら」
「怠けては暮らしてゆけない。彼らだって家族もちが多いから真剣なのだ」
「断れないわね」
「もちろん断れない。品物が捌けなければ、何のために万引したか分らなくなる。彼らにとっては、おれたちが命の綱だ」
「でも、正札の半額ではあたしたちが儲かりすぎないかしら」
「それでは七掛け位で引き取ることにするか」
「そんな必要はないわよ、せっかく半値に決まったんだし、むこうはタダで仕入れてくるんですもの」
「とにかく賛成してくれるんだな。明日、勝次がおまえに挨拶をしにくる」
「賛成も不賛成もないわ。あんたはもう引き受けてきたんでしょ」
「引き受けた」
「あたしはあんたの妻ですわ」
春子は急に色っぽい声をだした。欲がからむと色っぽくなるのである。
ただし――よし子の色気には遠く及ばない。
銀三は眼を閉じてそう思った。

銀三は馴れているから、女房の文句はあくびも同じことで全く気にならない。風よりも軽く聞き流して、抱えてきた風呂敷包みを春子の前に投げ出した。

今夜、帰りがけに勝次に会うことは電話で知らせてあった。

「大きな包みね、何なの」

「勝次からだ」

「あたしにお土産？」

「あけてみれば分る」

「嬉しいわ」

春子は勝手に嬉しがって風呂敷を解いた。

プリントの婦人服地と羽二重がそれぞれ一巻、その上に重ねてあった久留米絣が五反ころげ落ちた。

「まあ、こんなに――」

春子は細い眼を余計細くして、肥えた頬に深いエクボをつくった。

「早合点してはいけない。北九州の炭住あとにくすぶっていて、こんな土産を持ってくるはずがあるか。品物と正札をよく見ろ。プリントの服地には丸急の名札がついている……」

銀三は事の成り行きをこんこんと話した。

「すると、これはみんな万引した品なの」

春子は呆れたという顔をした。

った。
「しばらく会わないけど、富田銀三も元気でやってますか」
堅気になりたいといってきた銀三を、丸急デパートに世話したのが寺井だった。
寺井の取り調べは厳しかった。気が短くて、彼に怒鳴られると大抵のスリは震える。睨む眼つきは今にも食いつきそうだし、口が大きい分だけ顎が張っていて、スリにも猫にも好かれそうな人相ではなかった。
しかしどういうわけか、彼は多くのスリに親しまれていた。スリの夫婦に子供の名附親を頼まれたり、厄介な身上相談も持ち込まれることがよくあって、銀三もその一人だったのである。
「彼は丸急を辞めたよ。寺さん、知らなかったのか」
須藤は意外そうだった。
「辞めた……？」
寺井は初耳だった。
「もう半年以上前になるかな。血圧が高くてふらふらするから、しばらく静養したいと言って辞めた」
「そうか、せっかく堅気になって落ち着いたのにな」
「みんなも残念がったが、病気では已むをえない。彼も寂しそうだった」
「まさか保安係のサラリーが不満で、モサに舞い戻ったんじゃないだろうな」
「その点は大丈夫だろう。女房が洋裁店をやっていて、生活の心配はないらしかった。しかし、

捜査三課スリ係

一

それから一年ほど経った。
警視庁捜査三課の寺井刑事は、国電日暮里駅のプラットホームで偶然むかしの同僚に会った。
「寺さんじゃないか」
声をかけられるまで気づかなかったのは、電車を待っているラッシュ・アワーの群集に眼を光らせていたせいである。
振り返ると、丸急デパートの保安係に勤めている須藤だった。以前は寺井と一緒にスリ係の刑事をしていた男だ。
「これから出勤ですか」
寺井は言った。
「うん、毎日相変らずさ」
須藤は、現在の寺井のようにスリを張り込んでいた時代が恋しいのか、寂しそうな口ぶりだ

ってスリが熟練を要するように、スリ係の捜査技術も熟練が必要だった。

寺井はスリ係に配置されてから十七年になるが、同僚には二十年以上もこの道一筋というベテランもいる。

彼らはスリを捕まえるのが大好きなのである。スリたちが、スリ取る瞬間のスリルを味わうと麻薬に憑かれたように止められぬというが、刑事たちの側も、スリを捕える瞬間の喜びが他の何物にも換え難いのだ。もちろん、治安を守り悪を膺懲するという職責に支えられた仕事だが、正義感ばかりが情熱の源ではない。やはり好きだからこそ熱意も湧くのである。

寺井は生活のために警察官になった。しかし現在はスリ係を天職と信じ、定年まで平刑事で終ってもいいと心に決めていた。彼のような刑事ばかりがいるわけではないが、とにかく彼は仕事が好きで、もしこの世にスリがいなくなったら、生き甲斐を失って頭がボケてしまうにちがいなかった。

——桶屋の銀が高血圧か。

寺井は、間もなく着いた電車に須藤の姿が押し込まれて消えると、ふっと息を洩らすように呟いた。

何故とはなしに、寂しい気がした。

おれたちにはちゃんと挨拶して退職したのに、肝心の寺さんに挨拶しなかったとは彼らしくないな」
「いちいち挨拶させるほど面倒みていたわけじゃないさ」
「ところで寺さんは相変らずかね」
「ごらんのとおりだよ。好きでやっているんだから仕様がない」
寺井はやや自嘲的に言った。
捜査三課は一係から四係まであって窃盗犯を主に扱っているが、その第四係の一部がスリを担当していた。通称スリ係である。主任（警部補）以下七、八名ずつの三班に分れ、好きでなければ勤まらぬ苦労の多い仕事だった。
スリ係には、兇悪な殺人犯に対し捜査本部を設けて挑戦する捜査一課や、世間の注目を浴びて政官界を揺さ振る汚職事件を追及する捜査二課のような派手さはない。もっぱらどこの馬の骨とも知れぬスリが相手で、定められた出勤時刻は午前八時半だが、七時頃にはもう混み合う電車の中かプラットホームで鋭い眼を光らせている。退庁時刻もむろん延長である。夕方のラッシュ・アワーが終るまで職務を離れられない。うようよと人の集まる所がすべて仕事の現場で、つまりスリの仕事場と完全に一致する。昼夜を問わず、スリが現れそうな所なら映画館でも野球場でも縁日でも、何処へでも出かけて行く。
通常、すでに発生した犯罪を捜査して犯人を逮捕するのが刑事の仕事だが、スリ係は違う。これから発生するかもしれぬ犯罪を未然に察知して犯行の現場を押さえねばならない。したが

て極秘で調査をしているそうだが……」

「しかし、いくつものデパートで同じことが起こっているとすると、内部の者の犯行ではありませんね」

「もちろん外部だろう。それも一人や二人の仕事ではなく、かなりの共犯がいるはずだ。最近あちこちのデパートで呉服売場の被害もふえているようだし、ことによると、大がかりな万引グループが動いているのかもしれない。ご苦労だが、デパートを一回りしてみてくれないか」

森沢部長は、スリ係の刑事歴二十四年の最古参だった。職業の選択を誤って刑事になったが、本来はスリになればよかったようで、仕事に対する熱意は、スリになりそこなった欲求不満のせいではないかと思われるほど烈しかった。たまの休日でも滅多に家にいない。スリに定休日がない限り、彼にも休日はないのだ。まるで恋人に会いにゆくように、いそいそと人ごみへ出かけてゆく。

おそらく、東京で彼の顔を知らぬというスリはモグリと呼ばれても已むをえない。それほど彼の顔は売れていて、そのゲジゲジ眉毛や分厚い唇は、スリたちの間で警視総監の顔よりも知られている。そう顔が売れては仕事に差し支えるが、眼鏡をかけたり付けひげをつけたりして変装をこらし、敵の虚を衝いて検挙することも彼の愉しみなのである。

森沢部長が調査を命ずるからには、事件の背後にスリ師たちの匂いを嗅ぎとったものとみて間違いなかった。

万引の手口はしばしばスリに似る。

二

その日、寺井刑事は森沢部長からおかしな話を聞いた。寺井が、ラッシュ・アワーのホームで須藤に会ったという話をしたあとだった。その須藤の話の続きで、
「妙な万引のことを聞かなかったか」
森沢部長がきいた。
「妙な万引……？」
何のことか、寺井にはわからなかった。
「婦人服地売場から巻反が消える話だ」
「別にそんな話は聞きません。何ですか、巻反が消えるというのは」
「近頃よく耳にするんだよ。伊勢越や西横でも同じ話を聞いたが、つい昨日は高木屋デパートの話も聞いた。みんな同じ内容だった。巻反をまるごとノムやつがいて、その現場を見た者はいないが、婦人便所に板芯だけ抜き捨ててあるというんだ」
「巻反をまるごとですか」
「そうらしい」
「しかし、あんな大きなものをどうやってノメるだろう」
「おれもそう思った。デパート側もまさかという考えだ。現在のところでは内部犯行説が強く

直ちに踵を返した。
すると、声をかける間もなく両脇の男が女から離れ、女のほうはトイレに入ってしまった。男子禁制区域である。ここはデパートの社長でも立ち入るわけにはいかない。
寺井は待つ以外になかった。
女はなかなか出てこなかった。
女の小用はいったいに長いものだが、厳密にいえば小用を足したあとの化粧直しに時間をくうのである。
しかし今の場合は別だ。例の女は、巻反から板芯を抜くのに手間どっているに違いなかった。覗いてみたいが、うっかり覗けば痴漢と間違われるだろう。
寺井は、じりじりしながら七、八分は待たされた。
ようやく女がトイレから出てきた。相変らず大きな腹で、板芯がうまく抜けなかったのか、妊婦服のポケットに突っ込んだ両手で巻反を抱えている様子だった。
「もしもし――」
寺井は、あまり客の立てこんでいない階段近くまでやり過ごして声をかけた。
職務権限のない保安係と違って、警察官は職務執行法により『――異常な挙動その他周囲の事情から合理的に判断して何らかの犯罪を犯し、若しくは犯そうとしていると疑うに足りる相当な理由のある者』を停止させて質問することを許されている。犯人を検挙し、あるいは犯罪を予防するためだ。そのとき、もし相手が逃げたり質問に答えなかったりしたら、それを理由

寺井刑事は喜んで命令をうけた。

三

午後から、寺井は新宿署へ行ったついでに、手始めにまず新宿の京急デパートを当ってみることにした。

京急デパートの保安係室は四階の婦人服売場の奥にあった。

寺井はエレベーターで四階に上った。

店内は中元大売出しの最中で、しかも土曜日なので客が混んでいた。

保安係室へ向いながら、寺井の眼はおのずから売台に群がっている客のほうへ注がれた。万引犯人を張り込むつもりはなくても、部長の話が耳に残っているので自然に注意するのである。

ところが、この自然の心がけが彼に思わぬ発見をさせた。

妊婦服のようなワンピースを着た若い女が、ずんぐりした若い男と中年の痩せた男にはさまれて擦(す)れ違ったのだ。

寺井の視線がとらえたのは、その若い女の腹部だった。腹は脹(ふく)れていて構わないが、胸の辺りまで脹れすぎているように見えたのである。歩き方も、どこかぎごちなかった。

——巻反をノミこんでいるのではないか。

寺井のカンが素早く働いた。

「どうぞ、お願いしますわ」
女は動じなかった。
「やはり保安係室にきてもらったほうがいいと思うんですがね」
「あたしは構いません」
「それでは、あなたの両手をポケットから出してください」
「なぜかしら」
「職務上お願いします」
「変な刑事さんね」
女は一瞬もためらわなかった。ポケットから両手をだして、寺井の前にひろげた。
途端に、女の腹部がペシャンコになった。ポケットに入れた両手を張って、わざと腹部を膨らませていたのだ。
寺井は啞然とした。
「どうかなさいまして――？」
女はさわやかな微笑を浮かべた。
「いえ、人違いをしたようです。大へんな失礼をしてしまいました」
寺井は青くなって頭を下げた。
京急デパートを出ると、よし子は颯爽と舗道をわたりタクシーを拾った。トイレで、板芯を

に緊急逮捕するという奥の手が残されている。
「何でしょうか」
女は立ちどまり、平然と言った。色白の、頬のふっくらとした女だった。
「恐縮ですが——」
寺井は冷静に女を観察した。顔色ひとつ変えぬ図太さである。一見したところは中流家庭のおくさまふうだが、妙に色気のある眼つきなどはただの素性ではなさそうに思えた。
「お伺いしたいことがあるので、保安係室まで同行願えませんか。わたしは警視庁の者です」
「どんなご用ですの」
「お持ち帰りの品について、お聞きしたいことがあります」
「何のことか全然わかりませんわ」
「とにかく、ここで立ち話はできない。いっしょにきてくれませんか」
「おかしいわ。もっとはっきりおっしゃって頂けないかしら」
女は依然落ち着いていた。
しかし寺井の捜査経験によると、男より女のほうが往生際の悪い例が多かった。証拠をつきつけられても、なお涼しい顔をしてトボけきる才能が女にはある。
「ここではっきりさせていいんですか」
寺井は確信をもって言った。ポケットの中の両手を放せば、妊婦服の下に抱えている巻反がストンと足元に落ちるはずだった。

専従捜査班

一

　寺井刑事は妊婦服の女に頭を下げたが、内心は毛頭詫びる意思などなかった。それどころか、してやられた口惜(くや)しさで息がつまり、冷い汗が背筋を流れた。青ざめたのはそのせいである。女はトイレの中で板芯を抜き、服地を共犯者に渡して悠々と出てきたにちがいなかった。依然腹を脹らましていたのは、擦れ違った瞬間に寺井を刑事と気づき、わざとからかったのだ。

　女が立ち去ったあと、寺井はすぐに女を尾行して行先(ゆきさき)をつきとめようとした。

　しかしそれも空しく終った。横断歩道の赤信号で立ちどまっている間に、女はタクシーを拾ってしまったのだ。せめてタクシーのナンバーを控えておけばあとで調査できるが、それさえ他の車に遮(さえぎ)られて読み取ることができなかった。

　寺井は悄然(しょうぜん)と京急デパートへ戻り、掃除の婆さんに頼んで四階の婦人用トイレを調べてもらった。

　結果は予測どおりだった。一枚の板芯が寺井の失策を嘲弄(ちょうろう)するように発見されたのである。

抜いた洋服生地をよし子から受け取ったユキは、一足先に浅草の旅館へ帰っているはずであった。

の分を含めると被害は数回にわたっている。巻反を盗むのは常識的に考えて不可能であり、おそらく、開閉店時のドサクサまぎれに女店員が堂々と抱えて持ち出し、板芯を抜いてトイレに置き去ったにちがいない、というのが保安係全員の一致した意見だった。

となると、最も疑わしいのは服地売場の店員か仕入部の職員で、彼女らなら巻反を抱えて運ぶ現場を見られても怪しまれない。

保安係は彼女らを一人一人問い質すわけにもいかず、犯行現場を押さえるべく秘かに警戒していたのだ。

特定の容疑者は挙がっていなかった。

「……被害がうちだけではないというと、客を装った外部の者の仕事だな」

係長は寺井と同じ結論に達した。

「しかし――」寺井は言った。「あんな大きな物を、どうやったらノメますか」

「買物袋には入らない」

「かなり大きな風呂敷でも駄目だ」

「レインコートは？」

「この暑いのに、そんな服を着ていたらすぐ怪しまれる」

「それでは妊婦服」

「マタニティ・ドレスか」

係長の眼がようやく光った。

寺井はその足で保安係室を訪ねた。保安係はほとんど警察官出身で、寺井とは顔見知りだった。板芯が見つかった話をすると、

「またやられたか」

保安係長が嘆声を発した。

寺井は面目ないので犯人に逃げられたことを内緒にしたが、保安係長のほうも、そう盗難が多くては職責にかかわるので、犯人を捕えたときはその都度上司に報告するが、板芯だけ見つかったような場合はなるべく報告しないのである。

しかし犯人を至急捕えねばならぬことは、ほかの小粒な万引犯を捕えるより重大なことは言うまでもなかった。

「またというと、以前にも同じケースがあったんですか」

寺井はきいた。そして、伊勢越や西横でも同様の被害が続出していると附け加えた。

「伊勢越や西横でも？」

係長は少し心が安まったようだった。

「高木屋でもやられたそうです」

寺井は被害が京急に限らぬことを知らせて、係長をもっと安心させたかった。栄誉も屈辱も、平均化されると大した意味をもたなくなる。

「実は——」

係長は言った。婦人用トイレから最初に板芯が発見されたのは去年の夏だった。その後今回

言した。
犯行を目撃した者はいないが、相当大がかりな窃盗団が動いているに違いない。
捜査三課もそう判断した。グループにはスリの常習者が加わっているという森沢部長たちの考えにも同じ意見だった。
早速、大樫主任（警部補）以下森沢部長、寺井刑事ら七名による専従捜査班が設けられた。いずれもスリ係のヴェテランで、紅一点の赤松刑事はいかにも優しそうな美人だが、柔道二段の実力はかつて暴力スリを上野駅のホームに投げ飛ばして証明されている。
しかし捜査に本腰を入れるといっても、この種の手がかりがない犯罪では、デパートに張り込む以外に方法はなかった。根気よく、犯人が現れるまで待つのである。
普通、刑事は二人一組となって捜査に当るが、この原則は手不足のために守られぬことが多かった。
刑事たちは単独で各デパートへ張り込んだ。
服地売場と呉服売場を主眼にして、張込みは開店から閉店にいたるまで連日つづいた。Aデパートが定休の日はBデパートへ足を移し、刑事たちは、人として休暇をとらなかった。森沢部長のごときは、婦人服地売場を張り込むのに男一人では犯人に怪しまれることを案じ、妻や娘まで引っぱりだして同伴の買物客を装った。
しかし、犯人たちは逸早く捜査班の動きを察知したのか、寺井刑事が犯人の一人を捕え損って以来ピタリと犯行を停止してしまった。

「巻反のほかに、最近の被害で目立つ物はありませんか」
寺井は話をすすめた。
「あんたには聞かせたくない話だが、呉服売場の反物が時折りゴッソリとやられる」
「被害届けを出しましたか」
「いや」
「ぜひ出してください。そうすれば、わたしたちも積極的に捜査できる。巻反の犯人も呉服の犯人も、同じ仲間の仕事かもしれない」
「うむ」
係長は深刻そうに唸った。保安係の自力で犯人を捕えたいが、捜査三課の助力もかりたいのである。そしてまた、助力を断る理由がないことも分っているのだ。たとえ断っても、三課が独自で乗り出してくれば同じことだ。
係長は承知した。

二

寺井刑事が数日がかりで都内の各デパートを調査した結果、比較的被害の少ない丸急を除けば、他のほとんどが京急と同程度の被害を受けていることが分った。
寺井の報告を聞くと、森沢部長はたちまちいきり立って本格捜査に乗り出すことを上司に進

「いえ、そう悪いってほどのこともなかったんですが、その節はご挨拶に上ろうと思いながらついご無沙汰してしまって……」

銀三は散髪したばかりらしい後頭部に手をあて、恐縮そうに頭をさげた。

「心配していたが、顔色もいいし元気そうじゃないか」

「お蔭さんで大分よくなりました」

「まだ静養中かね」

「いえ、ぶらぶらしていても体が余って仕様がないので、つまらない仕事をやっております」

「つまらない仕事というと?」

「ほんとにつまらない仕事なんで」

「まさか、前の仕事に戻ったんじゃないだろうな」

「とんでもありません。戻ろうたって、もう指がナマになって駄目です」

「駄目かどうか、試してみる気も起こらないか」

寺井は冗談のつもりで言った。

「起きません」

銀三は生真面目に否定した。

寺井にとって、むかしのスリに会うことはむかしの同僚に会うより懐しかった。まして相手が更生していれば尚さらである。縄のれんをくぐり、たとえ酒の一本でも酌みかわしたかった。

しかし寺井は先を急いでいた。いつのことになるか分らぬ再会を約束して銀三と別れた。

やがて秋風が立った。
気の早い売場には、暖房器具や冬物の衣料品が出回り始めた。
それでも、捜査は依然弛みなく続けられていた。デパートに張り込む一方では、顔見知りのスリたちを訪ねてそれとなく情報をさぐった。
「万引をやるほど落ちぶれちゃいませんよ」
スリたちの中には、誇りを傷つけられたように憤然とする者もいた。
捜査班は次第に焦躁の色を隠せなくなった。
そんなある日だった。
寺井刑事は日本橋を歩いていて富田銀三にばったり出遭った。
久しぶりだった。
「銀さん――」
寺井は声をかけた。
銀三は驚いたようだった。驚くにも形態はさまざまあって、刑事に声をかけられたとき、迂闊な犯罪者は反射的に逃げる姿勢をとってしまう。銀三がつねにそうだったが、その発作のような癖はスリを廃業した後も直っていなかった。悪いことをしていなくても、刑事を見たら逃げる習性なのである。
だからこのときの銀三の驚きぶりも、寺井は例の習性と解して気にとめなかった。
「体が悪くて丸急を辞めたそうだけど、その後の具合はどうなんだ」

四人が一団となって階段へむかった。トイレへ飛び込まれたら前回の失策を繰り返すことになる。

寺井は保安係の応援を求める余裕がなかった。

「もしもし――」

寺井は直ちに追いついて声をかけた。

途端に、四人がさりげなく四方へ散った。

二兎を追うものは一兎をも得ずという。寺井は慎重を期し真打ちを逮捕することに焦点を絞った。つまりベルトなしのワンピースを着た女が真打ちで、腹が脹れていれば巻反をノミこんでいるに違いなかった。

寺井は立ち去ろうとする女の肩を叩いた。

女が立ちどまった。大きく脹らんだ腹部を、手提袋を握った両手でしっかりと抱えこむように押さえていた。

「お訊ねしたいことがあります。保安係の部屋にきていただけませんか」

寺井は警察手帳を見せて、慇懃に言った。

女は怯えたように丸い眼を伏せた。京急デパートで捕え損った女より若く、肌は黒いがおとなしそうな顔だちだった。

しかし顔だちにごまかされてはいけない。女は寺井を突き飛ばしても逃げたいのに、巻反を抱えていて動きがとれないのだ。

——銀三は元気そうだった、いい背広を着ていたし、生活が落ち着いている証拠だろう、五年あまりも実直にデパートの保安係を勤めた彼が、ふたたびモサに戻るとは思えない、あいつは堅気の生活が気に入ったのだ……、寺井はそう思って安心した。寺井に別れたあとの銀三が、何処へ行き何を受け取るかなどということは全く考え及びもしなかった。

三

捜査班の網に最初の獲物がかかったのはその翌日だった。

寺井刑事は午前中から西横デパートの張込みをつづけたが、正午を過ぎ、地階の食堂でカレーライスの昼食を済ませてふたたび四階の婦人服売場へ上った。

店内が割合空いていたので、巻反の陳列台の前にかたまっている四人づれはすぐに眼についた。

寺井のカンにピンときたものがあった。

後ろ姿だから人相は分らない。女二人に、男も二人だった。男の一人は白いハンチングをかぶっていた。

間もなく、そこへサングラスをかけた男が現れて近くにいた店員に話しかけた。

万引団の行動は敏速だった。肩の動きをほとんど気づかせぬ巧妙さだが、それを見逃がす寺井ではなかった。

「出来心でした」
「出来心にしては、ちゃんと仲間がいたようじゃないか。とにかく、話はもっと落ち着いた場所でゆっくり聞くことにしよう」
寺井は、万引の現行犯として逮捕することを女に告げた。
その頃、西横デパートに近い公衆電話ボックスの中では、ユキのまわしたダイヤルが銀三を呼び出していた。
「豊ちゃんがボタかぶったわ」
「逮捕(パク)られたのか」
「現行犯や」
「う……」
銀三は息がつまったようだった。

寺井は女を促(うなが)して保安係室へ連行した。そして空いていた休憩室を借りると、女の両手をひろげさせた。
巻反がストンと床に落ちた。
一巻二十四メートルの麻地で、一メートルにつき千五百円の正札がついている。二十四メートルそっくりあれば三万六千円相当の品だ。
寺井は嬉しくなった。唄を唄いたいくらいだが、そうもいかない。
渋い顔をして訊ねた。
「これはお買いになった品ですか」
「………」
女は俯向(うつむ)いて、クスンと鼻を鳴らした。
「黙っていては分らない。買ったのか盗んだのか、はっきり言ったらどうです」
「………」
女はまたクスンと鼻を鳴らした。
「泣いたって駄目だよ」
「すみません」
「謝(あやま)っても駄目だ」
「盗むつもりはなかったんです」
「盗むつもりがないのに、巻反がワンピースの中へ潜りこんだというのかね」

「あんたの名前をきいている」
「子供が生れてまだ三月しか経ちません」
「だからどうしたというのかね。巻反で腹を脹らましていたのは、妊娠時代が恋しかったわけでもあるまい。言いたくないことは言わんでも構わんが、改心しているなら正直に話したほうがいい。自分の名前くらい言えんことないだろう」
「……清水豊代」
ようやく、女は呟くような低い声で答えた。
「本名だろうな」
「はい」
年齢は二十七歳。
「住所は？」
「主人に知られると困るんです」
「知らせなければ、ご亭主が心配して探すだろう」
「それでもいいんです。警察にいることが分ったら、離婚されてしまいます」
「しかし、あんたはいつ釈放されるか分らないんだよ」
「裁判にまわされるんですか」
「分らんね。それは調べた上で検事が決めることだ」
「このまま釈放して頂くわけにはいかないんでしょうか」

坂下弁護士

一

寺井刑事は、哀れっぽく鼻を鳴らしている万引女を警視庁へ連行した。
地階の調べ室で、取調べには森沢部長があたった。窓ひとつない防音テックス張りの、二坪足らずの狭い部屋である。寺井刑事もその場に立ち会った。
「名前は？」
部長は太いゲジゲジ眉を寄せてきいた。静かだが、渋いドスの利いた声だった。
「申しわけありません」
「それが名前かね」
「…………」
「名前は？」
部長は語尾を強めた。
「あたしには主人も子供もいるんです」

「あんな大きな巻反をノムのに、一人の出来心ではできない」
「それが出来ちゃったのです」
「両脇に三人も人がいて、そいつらが気づかなかったというのか。一人でやるなら、まわりに人がいない隙にやるはずだ。いい加減なことを言うのはいい加減にしろ」
「…………」
女はじっと俯向き、黙ってしまった。
「なぜ正直に言えないのかね。黙っていたら不利になるばかりだ。かりに釈放したいと思っても釈放できない」
寺井が怒鳴ったので、森沢部長はなるべく優しく言った。
被疑者は、刑事の勢いに圧倒されて自白する場合と、優しい言葉にホロリとなって自白する場合と両様あるが、その間の呼吸を自在に使いわけるのが取調べのコツだった。
いずれにせよ、黙秘権は憲法で認められ、自白を強制することはできない。
しかし森沢部長や寺井刑事としては、あくまでもこの女の口から共犯の名前を聞きだしたかった。そうすれば、あとは芋づる式に検挙できるので、彼女ひとりを検察庁へ送ったところで仕様がないのだ。
「仲間に迷惑をかけたくない気持はよく分るがね、それとも、仲間の名前を喋るとあとでひどい目にあうと思って言えないのか」
部長は最大限に優しい声をだした。

「そうあんたの好都合にはいかんだろうな、すっかり自白すれば考えようもあるが……」
「すっかりお話しします」
「すっかりだぞ」
「はい」
「巻反を盗んだことは認めるのか」
「つい出来心を起こしました。主人が長の患いで、子供も産後の肥立ちが悪く……」
女は急に涙ぐみ、嗚咽をこらえるように唇に手を当てた。
産後の肥立ちといえば産婦をさすはずだが、まさか生後三か月の赤ん坊がさらに出産する道理はない。泣落とし戦術について、これは渡辺勝次の過ちだった。
「共犯は何人いたんだ」
森沢部長は泣落としにのらなかった。こういう手合いには馴れている。
「共犯なんかいません」
「嘘をつくな」それまで黙っていた寺井刑事が口をはさんだ。「幕になったのが三人いたじゃないか。おまえさんの両脇に男が二人と、もう一人水玉のワンピースを着た若い女がいた」
「いえ、そんな人は知りません」
「とぼけても駄目だ。サングラスをかけた男が近くで店員に話しかけていたが、そいつも仲間だろう」
「知りません。ほんとにあたし一人の出来心なんです」

森沢部長は自信たっぷりだった。
「清水豊代という女に見憶えがありますか」
「ないな、寺さんは？」
「わたしも見憶えがない。しかし初犯とは思えませんね」
「地方から出稼ぎにきた新顔かな。どこの訛か分らないが、妙な訛があった」
都内在住のスリなら、森沢部長か寺井刑事かどちらかが顔を知っているはずだった。
部長は取調べの経過を大樫主任に報告した。
背は低いがでっぷりと肥えた赤ら顔で、白茶けた顎ひげの男が大きな革鞄を小脇に抱えて現れたのは、ちょうどその報告が一通り終ったところだった。ずかずかと主任の前にきて、机の上に重そうな鞄をおろすと、
「暑いですな」
薄汚れたハンカチをだして顔を拭いた。
もう秋風の涼しい季節だったが、いつでも大きな鞄を抱えいつでも暑がっている坂下弁護士だった。内閣改造の幕間みたいな時期にほんの二、三か月大臣の椅子に腰かけたことがあり、その後は落選つづきで代議士稼業を諦めたらしく、トレイド・マークのような顎ひげについては、短い顎を隠すためだという説があった。
弁護士が刑事を訪ねるときは、刑事にとってろくな用ではない。
「清水豊代という女が逮捕されたでしょう。選任届けの署名をもらいにきました」

「…………」
女は口を噤んだきり、顔を上げようともしなかった。

二

森沢部長には「口説きの長さん」という呼び名があった。それほど女の被疑者を落とす（自白させる）のが上手く、かなり頑固な女でも、彼に説得されるとたいてい涙を流して自白するのだった。
ところが、清水豊代は涙だけ五人前くらい流して、自分の犯行を認める以外は何一つ口にしなかった。出来心の単独犯行という一点張りである。
こうなれば持久戦だった。
部長たちにしても、彼女がそう簡単にすべてを喋るとは期待していない。彼女が口を噤んで頑張れば頑張るほど、万引グループの団結力を暗示されて闘志が湧くのだ。彼女の黙秘は、かえって背後にいる仲間がいることを肯定していた。
部長はいったん取調べを打ち切り、指紋を採って、彼女を留置場へ引き渡した。
「頑固な女ですね」
捜査三課の大部屋へ戻ると、寺井刑事はふくれっ面で言った。
「頑固な女ほど、喋りだすと面白いように喋ってくれる。そのほうがあとで愉しい」

「それは結構だ。すると、すぐ釈放してもらえますな」
「ところが、共犯の名を全然言わないんですよ。本籍も住所も言わない始末でしてね、釈放は無理でしょう」
「そいつはいかん。わしがよく言い聞かせましょう」
「よろしくお願いします」
大樫主任は、この古狸め、と思いながら頭をさげた。

三

坂下弁護士が寺井刑事の案内で地下の接見室へ下りていくと、森沢部長は警察庁の鑑識課へ走った。
一度でも逮捕された者は必ず指紋を採られ、その指紋原紙は指紋番号により分類されて鑑識課に保管されているのである。
鑑識課は警視庁のとなりの人事院ビルの四階にあり、近いので、急ぎの場合は直接足を運んで指紋を照合してもらう。
清水豊代の指紋原紙は簡単に見つかった。
前科はなかったが、逮捕歴が二度あった。送致署は福岡と小倉、いずれも万引で一件は起訴猶予、他の一件は嫌疑不十分で釈放されていた。

坂下は言った。

被疑者の弁護人選任権は刑事訴訟法に定められていて、その選任届けは弁護人と連署することになっている。しかも選任された弁護人は、警察官の立会いなしで被疑者と会って話をしたり物を受け渡ししたりできるのである。

つまり悪徳弁護士なら、外部の仲間との連絡役をつとめ、こっそり悪智恵をつけることも可能だった。

「依頼人はだれですか」

大樫主任の表情はおのずから渋くなった。

「清水豊代の兄です」

「彼女に兄がいるんですか」

「知らん。とにかく兄だと言ってきた」

「しかし早いですね。逮捕してから一時間くらいしか経たないのに、どうして知ったんだろう」

汚職事件の大物でもないかぎり、弁護士は早くても逮捕後一日か二日くらい経って現れるのが普通だった。

「どうしてかな」

坂下はとぼけた。

「彼女は犯行を認めています」

「分りまっせん。顔見知りは幾人もおりますけんど、どの女が清水豊代かちゅうことが第一に分らんとです」
「泥棒村にいるのは何人くらいですか」
「だいたい四十人はいるでしょう」
「全員泥棒ですか」
「いや、泥棒とその家族を含めた数ですけん、病人や赤ん坊は寝ておるわけです」
「各地から照会してくるというのは、みんな窃盗ですか」
「そうです。以前はモサの照会が多かったのに、近頃は照会が少くなった代わりに、遠出をして万引をやっちょるようですな。先日も名古屋の中署から照会があって、被疑者の名は上海（シャンハイ）というんですが、該当者なしの回答を送りました。調査しても分らんかったとです」
「シャンハイなんて、もちろん通称か偽名でしょう」
「そうでしょうな」
「そいつの手口は分ってますか」
「さあ……照会書には、そこまで書いてなかったでしょう」
いかにも地方の小さな警察らしく、のんきそうな返事がつづいた。
地下の接見室では、坂下弁護士が金網越しに豊代とひそひそ話していた。
「いいかね、何をきかれても決して喋ってはいかんよ。かならず釈放させてあげるから、それ

本籍地不詳、住所は福岡県田川郡江間川町泉口、生年月日は本人の申立てどおりだが、高山ミノ子という異名が記載されていた。本籍不詳だから、どっちが本名か分らない。

森沢部長は逮捕歴を指紋照会書に記入してもらって捜査三課へ戻った。

「江間川へ紹介してみよう」

大樫主任は自分で警察電話を申し込んだ。

江間川署の電話口にでたのは、笠利という巡査部長だった。

「清水豊代ちゅう名には憶えがあります。泥棒村の者でしょう」

「泥棒村というと？」

「泉口に住んでおる連中を、わたしらはそう呼んでおるのです。あちこちから照会がきて、その度にわたしらは弱っとります……」

北は北海道から南は九州南端の鹿児島に至るまで、各地から泉口の住所を名のる被疑者の照会を受けて数年になる、と笠利部長は気勢の上らぬ声で言った。

その都度、江間川署の刑事たちは泉口を訪ねて調査するが、住民が非協力で、該当者なしという回答を送るほかないのだった。

「そんな具合ですけん――」笠利部長は言った。「該当者が泉口に住んでおるかどうか、正確なことは分らんとです」

「清水豊代は、亭主と、生れて三か月の赤ん坊がいると言っている。そういうことも分りませんか」

やがて十月

一

豊代に対する取調べは、翌日も翌々日も辛抱強く続けられた。

しかし彼女の口は、坂下弁護士に会ってからますます堅くなってしまった。

「どうしても共犯の名を言わんつもりかね。共犯がいたことは、ちゃんと寺井刑事が見ている、隠したって無駄じゃないか」

森沢部長は何とかして彼女の口を割らせたかった。

「白いハンチングをかぶっていたのが、おまえさんの亭主みたいだったたな。そうだろう」

寺井刑事も決めつけるように言った。

「知りません。あたしは、ほんとにほかの人のことは知らないんです」

「それでは――」部長が言う。「あんたは高山ミノ子という名前を持っているようだが、いったいなぜ名前が二つあるのかね。去年の三月に福岡で捕まり、つづけて四月にも小倉で捕まっている。つまり常習じゃないか。出来心では通らない。盗んだ品は誰に売る気だったんだ」

まで病院に入ったつもりでゆっくり体を休めなさい」
「刑事さんに悪くないかしら」
「そういうことは気にしないでいい」
「でも、あの部長さんやさしかったわ」
「刑事に惚れると刑務所で泣くよ」
「そうね、あたしは万引の犯人だったわ」
豊代は思い出したように言って微笑した。

「当人が知らないのに、警察だって知るわけない。しかし、本籍が分らなければ結婚届けもだせなかったはずだぞ」
「結婚は内縁なんです。籍は入っていません」
「清水豊代というのは本名だろうな」
「はい」
「しかし、戸籍が不明では本名かどうか分らんじゃないか。とにかく、住所くらいはっきり言ったらどうだ」
「主人に知れると困るんです」
「そんなことを言っていたら、いつまで経っても釈放されないよ。亭主に知られるより、刑務所へ行ったほうがいいのか」
「両方よくありません」
「福岡県の江間川に住所があるんじゃないのか」
「いえ、そこは以前住んでいた所です」
「現在は？」
「…………」
豊代は俯向いた。唇を噛んだ。すると、蛇口をひねったように涙が頬を伝わった。
部長はサジを投げざるを得なかった。
そうして取調べが停滞している間にも、坂下弁護士が小まめに現れて彼女に悪智恵をつけて

「売るなんてことは考えません」

「同じ生地の服を何着も作ったって仕様がないだろう」

「何も考えなかったのです」

「盗むことだけ考えたのか」

「それも考えません。気がついたら盗んでいて、刑事さんに捕まりました。なぜ盗んだのか、自分でもよく分らないんです」

「まるで夢遊病者みたいじゃないか」

「そうなんです。あたしは夢遊病なのかしら」

「ふざけるな」

寺井刑事がついに怒鳴った。

怒鳴られると、彼女は待ってましたとばかりに涙ぐみ、それきり口を噤んでしまうのだった。

森沢部長もさすがに手をやいた。

本籍地を追及すれば、一応、長野県のどこそこという返事をする。ところが、その本籍地役場へ照会すると該当者がいないという始末なのだ。

「おかしいわ、あたしは長野県で生れたんですけど」

「生れた所が本籍地とは限らない」

「でも、あたしはそこに本籍があると信じていたんです。それでは、あたしの本籍はどこなんでしょう」

「とにかくしぶとい婆さんでね、最後まで共犯の名を言わなかった……」
古谷の話によると、万引の手口ばかりか共犯を幕にして逃走しようとした状況まで豊代の場合とそっくりだった。
「婆さんはまだここにいるんですか」
それとも拘置所へ移監されたか、と寺井はきいた。
「いや」古谷は面白くなさそうに首を振った。「起訴されると間もなく保釈で出ましたよ」
「身柄引受人は？」
「婆さんの姪だという三十五、六歳の女がきて、引き取って行きました」
「その姪の名前や住所が分りますか」
「ちょっと待ってください」
古谷は席を立ち、書類を調べて戻ってきた。
「住所は台東区北稲荷町××、白雲荘内となってますな、近藤春子という名前です」
「どんな女でしたか」
「ポチャポチャッとした丸顔で、感じは悪くなかった」
「弁護士をつけましたか」
「つけた。逮捕して二時間くらいしたら、さっそく弁護士が現れた。逃走した共犯が連絡したに違いない」
「坂下という顎ひげの弁護士じゃありませんか」

ゆくのである。

二

豊代に対する取調べは送検後もいっこうに進まなかったが、捜査班はデパートの張込みを続行する一方、江間川署の回答と豊代の犯行状況をもとにして、全国の各道府県警察本部へ同一手口による万引被害の有無を照会した。

その結果は予想通りの事実となって現れた。被害はほとんど全国のデパートにわたり、それも一年ほど前から急激に目立ってきた様子で、犯人を検挙した例は名古屋市中署と横浜市伊勢佐木署の二件に過ぎなかったが、その二件とも犯人の住所が指紋によって福岡県の江間川署管内と分った。

中署に検挙されたのは通称上海という国籍不明の男で、スリの前科が一犯あったが、スカートを一着レインコートにノミこんだだけなので起訴猶予で釈放されていた。

伊勢佐木署に検挙されたのは渋野いそという女だった。手口は豊代の場合と全く同じで、和服のコートに巻反をノミこんだのである。前科はないが、万引の逮捕歴が四回、いずれも起訴猶予で、今回は一と月ほど前に横浜地裁へ起訴されていた。回答書に添付された写真を見ると、小意地の悪そうな金壺眼（かなつぼまなこ）の婆さんだった。

寺井刑事はすぐに伊勢佐木署へ行き、いそを逮捕した古谷という年配の刑事に会った。

寺井は北稲荷町へ向った。

渋野いそと春子の所在が分れば、万引団の動きも分り全員検挙の手がかりをつかめるかもしれぬ。

寺井はそう思った。

しかし上野駅に近い北稲荷町界隈は、上京者を対象にした旅館の多い地域だった。

もし制限住居の白雲荘が旅館だとしたら、とうに渋野いそは姪と称する女と共に姿を消しているだろうというのが寺井の気がかりだった。

書面上保釈の条件が整っていれば、裁判官は往々にして弁護士や身柄引受人の話を鵜呑みにする。身柄引受人の身元を確かめずに保釈を許可し、逃亡しそうな被告をみすみす逃がしてしまうことがあるのだ。そうなったとき、逃亡者を探すのは裁判官でも弁護士でもなく、振出しに戻って結局は警察の仕事になるのである。

寺井は上野駅で国電を下りた。

白雲荘はわけなく見つかった。古びた木造の二階建てで、やはり旅館だった。

おかみは迷惑そうに宿帳をだした。

いそが保釈になった日まで、近藤春子は一人で六日間泊まっていた。

「東京見物にきたと言って、毎日どこかへ出かけましたけどね、……いえ、そのお客さんを訪ねてきた人はいません、お婆さんのことも知りませんね」

おかみは答えた。

「そうです。どうして分りましたか」
「実は……」
捜査三課で取調べ中の清水豊代も、やはり坂下弁護士が駆けつけている、と寺井は事情を話した。
「そいつは仲間にちがいないな。近藤春子という女も連中の一味にちがいない。それで、清水豊代は起訴されたんですか」
「一昨日起訴されました」
「保釈は？」
「勾留中です。住所不詳のまま起訴されたから、保釈にはならないでしょう」
「どうかな。犯行を認めたそうだし、身柄引受人があれば保釈される可能性がある」
「その後、渋野いその公判は進んでいるんですか」
「さあ……、まだ判決があったという話は聞かないが」
古谷は裁判の結果にさほど関心がないようだった。つぎつぎと起こる事件の捜査に忙殺されているせいだろう。それに、事件は公判廷に移ると警察の手を離れてしまう。
しかし、寺井刑事は裁判の結果とは別に気がかりなことがあった。
伊勢佐木署をでた足で横浜地裁を訪ねた。
いその公判はまだ第一回の期日が未定で、保釈中の制限住居は身柄引受人近藤春子方となっていた。

た。神戸市内のデパートに数名の万引団が現れ、そのうちの一人が巻反をレインコートの下にノミこんだので保安係が逮捕しようとしたが、共犯らしい男に邪魔され全員逃がしてしまったというのである。

「やはり地方で稼いでいたのか」

森沢部長の心配が的中していた。いくら熱心に都内のデパートを張り込んでも、無駄な苦労をしていたわけだ。

部長は巣鴨拘置所へ行った。どうしても豊代の口を割らせねばならなかった。

ところが、部長はそこで愕然とする事態にぶつかった。豊代は保釈で出所していたのだ。

「いつですか」

「昨日出たばかりです」

拘置所の係官は、部長の驚きが解せぬといった顔つきで答えた。

保釈後の制限住所は新宿区百人町三の××、富士荘内、近藤春子方。

身柄引受人もまた近藤春子。それに坂下弁護士が連名で加わっていた。

渋野いそのときと全く同じではないか。

部長は念のために富士荘を訪ねた。アパートのような名前だが、やはり旅館だった。

近藤春子はここでも六日間泊まり、豊代が保釈された日に姿を消していた。見事に、油断していた捜査班はウラをかかれた恰好である。裁判所へ問い合わせてみると、制限住居変更の届け出はないという。考えるまでもなく、豊代は逃げたのだ。

春子の住所は京都市云々と記してあったが、もちろんデタラメだろう。とにかく、現に泊まっていなければどう仕様もない。
寺井は諦めるほかなかった。

三

豊代が逮捕されてから、万引団は都内における活動を完全に停止してしまったようだった。専従捜査班の熱心な張込みにも拘らず、それらしい犯罪はプッツリあとを絶った。
「地方へ移動しているのかな」
森沢部長は溜息まじりに呟いた。
豊代は、起訴されてから十日後に東京拘置所へ移監された。それまで、もし豊代が保釈になったら行先を突きとめてやろうと寺井刑事は構えていたのだが、彼女からも弁護士からも保釈の請求はなかった。
やがて十月の声を聞き、きれいに黄葉した日比谷公園の銀杏が散りはじめた。
豊代の第一回公判が近づいたが、共犯の存在を立証することは難しいだろうという検事の意見だった。
捜査班は焦躁にかられた。このままでは面目が丸つぶれで、引くにも引けなかった。
そこへ、十月の半ばになって兵庫県警本部から捜査班の背中を叩きつけるような情報が入っ

坂下は白茶けた顎ひげをしごき、しらじらしい嘘をもっともらしい顔つきで言った。

その頃、豊代は銀三の家の二階で春子とくつろいでいた。

「明日から、もりもり稼がんといけんわ。弁護士にごっそり儲けられてしもうた」

「その代わり、保釈になったんだからいいじゃないの。弁護士の費用は、ワタ勝さんが積立金からだしてくれたわ」

春子は慰めた。坂下の指示で、身柄引受人になるため近藤という偽名を用いて旅館に泊まったが、その経費も個人負担ではなく、例の積立金から支出されることになっていた。

そんな話をしているところへ、やがて銀三が大きな風呂敷包みをかつぎ、どこやらから帰ってきた。

部長は坂下弁護士の事務所へ押しかけていった。
「あの女が逃げた？」
坂下はびっくりしたように聞き返した。
「ご存じじゃなかったんですか」
「知らん」
「富士荘にはもういません。だいたい、あそこは旅館ですからね。制限住居になるような所ではありません」
「驚いたな、実に驚いた」
「近藤春子という女のことを信じていたんですか」
「もちろん信じていた」
「しかし、先生は以前にも彼女に騙（だま）されていますよ。横浜地裁に起訴された渋野いそという婆さん、その婆さんも近藤春子と先生が身柄引受人になって保釈された。そして、そのときの制限住居も旅館でした。清水豊代と同じく、保釈と同時に行方不明です」
「すると、わたしは二度も騙されたわけか」
「清水豊代の住所を教えてください」
「そう言われても困る。責任は痛感するが、知らぬものは仕様がない」
「近藤春子の住所も分りませんか」
「分らんな。わしは信じやすく騙されやすい。まことに残念だ」

にひっそりしていた。
「へんな男がいたな」
森沢が言った。
食堂でいっしょになった中年の男のことだった。支線に乗り換えてから、小倉で買ったらしい駅弁を食べていたのに、森沢たちが食堂に入ると、その男も続いて入ってきてまた朝食を食べたのである。よく腹のすく男だと言ってしまえばそれまでだが、頬骨(ほおぼね)の高い貧相な顔に似ず、服装はかなり高級そうな仕立てで、今どき流行(はや)らぬ中折帽(ソフト)を水平にかぶり、赤い水玉の蝶ネクタイを締めステッキを腕にかけた姿は、どうにも変テコな恰好(かっこう)だった。しかも、飯のほかに注文したのが味噌汁に納豆(なっとう)で、丼(どんぶり)飯のお代わりをした。
「あの男――」寺井は言った。「東京駅でも見かけましたよ」
「ふうん、気がつかなかったな。すると、ずっと同じ列車だったわけか」
「そうでしょう。小倉で乗り換えるとき、また会って気がつきました」
「何をやってる男だろう」
「分りませんね、サーカスの呼込みでもなさそうだし……」
「競輪の予想屋とも違うな」
森沢部長は首をかしげたが、さして気になったわけではなく、間もなく江間川署に着いた。
ペンキの色褪せた平べったい木造建てだった。
森沢たちが江間川署を訪ねることは、東京を発つ前に連絡してあった。

江間川警察署

一

保釈中の被告が裁判所で定めた制限住居から姿をくらますのは、明らかに保釈条件の違反だった。検事の請求により保釈は取り消され、収監指揮書が執行される。

清水豊代に対する保釈取消しの手続きは速かに行われた。捜査会議の結果、豊代の所在捜査をかねて、万引団の根拠地とみられる江間川署管内泉口を内偵するという方針が打ち出されたのである。電話や書類の往復ではいっこうに要領をえぬ江間川署との協力体制も、この際充分に打ち合わせてくる必要があった。

江間川へは森沢部長と寺井刑事が行くことになった。

東京駅を十二時三十分発の急行で発つと、翌朝八時前に小倉に着く。それから支線に乗り換え、活気を失った筑豊のボタ山を窓外に眺めながら江間川までおよそ二時間足らずだった。

森沢と寺井は、駅前の小さな食堂で朝食をすませて江間川署へむかった。

朝の日射しは眩しいほど明るかったが、通行人は疎らで、町はまだ眠りから覚めきらぬよう

十歳くらいなれど五十歳くらいとみる者もありなどと記してある。通称も分らず、鼻低くして背も低しと粗雑な人相書みたいに書かれた女もいた。
清水豊代と渋野いその名前の上に赤丸はなかった。
彼女らの身柄引受人になった近藤春子の名は見当らない。
「このほかにも十四、五人おるらしいとですが、よう分らんとです」
笠利部長は、これ以上は調べようがないという諦めた表情で言った。
ところが、森沢部長は名簿を眺めているうちに意外な名前を発見した。
彼は顔をあげて寺井刑事を見た。
このとき、期せずして二人の顔が合ったのは、寺井刑事も同じ名前に気づいて、もしやと思ったからだった。

二

名簿の末尾に近く、それは東京から来た二人の刑事にとって、共通の思い出につながる懐しい名前だった。
『――渡辺勝次』
赤丸つきで本籍、生年月日が記載され、その脇には妻として梅子という名があった。
「渡辺勝次というのは、どんな男ですか」

笠利部長に迎えられ、捜査係の大部屋へ案内された。事件が少いせいか、雨の日の図書館のように静かだった。

笠利部長とは、森沢も寺井も初対面だが警察電話で何度か話し合っている。四十年輩の、眼つき険しくチョビひげを生やして、牛蒡みたいに色の黒い痩せた男だった。律義そうな感じである。

「あいにく署長が留守でして……」

その代わり、わたしで役に立つなら喜んで協力したいと言った。

「この女たちを知ってますか」

森沢部長はまず清水豊代と渋野いその写真を見せ、彼女らが保釈中に逃亡したことを話した。

「知っちょります。警視庁の照会がきてから、わたしらも精いっぱい捜査したとです。泉口の住居名簿を作りましたが、この女たちは泉口のもんに違いありません」

笠利部長はクリップでとめた薄っぺらな罫紙をとりあげ、森沢部長にむけて開いた。勘亭流まがいの太いのたくった字で、およそ三十人ほどの名前が列記されていた。

名前の上に赤丸がついているのは町役場に住民登録をした者で、それらは生年月日や本籍地も分っていた。彼らが泉口へ移住する以前の、炭鉱で真面目に働いていた頃まで遡って調べたというが、なかには、子供を小学校へ上げるため已むなく登録したらしい者もいた。

赤丸が約半数だった。

あとの半数は大耳とかマーチなどという通称が分っただけで、年齢も三十歳くらいとか、四

「――――」
寺井の顔色も冴えなかった。
ワタ勝は伝統的な技術を身につけた生粋の箱師だった。スリの技術は日本が世界一優秀といわれるが、それもワタ勝のような名人気質の男がいたからで、彼が足を洗ったと聞いたとき、寺井は大切な得意先を失ったような気がして、むしろ引退を惜しんだくらいだった。
それほどいい腕を持っていたワタ勝が、なぜ万引などに転落したのか。
笠利部長の話によると、炭鉱不況のあおりをかぶった生活苦のために万引団を結成したらしいが、それにしても、ワタ勝ほどの者なら万引よりスリに復職すればよかったではないか。
寺井は残念に思うのである。
「ところで――」森沢が言った。「清水豊代はこっちに帰っているでしょうか」
「逮捕するとですか」
「収監指揮書を持ってきました。渋野いそも、横浜地検から指揮書がでています」
「ははあ」
笠利部長は頼りなく頷いた。
渋野いそについては、すでに横浜地検から当地の検察庁を通じて収監指揮書が江間川署に届いていたのである。そして、いその所在をつかめぬまま未回答になっていたのだ。
「あの炭住の連中は容易なことじゃ捕まらんとです。かりに豊代が帰っていたとしても、わたしらが行ったら、決して姿を見せんでしょう。とにかく、泉口のことは川又の駐在が詳しいで

寺井が名簿を指さしてきいた。

「十何年もむかしの事件ばかりですが、前科(マエ)が六犯あります。その後、川又の鉱業所で長いこと堅く働きおったようですけんど、炭鉱(ヤマ)が潰れちしもうて、それからまたモサに戻ったとです。この渡辺勝次ちゅうのが親分で、盗品(ブツ)を捌いちょるようです」

笠利部長は自信ありげに言った。

しかし勝次はボロをださないので、検挙できぬ状態らしかった。

勝次は額の広い小柄な男だという。

どうやらワタ勝に間違いなさそうだが、そのワタ勝なら、十何年か前、森沢と寺井の二人が山手線の国電内でスリの現行犯で取り押さえた男だった。森沢たちは彼を逮捕するまでにさんざん苦労させられたのだ。

「――――」

森沢の顔が暗くなった。その後のワタ勝については、故郷(くに)へ帰って堅気(かたぎ)になったらしいという噂を聞いたきりだが、噂通りきれいに足を洗ったものと思っていつとはなしに忘れていたのである。

そのワタ勝が、まさか九州で万引団を組織して、子分を東京へ送りこんでいようとは思いもよらなかった。

スリが堅気になり、平穏に暮らしているという話を聞くのは嬉しい。しかし、スリが万引に転向したという話は嬉しくない。

しかし今は、故郷よりボタ山の蔭にひそむという泥棒たちを思わねばならぬ。
森沢が先に歩きだした。
駐在所はすぐ近くだった。
眼の細い中年の巡査が、笠利部長の連絡をうけて待っていた。招き猫のような敬礼をして、
「遠路はるばるご苦労さんです」
と言った。
奥から愛想のいい太った女がでてきて、お茶をいれてくれた。巡査の妻だった。
「清水豊代なら四、五日前に見かけましたけんど、ほんとに逮捕するとですか」
巡査は、笠利部長よりもっと頼りない様子で言った。
「そのために来たのです」
森沢部長は収監指揮書を見せた。
「ははあ」
巡査は感心したようだった。
「できたら渋野いそも逮捕するつもりです」
「ますます難儀ですな。あの婆さんはこの頃さっぱり見かけません。いるんかもしれませんが、姿ば見せんとです。とにかく、泉口のことはよう分らんことばかりで、わたしも困っちょります」
「警察に対して反抗的なんですか」

すけん、これからご案内します」

笠利部長は車を用意してあると言った。

しかし折角の好意だが、森沢部長は車を断った。笠利部長といっしょに警察の車で駐在を訪ね、泉口の泥棒たちに気づかれてはならなかった。

捜査はつねに隠密を好む。

だから森沢部長と寺井刑事は、二人だけでバスを利用することにした。

「それでは、川又の駐在へ電話をしておきましょう。応援が必要なときは遠慮なくそう言ってください」

笠利部長はなおも親切に言って、玄関まで送ってくれた。

三

ガラ空きのバスは烈しく揺れながら十分ほどで川又に着いた。

バスを下りると、江間川の水が美しく流れていた。森沢も寺井も東北地方の出身だったが、川べりに立って、自分の故郷に帰ったような気がした。真っ青な空に鰯雲がさざ波のように広がり、その雲の薄れた果てに、英彦山につらなる山々が濃紫の稜線をくっきりと描いていた。

その間に風景をさえぎるボタ山さえなければ、眺めは彼らの故郷に異らず、流れに両手を浸してさらに故郷を偲んだかもしれない。

以前はみんなボロば着ちょって、子供らも手癖(てくせ)が悪うてどうもならんかったとですが、今はほんとにようなりました。もちろん、スリや万引はいけんとですが……」

巡査の口ぶりは、泥棒たちを憎むより、むしろうらやんでいるように聞こえた。

「いや、そげなことはありません。道で会えばニコニコ挨拶します。ただ、何ば聞いちも連中に都合悪いことは一言も言わんとです。それに、逮捕状や収監状のでちょるような者は、警官の姿ば見るとたちまち逃げちしもうて、絶対に捕まらんとです。始末に負えませんたい」

「自供によると、豊代には亭主と子供がいます。しかし笠利部長に見せてもらった住民名簿では、独身のようになっている。事実はどうなんですか」

「そういうこともさっぱり分らんとです。独身か思うちょると、いつの間にか妊娠しちょったりして、豊代には亭主がいるようですけんど、どれが亭主かさっぱり分りません。だいたい、巡回連絡で何度も戸別に訪ねちょりますが、誰がどの家に住んでおるんか、未だによう分らんのが多いとです」

駐在の巡査はよくよく閉口させられているようだった。

ところが、それほど始末の悪い連中なのに、近隣の評判は意外にいいという話が巡査の口からつづいた。地元ではいっさいスリも万引もせず、町の祭礼などには人並み以上の寄付をPTAにするというのである。

ただし税金を納める者はないというから、模範的住民とまではいかぬようだ。

「それに、内情がようつかめんちゅうわけは、連中が始終旅行しちょるんで、いつ訪ねても半数は留守にしちょるからです。出かけるときは、みんな重役一家みたいに立派な服装(なり)ばしちょりましてな、知らん者が見たら、あげな炭住長屋に住みおるとは思わんでしょう。そして旅行から帰った晩は、飲めや唄えの大宴会ばやっちょるとです。

「渡辺勝次というのは、ほんとにワタ勝だろうか」
森沢が言った。
「そうでしょうね、別人であってくれればいいが、年恰好も同じようだし……」
寺井は陰気に答えた。
江間川署を出てから、バスの中でも繰り返された話題だった。
「おれたちの顔を見たら驚くだろうな」
「そりゃあ驚きますよ。モサ度胸はよかったが、あいつは警察アレルギーで、警察の前を通るだけでジンマシンがでると言っていた」
「おれはあいつが好きだったけどな」
「わたしも好きでしたよ。むこうは敬遠してましたがね」
「モサと刑事でなかったら、友だちになれたかもしれない」
「あいつは刑事になればよかったんだ」
たとえば森沢部長のように――寺井は心の中でそう思った。
平坦(へいたん)な道が、やがて緩(ゆる)やかな上り坂になった。道の両側に生い茂った芒(すすき)の穂が日射しを浴びて、風が吹き渡ると銀色の波が引くようにいっせいに靡(なび)いた。
坂を上りきると急に視界が開けた。
黒褐色の大きなボタ山が、眼前の右寄りに迫った。このボタ山の裾をまわれば、間もなく泉口だった。

いよいよ泉口の泥棒村へ乗り込むに際して、森沢部長と寺井刑事は川又駐在所の巡査から二つの注意をうけた。
一つは軍艦マーチが鳴りだしたらそれは刑事が来たという合図で、無駄な捜査をするより諦めたほうが賢明であること。
もう一つは、いそや豊代を見つけても、彼女らが廃鉱の坑道へ逃げこんだらやはり諦めるのが賢明であること。逮捕はほとんど不可能で、無理に深追いすれば迷路のような坑内に閉じ込められ、ガス中毒その他の危険に遭う怖れが多分にあるというのである。
注意は以上の二点だった。
森沢と寺井は、川の下手を迂回して橋を渡った。泉口へ行く道筋は、笠利部長に地図を書いてもらってあった。裏面に炭住の配置も書いてもらい、渡辺勝次の家やいそと豊代の家も分っていた。

「豊代の叔父です。会社の用で博多へきたついでに、しばらく会わないから元気な顔を見て帰ろうと思いましてね。豊代は元気でやってますか……」
「…………」
店主はギョロ眼をまたたいて一瞬戸惑ったらしかったが、探るような視線を森沢から寺井へ移すと、いっそう警戒的になった。
「豊代なんちゅう女（おなご）がおったやろうか」
店主は首をかしげ、知らぬふりをした。
「知りませんか」
「知りませんね」店主はそう答えてから、「豊代ちゅう女ば知っちょるか」
店の奥にいたおかみに声をかけた。
「聞かん名や」
ただちにおかみの声が応じた。漫才師のように呼吸の合った返事である。
「川又の駐在で、豊代は確かに泉口の炭住にいると聞いてきたんですがね」
森沢はなおも言った。
「それではおるんかもしれませんな。泉口で聞いちみるとええですばい」
店主は急に忙しそうに、売台の品を整理しだした。

左手に酒屋の看板が見えた。看板は酒屋だが、日用雑貨品から乾物、果物、佃煮（つくだに）、コンニャク、パンやアイスキャンデーまで商（あきな）っていた。駐在所の巡査によれば、泥棒村を随一の得意先とする店で、だから泉口のことに関しては誰よりも詳しいはずだが、主人もおかみも妙に義理堅く、住民の悪口は決して言わぬという話だった。泥棒たちには商売上の義理があるが、警察に義理はないというわけらしい。

主人は禿頭（はげあたま）で眼玉のギョロッとした男だった。柄は小さいがいかにも頑固そうで、客のいない店先に立って往来を眺めていた。

「泉口というのはどの辺ですか」

森沢はとぼけてきいた。

「すぐ、この先ですたい」

店主は山裾の蔭を指さした。

「炭住のあるところへ行くんですが」

「炭住のあるところが泉口ですすくさ」

「清水豊代の家をご存じですか」

「あんたさんは？」

店主の眼が疑い深く光った。

「親戚（しんせき）の者です」

「親戚ちゅうと？」

玄関の戸に手をかけてみた。錠はかかっていなかった。
「ごめんください」
そっと声をかけた。
返事がない。
無断で玄関に入り、家の奥を覗いた。
留守のようだった。
上りこんで待つか。
森沢はためらった。
そこへ、一人の男が風に吹かれたように入ってきた。ノーネクタイでジャンパーに着替えているが、江間川駅前の食堂で大飯を食っていた男に違いなかった。
森沢がいたのでびっくりしたらしく、
「どうも——」
慌てたようにペコンと頭をさげた。
「豊代は留守ですか」
森沢はきいた。
「豊ちゃん、留守ですか」
男も同じことをきいた。
先客の森沢が答えねばならなかった。

二

酒屋の聞込みは何にもならなかった。森沢と寺井は別行動をとることにした。棒組で歩くと刑事に見られやすい。酒屋のおやじにさえ見破られ警戒されたくらいだから、嗅覚の鋭い本職の泥棒相手ではなおさらである。

「寺さんはこの辺で待機してくれないか。万一のときは呼子を吹くが、その心配はないだろう」

森沢が単独で炭住長屋へ入ることになった。笠利部長や駐在所の巡査の話では、長屋の者が警察官に抵抗した例はないという。もっとも、抵抗される代わりに逃げられた例ばかりだからアテにはできないが、とにかく森沢はひとりで大丈夫だと言った。相手はたかが万引女である。

寺井をその場に残してボタ山の裾をまわると、泉口の炭住はすぐ眼の前だった。

五棟のうち、豊代の住居はいちばん手前の棟の南端と分っている。長屋と長屋の間の狭い地面に、色とりどりのコスモスが咲き乱れていた。

静かだった。軍艦マーチは聞こえない。

豊代の家の前に立った。

内部の様子を窺った。

人の気配はなかった。

森沢はこみあげてくる懐しさを抑えて叱りつけるように言った。
「新しい仕事？」
勝次は下唇をつきだして首をひねった。
「憶えがないのか」
「何のことだろう」
「デパートの巻反と言っても思い出せないか」
「さあ……？」
「むかしのワタ勝はそんなふうにとぼけなかったけどな。おれは寂しくなるぜ。こんな具合に会うだけでも心外なんだ」
「寺井刑事さんはお元気ですか」
「話をそらしてはいけない」
「寺井さんにも随分お世話になりました」
「また世話をすることになりそうだとこぼしているよ。この近くまで来ている」
「ほんとですか」
勝次は嬉しいのか恐ろしいのか、複雑な表情になった。
「とにかく、まとまった話はあとでじっくり聞かせてもらうが清水豊代と渋野いそをここに呼んでくれないか。保釈中に逃亡したので収監する」
森沢は命令的に言った。

「留守らしいですね。わたしは豊代の叔父ですが、あなたは？」
「あたしですか」
「そう、あなたです」
「あたしは何でもないとです」
わけの分らぬ返事だった。
「豊代は何処にいるか知りませんか」
「さあ……」
男は心当りを探そうとする恰好で外を覗いたが、ふっと姿を消してしまった。
男が森沢を刑事と気づいたかどうかは分らなかった。
いその家は、豊代の家の一軒おいた隣だった。
やはり留守で、孫の声もしなかった。
豊代にもいそにも、すでに逃げられた可能性が強い。
森沢は、親分と目されている渡辺勝次に直接ぶつかることにした。早く会いたくてたまらぬ相手だった。
勝次は、むかしのワタ勝とあまり変らなかった。森沢を見るとさすがに驚いた様子で、いったい何の用できたのかと不思議そうにきいた。
「何の用かではないよ。おまえさんが呼んでくれたようなものだ。せっかく足を洗ったのに、新しい仕事を始めたそうじゃないか」

もはや待機の必要はないのではないか。
それとも、連絡があるまで待つか。
寺井は迷ったが、やはり待機は無用という結論に達して炭住へむかった。
炭住は不気味なほどひっそりとしていた。首輪のない大きな犬が尾を振って近づいてきたが、あっちへ行けと言うと、その場に寝そべってしまった。
寺井は犬をまたぎ越して、最初に豊代の家を覗いた。誰もいなかった。いその家には錠がかかっていた。
次第に森沢部長のことが心配になってきた。ことによると、逆に部長が捕まり監禁されたかもしれぬという気がした。
渡辺勝次を訪ねてみれば分ることだ。
寺井は踵（きびす）を返した。
女に出会ったのはそのときだった。
「――――」
寺井は思わず挙げそうになった声を飲んだ。
「お久しぶりですわ」
女は涼しい微笑を浮かべた。
京急デパートで捕え損（そこな）った女だった。万引した巻反をトイレの中で仲間に渡し、妊婦服の腹をわざと脹らませて出てきた女だ。今度こそ見つけたら捕まえてやろうと思いながら、とう

しかし、勝次の答えは依然のらりくらりの言い逃れで、豊代やいそのことは何も知らぬと首を振り、台所から現れた女房の梅子に人差指の先で鼻の頭を掻きながら酒を買ってこいと言いつけた。
森沢は気づかなかったが、鼻の頭を掻いたのが合図だった。
梅子が裏口から出て行ったかと思うと、間もなく軍艦マーチが鳴り渡った。
途端に、別段驚かなくていいはずの森沢がびっくりして跳び上った。音楽はもう鳴らぬと思っていたのだ。
家の外を、下駄の音が慌しく走った。
森沢は反射的に立ち上り、家を跳び出した。
洋装の女と、あとにつづいて男の後ろ姿が見えた。
「待て――」
森沢は叫んだ。
もちろん、逃走者は待たなかった。

三

寺井刑事は軍艦マーチを聞いた。音楽はすぐに止んだがそれは刑事の襲来を知らせる合図で、森沢部長の身分がバレたことを意味した。

森沢はしゃがんだまま顔をあげた。
「逃げられたのさ。豊代と、江間川の食堂で大飯を食っていた男が、この中へ潜ってしまった」
「出てこないんですか」
「出てこない」
「待つんですか」
「待つ」
「いつまで」
「出てくるまで待つ。中は真っ暗だ」
「しかし、あの変な男までがなぜ逃げたのだろう」
「分らん」
森沢部長は不機嫌だった。

とう会えなかった女である。
「どなたか、お探しですの」
女は馴れ馴れしかった。
「いや」
寺井は相手にも自分にも腹を立てていた。口をききたくなかった。女が前に会ったときより美しく、吉野格子の小粋な着物姿が似合うのも癪だった。この着物だって、万引して仕立てたに違いないのだ。
「お友だちの刑事さんでしたら、どこにいるか知ってますわ」
「どこですか」
寺井はつい口をきいた。
女は炭住長屋の入口と反対の方向を指さした。廃鉱の坑口附近で、森沢はしゃがみこんだまま動かないというのである。
「あなたには、必ずもう一度お会いしますよ。警察を甘くみないほうがいい」
寺井は言い捨てて、女の指さした方向へ急いだ。
炭住をはずれると、いちめんに雑草の生い茂る荒地だった。廃山になった炭鉱の跡で、経営者は坑口も埋めずに逃げたらしく、坑口がポッカリと黒い空洞を覗かせていた。
「どうしたんですか」
寺井は近づいて声をかけた。

窓の外を走る豊代の姿が見えたのである。途端にマーチは跳り上り、レコードを梅子に任せて出て行ったというのだ。
「おかしな野郎だな」
「豊ちゃんを助けるつもりだったのかしら」
「マーチはそんな甲斐性のある奴じゃない。根っからの弥次馬で、豊代がパクられる様子を見物にいったというなら筋道が立つ。大分以前のことだが、ハゲ寅と大耳の喧嘩を見にいって、せっかく話合いで済みそうなところをあいつがけしかけ、殴り合いの喧嘩にしてしまった」
「マーチさんは子供の喧嘩でも駆け出して見にゆくわ」
「犬の交尾を小一時間も熱心に眺めていた奴だ」
「あたしは、なぜ子供が生れないのかってきかれたわ」
「あいつの好奇心には毛が生えている」
「でも、悪気はないようよ」
「悪気がないから余計始末に負えない。何でも覗きたがる」
「やはり記憶喪失のせいかしら」
「生れつきだろう」
話題がズレた。
悠長な場合ではなかった。
「いまの刑事さん、わざわざ東京から来たようね」

雁渡る

一

森沢部長が走り去ると、間もなく梅子が戻ってきた。ひき蛙みたいに勝手口から這いあがり、そっと部屋を覗いて、

「刑事さんは?」

四つん這いのまま亭主の勝次にきいた。

「おれたちの合図を知っていたらしい。駐在で聞いたんだろうな。レコードが鳴ったらすぐに跳び出していった」

勝次は顔色が冴えなかった。

「豊ちゃん、うまく逃げたかしら。マーチさんが豊ちゃんのあとを追っていったようだけど」

「マーチが? どうしてあいつまで逃げたんだ。刑事は豊代と婆さんを逮捕り(バク)にきたんだぞ」

「あたしはその通り言ったのよ。マーチさんは分ったような顔をしてレコードをかけたわ。そしたら……」

「でも、ほんとに逃げきれたかどうか心配よ。部長さんは戻ってこないし――」
梅子は、森沢部長の茶請（ちゃうけ）にだした芋羊羹（いもようかん）を頬張った。
そこへ、姿を見せたのが腰石よし子だった。
「京急デパートでヌケをつかった刑事（デカ）に会ったわ」
スリ用語で、捜査員のウラをかくことを、『ヌケをつかう』という。この場合は、むろん寺井刑事のことだった。
勝次は事情を説明した。
「しかし、おまえは逃げなくて大丈夫だったのか」
「平気よ。その寺井という刑事がうろうろしてたから、もう一人の刑事がいる場所を教えてあげたわ」
よし子は坑口の模様を話した。
「すると、豊代はうまく逃げたのか」
「見たわけじゃないけど、あの様子ではうまく潜ったようね」
「坑口の辺りで、マーチの姿を見かけなかったか」
「さあ――？　レコードが鳴ったとき、あたしは大耳のところへ下着を取り返しに行っていたのよ」
「下着を？」
「洗濯物が失くなると、たいてい大耳の家で見つかるわ」

梅子が話を変えた。
「そうなんだ。捜査三課のヌシみたいなヴェテランで、森沢部長の名前を聞くだけで震える奴もいた」
「その割にはやさしそうだったわ」
「やさしい女ほど怖いようなものさ。あの顔に出会うと体が冷える」
「寺井さんという刑事は？」
「やはりモサ専門だが、素質は刑事よりモサに向いているようだった。おれたちの仲間に入っていたら、きっと出世したに違いない」
「会ってみたいわ」
「おれだって、堅気で働いていた時代なら喜んで会いたい。ずいぶん世話になったし、とにかく懐しい。部長の顔を見たときも、半分は懐しくてたまらなかった」
「あとの半分はどうだったの」
「三課の手がついにここまで伸びたかと思った」
「怖かったのね」
「それに面目ない気もした」
「しっかりしてくれなくては困るわ。あんたは指導者なのよ。あたしだけじゃなく、みんなが頼りにしてるわ」
「分っている。だから、豊代を逃がすようにしたじゃないか」

「いえ……」
勝次はもぞもぞした。やはり面目ないという思いが先に立った。
「富田銀三を憶えているだろう。桶屋の銀のことだ」
「はい」
「彼はすっかり堅気になった」
「お会いになったんですか」
「日本橋でばったり会ったが、元気そうで生活も落ち着いているようだった」
「今度会ったらよろしく言ってください。わたしは十年くらい会いません」
勝次はほっとした。この分なら、警察は勝次と銀三のつながりに気づいていない。
「よろしく言うのはいいが、おまえが万引に転向したなんて伝えたくないな」
「わたしはとっくに引退したんです。万引のことは知りません」
「嘘をつけ。自分でやらなくても、子分にやらせれば同じだ」
寺井刑事の口調は次第に険しくなった。
「とんでもない、わたしは腐っても鯛です」
「つまり、モサはあくまでもモサということか」
「そうではないんです」
「それじゃどうなんだ。鯛なら腐っても鯛だろう。しかしモサが腐ると、万引になったりコソ泥になったりする」

「今度も見つかったか」
「押入れにあったわ。レコードを聞いて、大耳が縁の下へもぐった隙に探したのよ」
「よくない癖だな」
勝次は立ち上った。豊代たちの様子が心配だったし、寺井刑事にも会いたかった。

二

坑口の近くにしゃがんでいる森沢部長とその側に立っている寺井刑事の姿は炭住のはずれから見えた。
「お久しぶりです」
勝次は寺井に声をかけた。
森沢が顔をあげて睨んだ。
「やあ」寺井は懐しそうだった。「元気そうじゃないか」
「寺井さんもお元気そうで――」
「こんな所で会えるとは思わなかった」
「驚きました」
「おれも驚いたよ。ワタ勝は足を洗ったとばかり思っていた。どうして万引なんかに転向したんだ」

「でも——」勝次は遠慮しながら言った。「待っていても豊代は出てこないと思います」
「なぜだ。この穴の中へ潜った姿を確かにこの眼で見ている。もう一人、豊代にくっついて潜った奴がいるが、そいつもついでにとっ捕まえる。逃げたのは何か犯罪を踏んでいる証拠だからな」
「どうしても待ちますか」
「待つ」
「それでは、わたしの考えを率直に言っていいですか」
「なんだ」
「この坑口を入ると、あっちこっちに抜け口があるんですよ。いつまでもこんな穴ん中にいられやしません。豊代たちはとうに坑道をぬけだして、今頃はどこかで昼寝でもしているはずです」
「ほんとか」
森沢部長は跳び上った。
あまり烈しく跳び上ったので、勝次のあとをついてきた犬がびっくりして逃げた。

三

その頃、森沢部長たちを見下ろすボタ山の頂上では、風に吹かれながら豊代とマーチが気持

「とにかく、こんな所で立ち話は風流じゃありませんよ。地酒ですが旨いのがありますんで、家へ寄ってくれませんか。どうぞ部長さんもご一緒に――」
勝次は、恐る恐る森沢部長を見た。
「ふざけるな」
豊代に逃げられて、森沢はいきり立っていた。
勝次は体がすくんだ。
彼としては精いっぱいの親切を示したつもりだが、刑事とスリとでは宿命的に相性が悪かった。
「おれたちは風流でこんな所にいるわけじゃない」
森沢は嚙みつきそうに言った。
「しかし――」勝次は森沢たちのために言った。「ここにこうしていても日が昏れるばかりでしょう」
「当り前だ。時間が経てば日が昏れる。日が昏れたなら暗くなる。そんなことは教えられるまでもない。だが、おれはここから動かないぞ。豊代が出てくるまで待つ。二晩でも三晩でも、こうなったら持久戦だ」
「パクるんですか」
「必ずパクってやる。そして、泉口の連中がどんな稼ぎをしているか、洗いざらい吐き出させてやる。おまえさんも今のうちに覚悟しておけ」

白い雲が流れていた。
その雲を仰いで、豊代は亭主のことを思いだした。松山刑務所へ服役して、それっきり便りを寄越さず、刑期はもう終ったはずなのに、帰る途中でまたスリをやって刑務所へ逆戻りしたのかどうか、未だに帰らない亭主だった。
泉口へ帰るのが厭になったのかもしれぬ。
そうも思う。
どうせ男なんてアテにならない。子供はなかったし、法律的に結ばれた夫婦でもなかった。調子よく口説かれて何となく一緒になったが、苦労させられつづけのぐうたら亭主だった。帰らなければそれでもいいという気がして、強いて安否を尋ねないままにしている。
「マーチさんは結婚したことがあるの」
「あるんやろうけど……」
「まだ思い出せないの」
「一度思い出したんやが、間違うてしもた」
「間違えたって？」
「内緒の話やで？」
「誰にも話さないわ」
「江間川駅前の、食堂のおかみさんを知っちょるかい」
「太ったおかみさん？」

よさそうに寝そべっていた。

「豊ちゃんの叔父だなんて言ったけど、やっぱり刑事(デカ)やったな。東京駅で見たときから、どうもクサい気がしたんや。江間川の食堂で一緒になったときもそう思った」

「あたしには叔父も叔母もいないわ」

「まったくヘマな刑事や」

東京における仕事が一段落したあと、よし子や大耳たちはすぐに泉口へ引き揚げたが、マーチは野球見物のために一日遅れ、帰途、彼だけが森沢部長たちと同じ列車に乗ったのである。

「でも――」豊代が言った。「刑事はあたしをパクりに来たのに、どうしてマーチさんも逃げたの」

「よう分らんな。豊ちゃんの逃げる姿ば見たら、急におれも逃げとうなった。ことによると、おれは豊ちゃんに惚れちょるんと違(ちご)うやろか」

「ことによるとって、どういうこと？」

「こうやって寝そべっちょると、どうもそんな気がしてくるたい」

「あんたの話を聞いていると、いつもアホらしくなってくるわ」

「豊ちゃんはそんな気がせんとやろうか」

「せん、全然感じないわ」

「それじゃ仕様ないな」

マーチは諦めがよかった。草をむしって青い茎(くき)をくわえた。

弥勒菩薩（みろくぼさつ）

一

京都、高丸デパートの婦人服売場は三階にあった。

店員の八百橋ミズ江は今春高校を卒（お）えてこの職場に採用されたが、仕事にはもう慣れていた。よく晴れた土曜日の午後で、客の入りは平日の倍くらいあった。こういう日には万引に注意しなければいけない。彼女は忙しく客に接しながら、万引に対する注意も怠（おこた）らなかった。近頃は万引年齢が低下して、五、六歳の子供でも油断できないのである。盗品を買う大人たちがいて、子供らは漫画やプラモデルを買う小遣い稼ぎに現れるのだ。玩具売場とちがって、婦人服売場などでは子供が盲点になっていることを知って現れるのである。

「ちょっと——」

ミズ江は客に声をかけられた。

「これ、サイズが合うかしら」

客はオレンジ色の濃淡で大胆なデザインをしたワンピースに手を触れていった。ミズ江と同

「そうや。どうもおれの女房だったような気がしてな。きいてみたら全然違うていた。側で聞きおった本物の亭主に怒鳴られちしもうたわ」
「それは怒鳴るのが普通や」
「ほんとに内緒やで」
マーチは念を押して寝返りを打つと、腹這いになった。
眼下の坑口附近に、相変らず森沢部長たちの姿が見えた。
「また刑事が一人ふえた」
マーチがいった。
豊代も腹這いになった。
「バカね。ふえたのはワタ勝だわ」
「なんや、ワタ勝か、何を話しこんでおるんやろ」
「三人とも昔（むかし）馴染（なじみ）なのよ、きっと」
豊代はふたたび仰向けになった。
美しい空を、遥（はる）かに、雁（がん）の列が渡った。

まだ結婚する気がないし、ボーイ・フレンドなら間に合っている。

ミズ江は男に見憶えがなかった。ことによると彼女に内緒で縁談が進められ、相手がこっそり様子を見にきたのではないかという気がした。とすれば印象をよくしておきたいが、彼女は

「失礼ですけど、あなたはどなたかしら」

男はびっくりしたようだった。

「あんたさんが」

「あたしが八百橋ですけど」

「へえ」

「女の人ですの」

「ほんとに八百橋さんでっか」

男はまだ信じられぬようだった。

「はい」

ミズ江はできるだけ愛想よく頷いた。

「知らんかったわ」

「何かご用でしょうか」

「いや、別に用はおまへんのや。お母はん、お元気だっしゃろか」

「母は七年前に亡くなりました」

「亡くなった――」

じ年ごろで、明るい緑色のブレザー・スーツを着た美しい娘だった。すでに他の売場で買物をしたと見え、高丸デパートの大きな紙袋を右手に提げている。
ミズ江は客のサイズを聞き、
「着てごらんになったら如何ですか」
客を試着室へ案内した。
試着室は売場の隅に公衆電話ボックスのように並んでいた。カーテンを閉めれば外部から遮断され、客は狭い室内にこもって買おうとする衣裳に着替えるのである。そしてサイズが合うかどうかを鏡に映して検討するのだ。
客が試着室へ入ると、ミズ江はカーテンを閉めてやった。
「あの——」
ミズ江はすぐにまた声をかけられた。
今度の客は若い男だった。ずんぐりと太って、少し薄ぼんやりした感じだが服装はきちんとしていた。散髪したての頭で、ポマードが安っぽく匂った。
「ここの店員さんで八百橋さんという人がおりますやろか」
男は吃りがちに言った。
「八百橋さん？」
ミズ江は聞き返した。自分の姓と同じだった。
「そうだす」

ミズ江はいっしんに考えた。野田という名の心当りを思い出そうとした。
あの男は、なぜあんなにびっくりしたのだろう。
ミズ江は首をひねった。気がかりだった。
そして考え込んでいるうちに、試着室へ案内した客のことを思い出した。
試着室へ入ったついでに化粧を直したりしてなかなか出てこない客もいるが、それにしても、時間がかかり過ぎる気がした。
「いかがでしょうか」
ミズ江は試着室の前に立って声をかけた。
返事がなかった。
もう一度声をかけた。
やはり返事がない。
カーテンをあけてみた。
客の姿が正札のついたワンピースごと消えて、その代わりに竹で編んだザルが置いてあった。

二

ユキは高丸デパートを出ると、近くの喫茶店で野田を待った。
脇に置いた派手な図柄の紙袋はむろん高丸デパートの紙袋で、試着室でザルと入替えにせし

男は前よりもさらにびっくりした。

「母をご存じでしたの」

「へえ」

「父も」

「へえ」

男は落ち着かぬ様子で、細い眼をキョロキョロさせた。

ミズ江は気味が悪くなった。縁談の相手なら母の死を知っているはずだし、ミズ江の顔も写真を見せられて知っていそうなものだった。相手はまだ名前さえ名乗っていない。

ミズ江はふたたび男の名を訊ねた。

「野田さん？」

「野田いいますねん」

「知りまへんやろか」

「さあ……？」

「そうやろな。当り前や。ほな、さいなら」

男は逃げるように去ってしまった。

ミズ江はポカンと取り残された。狐につままれたような気分だった。あの男は気ちがいだろうか。

いや、そんなはずはない。八百橋という姓をちゃんと知っていたのだ。

「ユキちゃんはそない思たやろけどな、話きいたらユキちゃんかてびっくりしまっせ」
「早よ言うてんか、分れへんやないの」
「まだ分れへんのか」
「何も聞かんのに分るはずないわ」
野田の話はいつも肝心な部分がぬけていて、ユキはじれったくなるのだった。
ウェイトレスがユキの注文したコーヒーを運んだ。
野田はアイスクリームを頼んだ。
「あのな――」
野田は話をつづけた。
「ユキちゃんが騙した女店員の名、八百橋いうのやで」
「ほんと？」
「ほんまや」
「うちと同じ苗字やないの」
「だからびっくりしたんや……」
野田はいきさつを話した。
八百橋という姓は、ざらにある姓ではない。偶然の一致だった。ユキは、店員の注意をそらさせるため野田に人を探すふりをするよう指示したが、自分の姓を言えと教えたわけでもないのである。ユキの姓を選んだ野田が不運だったのだ。

めたワンピースが入っている。ザルは、万引に必要な紙袋を手に入れるためわざわざ六階の家庭用品売場で買ったのである。紙袋の内容が何であろうと、それはもはや正当に買物をしたしるしで誰に怪しまれる気遣いもない。試着室で中身を擦り替えたあとは、係りの店員に気づかれぬよう脱け出すだけでよかった。

野田が女店員に話しかけている隙に、ユキは悠々とカーテンの蔭から脱出したのだ。

しかし今回の行為は、万引団の組織的な行動の一部ではなく、ユキが思いついて野田にも一役買わせた試みにすぎなかった。

東京から新潟へとび、それから富山、金沢、福井と北陸方面の巡業を無事に終えたハゲ寅たち一行は、帰郷する前に京都で休養をとることになったのである。

働くばかりが能ではない。

昨夜は旅の疲れでぐっすり眠り、今日は各人の自由行動、ハゲ寅や上海（シャンハイ）たちは何処（どこ）へ足を延ばしたか知らないが、行きたい所がないという野田をユキがデパートへ誘ったのだ。

野田はまもなく喫茶店に現れた。鼻の頭に汗をかいて、

「えらい目に遭（お）うたわ」

ユキの前へ腰をおろすなり言った。

「どないしたん」

「びっくりしてしもうた」

「なんでや。うまくやってくれはったやないの」

「仏さんを見るんや」
「なんで仏さんを見るねん」
「いいことがあるんや」
「仏さんを盗むのはあきまへんで」
「当り前や。あないな物をどないして盗めるかいな」
「盗んでも売るのが難しやろしな」
野田は気がすすまぬ様子だったが、反対はしなかった。
バスでゆくと、下車した真ん前が広隆寺の楼門である。その右手に歩道を隔てて、「太秦広隆寺」と刻んだ石標が立っている。幸いに観光客の団体は見物を終り、遊覧バスに乗り込むところだった。
楼門正面の講堂には有名な阿弥陀如来や不空羂索観音などの彫像が安置されているが、案内書に説明された広隆寺創立の縁起と同様、ユキには関心がなかった。
ユキは案内人に教えられて、弥勒像を安置してある霊宝館へいった。
館内は薄暗く、二十人ほどの拝観客がいた。最も有名な弥勒像の前にいちばん人が集まっていた。
宝冠弥勒菩薩半跏思惟像——作者不詳、古仏として国宝に指定されている。上半身を軽く前へかたむけ、右膝を組み、右手の指をふくよかな頬にそっとあてがい、千何百年かの歳月に洗われた木目が美しい曲線を描いて肩から胸へ清冽な泉のように流れている。

しかし、作戦は成功したのだからそう不運ということもない。

「ユキちゃんは天才や」

野田は感心して言った。

喫茶店を出たが、ふたりともどこへ行きたいという望みはなかった。

千余年にわたる歴史の重味に耐えたこの古い都において、観光客は見るものに事を欠かない。遊覧バスが市内くまなく走りまわり、古寺巡礼などと堅くならなくても、愛らしいガイド嬢つきで安直に案内してくれる。おそらく歴史の有難さをいちばん身に沁(し)みているのがお寺さんで、拝観料をとった上はサービスもしなければならず、辛気(しんき)くさい読経より団体客の接待に懸命のけしきである。

しかし生憎(あいにく)、ユキと野田は古いものに興味がなかった。

「どこへ行こ」

野田がきいた。彼は、ユキといっしょにいられさえすれば満足だった。

「そやな――」

ユキは促されて、旅館の壁に貼ってあった一枚の写真をふと思い出した。京都の観光ポスターで、広隆寺(こうりゅうじ)の弥勒菩薩像の顔を側面からクローズ・アップした写真だった。ユキはその写真を見たとき、唇の表情に死んだ母の面影(おもかげ)を見たのである。

「広隆寺へ行こ」

「何しに行くねん」

ハゲ寅は依然振り向かなかった。

「寅さんたら――」

ユキはハゲ寅の前にまわった。

「寅さんよ」

野田もハゲ寅の前にまわった。

ハゲ寅は放心状態だった。

「アホになったんと違うやろか」

「腰がぬけたらしいわ」

ユキと野田は顔を見合わせた。

そのとき、ハゲ寅の眼がようやく夢から覚めたように動いてユキを認めた。

「どないしたん」

ユキはきいた。

「……………」

ハゲ寅は答えなかった。眼の光がトロンとして、まだ夢うつつの状態らしい。

ユキは心配になった。

ハゲ寅の行先（ゆきさき）はどうせパチンコ屋かストリップ劇場と思っていたから、こういうところで会っただけでも不思議でたまらないのである。

「どないしたいうのん」

ユキは凝然と佇（たたず）んだ。やさしい微笑をふくんだ弥勒の唇に、まさしく死んだ母の面影を見たのである。胸の奥がジーンとして、まるで幼児にかえったように仏像の胸に抱かれたいという思いが走った。

「美人やな」

となりで眺めていた野田が、溜息（ためいき）を洩らすように呟いた。

彼は弥勒菩薩に惚れたようだった。

ところが同じ場所にもう一人、弥勒像を眺め吐息をついている男があった。

ユキはしばらく経ってから、その男の禿頭（はげあたま）に気がついた。

ハゲ寅だった。床の上にペタンと坐りこんで、弥勒菩薩を見上げる眼は憑（つ）かれたように瞬（また）かなかった。

「寅さんがおるわ」

ユキは野田に言った。

「ほんまや」

野田も驚いた。

「寅さん――」

ユキがうしろから声をかけた。

ハゲ寅は聞こえないようだった。

野田が肩を叩いた。

ハゲ寅

一

広隆寺の弥勒菩薩は、ハゲ寅が感激するほど腰石よし子には似てはいなかった。確かに、弥勒像の瑞々しい頬やしなやかな指の表情によし子の面影を見出せぬことはない。そこには繊細な官能の美しさが秘められ、美しいものに対する永遠の憧憬が抽象されている。

しかし宝冠の弥勒がよし子に似たのは、贔屓目に見てもハゲ寅の恋の昇華作用だった。観光ポスターの写真を眺めたユキがその弥勒の唇に母の面影を偲んだように、ハゲ寅も同じ写真を眺めてよし子の幻影を見たのだ。そして胸をときめかせて広隆寺の楼門をくぐった結果が、弥勒像の前に腰がぬけたように坐りこんでしまったのである。

弥勒は、釈迦入滅後五十六億七千万年ののちに天上より下界に降り、釈迦の説法にもれた衆生を救うと伝えられている。

いまや切々たるハゲ寅の恋ごころにおいて、よし子は眼前の弥勒菩薩にほかならず、ハゲ寅こそ済度を願う衆生の一人であった。

「よし子にそっくりや」

ハゲ寅は、ふたたび弥勒菩薩を見上げ、感激したように言った。

やや遠目の選択は店員に気づかれぬためで、金を払って買うわけではないから已むを得なかった。

よし子は贅沢ではないが粋好みである。洋服でも着物でも自分に合う柄を心得ている。この際、ハゲ寅は彼の趣味がよし子の趣味に適うことを示したいという野心もあった。

やがて目標が決まった。エチオピアの国旗を縦縞にしたような緑と黄と赤の派手なストライプで、ハゲ寅の見立てではよし子に似合いそうだった。マネキンのスタイルはもちろん理想を型どっているが、よし子もまた理想のスタイルを備えている。マネキンのサイズに合ってよし子のサイズに合わぬ道理はない。

ハゲ寅の選択が決定した。

いつもは臆病なハゲ寅だが、今日の彼には弥勒菩薩がついている。

彼は目標のマネキンへ向った。

そのマネキンの近くで、客に応対している若い店員がいた。ユキにワンピースを持ち逃げされた八百橋ミズ江だったが、ハゲ寅はそんなことを知るはずはなく、知らなくていっこうに差し支えなかった。

「これ、ちょっと着替えさせてもらいます」

ハゲ寅はマネキンを指さして頭を下げ、馴れ馴れしく言った。

「どうぞ――」

店員は不機嫌そうに答えた。ほとんど無関心だった。

彼はおもむろに眼を閉じて合掌(がっしょう)した。

それからようやく立ち上ると、呆然としているユキや野田を置き去りに、力強い足どりで広隆寺をあとにした。

ちょうどバスがきたので跳び乗った。行先はおのずからきまっていた。弥勒菩薩を拝んでいるうちに、よし子へ素晴しい土産をプレゼントしようと発心(ほっしん)したのである。

高丸デパートの前でバスをおりた。

何をプレゼントするかについてはいろいろ迷ったが、安全第一を考えと、やはり馴れている婦人服売場へ心が動いた。

エスカレーターで二階へ上った。

二階は紳士服売場だった。

店員用の通路を探して、その通路から三階へ階段を上った。店員用の通路は商品を納入する業者なども出入りするので、店員バッジをつけていなくても、平然と通れば怪しまれない。

三階の婦人服売場へでた。

全国どこのデパートでも、売場の模様はだいたい似たようなものである。

ハゲ寅は客にまぎれこんだ。

土曜日で客が多かった。混んでいるほど仕事はしやすい。ハゲ寅にとって、すべての客が共犯みたいなものだった。

ハゲ寅はマネキン人形に着せた既製服を物色した。

二

ハゲ寅の成功した手口は、富田銀三が丸急デパートに勤めていた頃の着想だった。デパートに出入りする業者は多い。婦人服売場などにもメーカーや問屋筋の業者がよくあらわれる。そして売台の品を差し替えたり、営業の邪魔にならぬように店員通路の隅などでマネキンの服を着替えさせたりしているが、取引先は始終変るので、店員も業者の顔をいちいち憶えていない。

「……だから、業者のふりをして堂々とやれば絶対にうまくいく」

と銀三は言った。

銀三は実行したわけではなかったが、保安係として勤めながらも、さすがに眼のつけどころが違っていたのだ。

ハゲ寅はその話を感心して聞いて以来、いつか実行してみたかったのである。

彼は風呂敷包みを提(さ)げて悠然とデパートを出た。

いい気持だった。よし子への恋もたちまち叶(かな)えられそうな気がした。

彼は胸を張って歩きだした。

そのとき、子供の手をひいた若い夫婦づれに擦(す)れ違った。

ハゲ寅は、泉口に残してきた自分の娘と倅(せがれ)を思い出した。

ハゲ寅は早速マネキンの腰を抱き上げた。五、六歳の子供くらいの重さがあった。

客の間を縫って店員用の通路を入った。

怪しまれなかった。

薄暗い通路の隅にマネキンを置いた。

純毛のツーピースで、一万二千五百円の正札がついていた。それにブラウスが三千円である。

直ちに作業を開始、上着を脱がせ、ブラウスを脱がせた。

たとえマネキンでも、ハゲ寅は女体が眩(まぶ)しかった。スカートのホックに手をかけるときは、何となく胸の奥がこそばゆかった。

思い切ってスカートを下ろした。マネキンはノー・パンティーである。

そのとき、男の店員が通りかかった。

ハゲ寅は慌てるよりもテレてしまった。彼のほうから挨拶すると、店員は「ごくろうさん」と言って通り過ぎた。

ハゲ寅はほっとした。

着せ替えるべき服がないのだから、先を急がねばならなかった。

ズボンから風呂敷をだした。風呂敷は盗品を包むための、万引用七つ道具の一つである。休暇中でも持ち歩いていたのはハゲ寅の心掛けだった。

脱がせた服を大急ぎで風呂敷に包むと、ハゲ寅は心残りのキッスをマネキンに与えて、あとは逃げることしか考えなかった。

ハゲ寅はゆっくりと階段をおりかけた。

「もしもし――」

ハゲ寅は大きな手で肩を叩かれた。

振り返ると人相の悪い男が立っていて、背広の内ポケットから警察手帳をだした。

刑事は嬉しそうにニヤリとした。

ハゲ寅のいちばん嫌いな笑いだった。

三

よし子への土産を風呂敷に包んだときまで、ハゲ寅は幸運を信じてよかった。弥勒菩薩の恩沢と信じることも自由だったろう。

しかし親心をだした途端にツキは離れた。いくらケチ寅でも、子供の土産くらいは金をだして買えば無難だったのである。

「済んません、許してください、子供のためについ出来心を起こしたとです、どうぞご勘弁を――」

警察へ連行されると、ハゲ寅は机に額をこすりつけて謝った。

彼は昨年の春曾根崎署にスリで検挙され、大阪地方裁判所において懲役八月の実刑判決をうけている。直ちに服役して四か月後に仮釈放、そして仮釈放の期間も無事に終了したが、その

——そうだ、あいつらにも土産を持って帰らなくては……。
親心が動いた。
伜は五歳になったばかりだが、娘のほうは来春小学校へ上る。伜はハゲ寅にそっくりである。幸いに娘は父親に似ない。
ハゲ寅はデパートへ引き返した。
仕事をするには風呂敷包みが邪魔だった。
それでまず、地階へおりて携帯品預かり所へ風呂敷包みを預けた。預かり賃無料、期間は当日限り閉店時間までだ。
文房具や書類、玩具などの売場は六階だった。
ハゲ寅はエレベーターで六階へ上った。
手始めに書籍売場へいった。漫画なら自分も愉しめると思ったが、父親の立場から考えて教育的な絵本を二冊レインコートの下に隠した。伜のためである。
次は娘のために玩具売場へいった。ゴム製の黒ん坊人形が気に入った。定価六百五十円、髪がちぢれていて、眼のパッチリした愛らしい人形だった。娘もきっと気に入るだろう。
人形は一瞬のうちに売台から消えて、ハゲ寅のレインコートに潜った。
これで土産が揃ったことになる。
仕事のあとは、原則としてエレベーターを利用しない。いざというときの逃げ場がないからである。

「はっきりしないんです」
「本籍をきいとるんやぞ」
「本籍は……」ハゲ寅は考えた。「青森県の栗山という小さな村です」
「えらい北へ戻りよったな」
「はい」
ハゲ寅は住所も栗山で、京都見物に上京したばかりだと言った。栗山には彼の姉がいるのである。二十年以上も音信不通の姉だから、ことによると死んでいるかもしれない。
しかしこの手は以前使ったことがあって、本籍照会が何日もかかって回答される前に釈放されていた。あとでバレる分には差し支えない。
今度も、押さえられたのは人形と絵本二冊の千円足らずだから、うまくいけば今日じゅうに釈放される。例の風呂敷包みを持っていなかったのがせめてもの幸運で、預り証は連行される途中捨ててしまったから心配ない。
「前科は？」
訊問がつづいた。
「ありません」
「警察に捕まったことはあるんやろ」
「いえ、初めてです」
「盗んだのは人形と本だけか」

前科がバレたら、起訴猶予で済んだ他の検挙歴もすっかりバレてしまう。つまりスリや万引の常習犯ということが分って、たかが人形と絵本の万引でも起訴される恐れがあった。

この際、彼は平謝(ひらあやま)りに謝って、指紋照会で身元や前科がバレぬうちに釈放されないと、当分はまたシャバへ戻れなくなるのだ。

「生れは九州らしいな」

刑事はハゲ寅の方言に気づいた。

「はい」

ハゲ寅は首をすくめた。迂闊(うかつ)に口が滑(すべ)っていた。何とかごまかさないと、江間川署へ照会されたらいよいよ釈放の望みがない。

「九州のどこや」

「南のほうです」

「鹿児島か」

「いえ、もっと南で」

「もっと南いうと海を渡るのか」

「もう海ですか」

「海の向うが種子島(たねがしま)や。そのずっと先が奄美(あまみ)大島だ」

「それでは鹿児島です」

「それではとはどういうこっちゃ」

ハゲ寅が先にきいた。
「ポタかぶっちしもた」
上海はいつもの元気がなかった。
「何でや」
「高丸デパートの靴売場でな、靴が古うなったんで新しいのと取り替えたら、パレちしもうたんや」
「高丸は気いつけんといけん……」
ハゲ寅も自分が捕まったいきさつを話した。
「でも——」上海は言った。「千円以下の品なら、多分明日は釈放になるやろ。羨しいたい。おれは三千五百円の靴じゃけん、地検送りや」
「ワタ勝が知ったら怒るやろな」
「もちろんカンカンや」
彼らは組織をはなれた個人プレーを、いっさい禁じられていたのである。

「はい、お金はありますけん、代金を払わしてもらいます。良心の呵責に耐えません」
「生意気言うな。良心があったら、はじめから万引なんぞするわけないやないか。金があるのに盗むとはどういう了簡だ。ポケットの中の物を全部出してみい」
刑事はぶつぶつ言いながら所持品を調べたが、やがて、ハゲ寅の泊まる旅館がきまっていないと聞くと、
「ほんなら、今晩はここに泊まっていけ」
ハゲ寅は地下の留置場へぶちこまれた。

四

留置場は、いつ入っても気分のいい所ではなかった。
ハゲ寅のぶちこまれたのは独房ではなかったが、三畳ほどの薄暗い小部屋で先客が一人いた。
「寅さんやないか」
先客が驚いて声をかけた。
「上海か」
ハゲ寅もびっくりした。
しばらく顔を見合わせた。懐しそうな恥ずかしいような、妙な気持だった。
「どげんしたとな」

られたことがあるからだった。
一人の男が銀三の前を駆けて通った。
しかし追いかける男のほうが足が早かった。
犯人はたちまち組みつかれ、路上で揉み合いになった。
弥次馬が集まった。
「喧嘩はやめろ」
ぐれん隊ふうの大きな男が二人を引き離した。
「喧嘩じゃない。この野郎がおれの財布をスったんだ」
被害者は会社員ふうの三十歳くらいの男だった。息を切らし、顔を真っ赤にして抗議した。
「ほんとうか」
ぐれん隊が犯人に言った。
「とんでもねえ誤解だ」
犯人は首を振った。顔が青かった。ゴマ安だった。
「嘘をつくな。それならなぜ逃げたんだ。さっさと財布を返せ。六千円も入っているんだぞ」
被害者はまた跳びかかりそうになって、ぐれん隊に抑えられた。
「おまわりを呼んでこい」
「裸にしてみれば分る」
「構わねえからぶん殴っちまえ」

ゴマ安

一

ゴマ安、あるいはもっと簡略にゴマと呼ばれるスリがいた。細長い顔のあちこちに、小さなホクロがゴマのように散らばった男である。指先は器用だがあまり利口ではない。時折りヘマをやっては刑務所の飯を食う。富田銀三とは警察で知り合っていた。ただし銀三もスリだった頃のことだから、かなり以前の話でその後は顔を合わせていなかった。

銀三はとうにゴマ安のことなど忘れ、ワタ勝と組んだ仕事に忙しい毎日を送っていた。

ゴマ安との再会は偶然だった。

その日、銀三は錦糸町に借りた倉庫の在庫品を調べ、店へ戻るつもりでぶらぶらと都電通りへ向った。

「ドロボウ――」

突然うしろで叫ぶ声がした。

銀三はギクッとして振り返った。ギクッとしたのは、かつて彼自身がそう呼ばれ、追いかけ

「こんな奴は厳罰にしてください」
被害者は税務署員の名刺をだした。スリとは無縁の職業である。
「さ、見世物じゃないんだから、みんなあっちへ行きなさい」
銀三は弥次馬を追い払い、それから、
「おまえはいっしょに来い」
ゴマ安に命じた。

二

銀三はゴマ安の腕をとり、弥次馬の眼を離れると間もなくタクシーを拾った。
「銀さんのお蔭で助かった。この恩は一生忘れない……」
ゴマ安は余程うれしかったとみえて、感謝の言葉を繰り返した。
「そう恩に着ることはない。むかし、おれもあんなふうに助けられたことがあった」
「とにかく銀さんのお蔭だよ。助けられなければ、今ごろは袋叩きにあっている」
「腕がおちたらしいな」
「うむ――」
ゴマ安の声が沈んだ。
「引退してもいい時期じゃないのか」

弥次馬がはやしたてた。
ゴマ安は慌てていた。小さな眼をキョロキョロさせ、逃げる隙を窺っているようだった。
銀三は傍観するに忍びなかった。
「警察の者だが――」
銀三は私服刑事を装って人垣を分けた。
ぐれん隊が事情を説明し、つづいて、被害者が興奮した口ぶりで財布をスられたときの模様を話した。ゴマ安は被害者と同じバスに乗っていて、下車する瞬間にポケットを狙ったのである。
銀三は話を聞き終ると、
「きさま――」ゴマ安を睨んで重々しく言った。「相変らずモサから足を洗えないようだな。もうシラをきっても駄目だ。おとなしく財布をだせ」
「へえ」
ゴマ安はめんくらったように瞬いて首をすくめ、渋々と財布をだした。
「太え野郎だ」
銀三は財布を受け取って被害者に渡した。
被害者は早速中身をあらため、六枚の千円札を数えた。
「こいつはスリの常習犯ですよ。警察へ引っぱって行きますが、あとであんたに被害届けを出してもらうようになるかもしれない。名刺があったら頂戴できませんか」

ゴマ安は感心して聞いた。

「ちょうど人手が足りなくて困っていたところなんだ。おれが仕入れに出てしまうと、店は女房と女房の妹きりになる。どうしても男手が欲しかったので、安さんが手伝ってくれるなら大助かりだ」

「儲かっているのか」

「馬喰町に移ってから日は浅いが、かなり繁昌（はんじょう）している。安さんの家族が食っていけるくらいのサラリーは出せるつもりだ」

「おれは嬉しくなってきたぞ」

「とにかく店を覗いてみるか」

「このまま連れて行ってくれるのか」

「タクシーは馬喰町へ向っている」

「両国を過ぎたぞ」

「もうじき馬喰町だ」

銀三は互いに運がいいのだと言った。たまたま仕入用のライトバンが修理中で、そのため錦糸町を歩いていてゴマ安に会った。ゴマ安とて、銀三に会わなければ警察へ突き出されるところだったのである。

「確かに運がよかった」

ゴマ安も言った。腕が鈍ったばかりではなく、子供が成長するにつれて、足を洗わねばなら

銀三は、薄くなったゴマ安の髪を眺めて言った。銀三より五、六歳若いはずだが、引退の汐時を失うと一生刑務所へ入ったり出たりして惨めに終ってしまう。小金を貯めて商売をやろうと考えても、所詮スリで稼いだ金などは身につかないのだ。

「引退か」ゴマ安は呟いた。「しかし、引退したら家族を養っていけない。おふくろがいるし、娘が四人いて、そのうえ女房がまた妊娠しているんだ」

「引退してのんびりしろと言ってるんじゃない。仕事を変えたらどうだ」

「堅気の仕事か」

「当り前だ」

「この不景気に、おれみたいな前科持ちの中年男をどこで使ってくれるかね」

「おれのところで働いてくれたら有難い」

「銀さんのところ？」

ゴマ安は、銀三が足を洗ってデパートの保安係になったことは耳にしていたが、新しい商売に転向したことは知らなかった。

「平和商会といってな、店は日本橋馬喰町にある。衣料品の卸問屋だ……」

銀三はワタ勝との関係を省略して話した。むろん、タクシーの運転手に怪しまれたら大変だから、仕入先がデパートだということも省略した。

銀三は商売が忙しくなったので家を売り払い、錦糸町に木造の小さな倉庫を借りるとともに、店舗を馬喰町にかまえたのである。

「あれがカミサンか」
「うん。若いほうが妹の桃江だ。客が帰ったら紹介する」
「妹のほうが小柄だけど美人だな」
「ここにくる前は新宿のキャバレーで働いていた」
「亭主はいるのか」
「交通事故で死んだ。子供が二人いて、そいつを育てなければならない」
「再婚しないのか」
「男には懲りたと言っている。亭主がひどい道楽者だった」
「初婚で懲りるという手はないな。おれの妹なんか三度目に幸福な結婚をした……」
ゴマ安はながながと妹の話を始めた。今では串カツ屋の女房におさまっているという。
春子の客が先に帰った。
銀三が紹介した。
「うちのひとは外歩きが多いし、男手がなくて弱ってましたの。あんたに来ていただけたらほんとに助かりますわ」
春子は、銀三以外の誰に対しても愛想のいい女だった。
「わたしは働き者ですからね。一所けんめい働きますよ」
ゴマ安は張り切って言った。
「でも、今までのお仕事はすぐ辞められますの」

ぬと考えている矢先だった。
話しているうちに馬喰町にきた。
タクシーをおりた。
小伝馬町から浅草橋へかけて、馬喰町、横山町を中心とした一帯はほとんど繊維製品の卸売商店で埋めつくされている。
銀三の店は、その問屋街の一隅にあった。
狭い道の両側に間口二間ほどの小さな店が肩を寄せ合うように建ち並び、それらの店の前には小型のトラックやスクーター、自転車などが置かれて一方通行の道幅をいっそう狭くしている。すでに夕方近く、どの店も客がひいたあとらしく割合閑散としていた。
「あの店だ」
銀三が指さした。
平和商会の看板はあまり目立たなかった。

三

店では女房の春子と、春子の妹の桃江が客に応対していた。
ゴマ安は店いっぱいに陳列された生地類を物珍しそうに眺めまわし、それから春子へ眼を移すと、

手紙は勝次からだった。裏を返してみなくても、下手くそな字で差出人は直ちに勝次と分る。封を切った。

いつもは鉄道小荷物の送り状か一時預かり所の合札が入っているのだが、今回は便箋用紙数枚にわたる長い手紙だった。

読み進むうちに銀三の眉がくもった。捜査三課の森沢部長と寺井刑事が泉口に現れたことを報告してきたのである。

読み終ったところへ春子が階段を上ってきた。

銀三は手紙の内容をかいつまんで話した。

「しかし心配はないようだ。刑事たちは勝次とおれの関係に気づいていない。森沢部長はカンカンに怒って全員パクってやると凄んだが、三日間ねばって手ぶらで帰ったらしい」

「気の毒ね」

「同情することはない。追うほうより、追われるほうがもっと気の毒だ。京都ではハゲ寅と上海がヘマをやった」

「あら厭だ――」

春子は銀三の膝から手紙を取り上げ、心配そうに読んだ。二人とも同じ日に逮捕されたが、翌朝ハゲ寅は身元が割れぬうちに微罪ということで釈放され、上海だけが引き続き勾留されていると書いてあった。上海について弁護士への手配を頼むというのである。にがりきっている勝次の表情がわかる文面だった。

「銀さんの話を聞いた途端にやめました」
「会社へ辞表をださなくていいんですか」
「ええ、勤め先はあるようなないようなもんですから、放っておいて構いません。どうせ退職金がでるわけじゃないし……」
「どんなお仕事だったのかしら」
「満員電車に揉まれたりバスに揺られたり、つまらない仕事です」
「車掌さん？」
「いや……」
ゴマ安は正直に話していいものかどうか、困ったように銀三を見た。
「手紙がきてなかったか」
銀三は春子に言った。
「書留速達がきてるわ」
手紙は二階にあるという。
「桃江の手が空いたら、安さんを紹介してやってくれ。商売のほうも、さっそく覚えてもらったほうがいい」
銀三は二階へ上った。
二階は二間あって、銀三たち夫婦の居間と寝室になっている。しかし居間のほうは梱包した荷物などが散らかっていて、半ば倉庫の役を果たしていて足の踏み場もない。

張込み

一

十一月も半ばを過ぎ、日比谷公園の銀杏が散りつくした。
森沢部長と寺井刑事が泉口の泥棒村へのりこんで、むなしく帰京してから一か月あまり経っていた。
日曜日だった。森沢部長は妻の多代子をつれて丸急デパートにきた。
「帰りましょうよ、くたびれたわ」
多代子が言った。不機嫌な声だった。
「くたびれるのはまだ早い」
部長はつれなく答えた。
しかし、すでに二時間以上も呉服売場をうろうろしているのである。むろん買物が目的ではなかった。
その後、警視庁管内において万引団は一人も捕まっていない。京都でそれらしい上海とい

「仕様のない人たちだわ」
春子は呟いた。
まったくだ、と銀三も思った。私用の品は自分の金をだしてまかなえという、公私のけじめに関する規約が守られていないのだ。
「あたしたちのこと、喋られないかしら」
「口だけは堅い連中だから大丈夫だろう。その点は勝次も気を配っている」
「安さんとあんたとはどういう知合(しりあ)いなの。いい人らしいけど、前の勤め先をどうしてもはっきり言わないわ」
「気がつかないか」
「でも……紳士(しんし)みたいで真面目(まじめ)そうだわ」
「それがモサの特徴さ。刑事らしい刑事はいても、モサらしいモサはいない」
「やっぱりね」
春子はがっかりしたようだった。

「あたしは刑事じゃないわ」
「その代わり刑事の妻だ。魚屋の女房には魚屋の女房の苦労があるように、刑事の女房には刑事の女房の苦労がある」
「でも、結婚するときはそんなこと言わなかった。決して苦労させないと言ったはずよ」
「おまえはどんな苦労でもすると言った」
部長は譲らなかった。
しかし、部長自身も呉服売場の張込みには飽きてきた。
三階の婦人服売場へおりた。
呉服売場より客が混んでいた。陳列品の色どりも華やかだった。
「あたし、これが欲しいわ」
多代子はマネキンが着ていたネグリジェを指さした。色はピンク、襟に派手なフリルがついている。呉服売場で正絹(しょうけん)の絵羽織(えばおり)をねだって、にべもなく断られたあとだった。
「なんだ、それは」
部長は横眼でしか見なかった。
「ネグリジェよ」
「そんな物を買ってどうするのだ」
「寝るときに着るんじゃないの」
「寝巻なら何枚もあるだろう」

う男が捕まり、仙台や岡山でも同じ仲間らしい犯人が捕まったという情報が入ったが、東京ではいっこうに犯人のシッポをつかめず、そのくせ被害は増える一方で、捜査三課の面目は丸つぶれだった。近頃では洋服生地ばかりか、呉服売場の反物までごっそりやられるケースが多く、それも被害があった時すぐに分ればいいが、たいていしばらく経ってから気がつくので、犯人の人相なども分らずただ漫然と警戒するほかはなかった。捜査陣の布石に対して、万引団側はつねに一手先を読んで行動しているのである。

逃亡した清水豊代と渋野いそも依然捕まらないし、この一、二か月間に森沢部長は八キロも痩せた。食欲は衰え、酒も不味かった。万引団を殲滅するまで、日曜日も祭日も休む気にならない。婦人物の売場に男ひとりの張込みでは怪しまれるから、敵を油断させるため今日は女房を引っぱりだしてきたのだ。

「デパートへつれてってくれるというので、何か買ってくれるのかと思って損しちゃったわ」

多代子がふくれるのは無理もなかった。

「今まで、おれが買物につれてきたことが一度でもあったか」

「ないわ、だから珍しいと思ったのよ」

「期待しなければがっかりしないで済んだ」

「期待しなかったら、初めからついて来なかったわ。へんな付けひげをして、ご近所の人に会ったら何て言っていいか分らないじゃないの」

「分らないときは黙っていればいい。これも仕事のためだ」

二

保安係の部屋には誰もいなかった。となりの休憩室を覗くと、二人が将棋盤にむかい、もう一人が脇で見物していた。保安係は一時間ごとに交替し、三十分ずつ休憩をとる。三人とも森沢部長の顔馴染で、見物中の須藤はかつて同じ係にいた同僚だった。

「忙しいかい」

部長は自分も盤面を覗く恰好で、須藤に話しかけた。

「相変らずですね」

須藤は退屈そうに答えた。

「例の万引団のことだが、こっちにはまだ現れた様子はないのか」

「腕利きが揃っていると思って、敬遠しているんでしょう」

「しかし西横でも高木屋でも軒なみにやられているのに、どうして丸急だけ狙われないのか不思議だよ。やられていても、気がつかないでいるんじゃないのか」

「そんなことはない。どの売場でも万引はつきものだが、近頃は逆に被害が減っているくらいだ。寺さんと九州へ行った結果はどうだったんですか」

「奴らの根拠地は分ったが、あとは何にも分らないで、その代わりワタ勝に会った」

「ワタ勝というと――」

「たまにはこういうのだって着たいわ」
「おまえはいくつになったたっけな」
「なぜ年なんかきくの。となりのおくさんはあたしより七つも年上で、もっと派手なネグリジェを着てるわ。むかしと違って、今は年をとるほど派手にするのよ」
「とにかく、わが家では妙な物を着てもらいたくないね。おかしな婦人雑誌なんぞ読むからそういう気をおこす」
「あんたのために、夜のムードを考えて言ってるのよ」
「おれのためなら余計なことを考えないでもらいたい。夜のムードは遠慮する」
「あんたってこのごろ冷いわ。仕事さえしていればいいと思ってるのね」
「ばかな話はやめてくれ。ここはデパートだぞ。人が見てるじゃないか」
部長はムッとして言った。子供のように拗ねる妻の気持を察してやれぬことはないが、ピンクのネグリジェはいずれにせよ論外だった。目下の急務は万引団を捕えることである。買物にきたのではない。
「ちょっと五階の保安係室へ行ってくる。すぐに戻るが、怪しい奴を見つけたら知らせてくれ。ネグリジェ以外なら、好きなように買物をしていてかまわない」
森沢部長は、ふくれている妻に背をむけた。

スリ時代の勝次は須藤にもかなり世話になり、須藤が退職して丸急の保安係になったことは知っているはずで、したがって須藤に遠慮することも考えられぬことではなかった。遠慮ではなく、須藤を恐れていると考えることもできる。

「ところで、富田銀三の病気はその後どうなんだろう。噂を聞きますか」

須藤が話を変えた。

「いつだったか、寺さんが日本橋で会ったときは元気だったそうだ」

部長は勝次と銀三を比較して、銀三のほうが働きのある女房を持って幸運だと言った。足を洗うとか洗わぬとかいっても、所詮は生活の問題にかかっている。せっかく堅気になった者も、生活していけなければ犯罪者に戻ってしまう。

「ワタ勝も、美容院か洋裁店の亭主になればよかった」

須藤は同感した。

彼の妻は助産婦だった。

三

森沢部長は三階へ戻った。

妻の多代子はネグリジェを諦めたらしく、客にまじって売台のカーディガンを物色していた。真剣勝負のような眼つきだった。

その名は森沢部長にも寺井刑事にも懐しかったように、須藤にとっても無性に懐しい名前だった。むろん渡辺勝次のことだ。

部長は勝次に会ってきた話を伝えた。

「しかし」須藤は残念そうだった。「どうせならなぜモサに戻らなかったのだろう」

「モサを仕立てるには年季がいる。自分では言わなかったが、あいつは炭鉱をクビになった仲間を助けるつもりで万引を教え始めたらしい。万引ならじきに覚える」

「ワタ勝が仕込めばうまくなるわけだな。あいつ、少しは変りましたか」

「いくらか老けたが、そう変っていない。元気そうだった」

「おれも会いたくなったな。ワタ勝はいい奴だった」

「おれだって、あいつが堅気でいてくれたら一緒に酒を飲みたいところだった」

「彼が親分だというと、いずれはパクることになりますか」

「パクりたくないが已むをえない。あいつのお蔭でおれは痩せてしまった。必ずパクってやる。連中を根こそぎにしてやるんだ」

「むかし、ワタ勝は富田銀三と仲がよかった。それで、今でも銀三が丸急の保安係をしていると思い、銀三に義理立てして丸急を狙わないんじゃないだろうか」

「いや、ワタ勝は十年くらい銀三に会わぬと言った。銀三が保安係になったことも、丸急を辞めたことも知らないようだった」

「すると、おれに遠慮しているのかな」

「失礼ですが——」
部長はすかさず声をかけた。
女が振り返った。
険のある眼で口が大きく、肩が張っていて気丈そうな女だ。
「警視庁の者です。ご同行願えませんか。お訊ねしたいことがあります」
「何なの」
女の態度は初めから挑戦的だった。
「保安係の部屋でお話しします」
「だから何だっていうのよ」
「保安係室でお話しすると言っているんです」
「保安係室って何さ」
「デパートの保安係がいる部屋です」
「あたしがどうしてそんな所へ行かなければならないの」
「お分りになりませんか」
「失礼しちゃうわね。あたしはトイレへ行きたいのよ」
「ほんのしばらく我慢してください」
部長は強引に女の腕をとり、店員通路から五階の保安係室に連行した。
休憩室は依然ヘボ将棋が進行中で、須藤がぼんやりとそれを眺めていた。

部長は妻を放っておくことにして、既製服売場から生地売場へ視線を移した。
ベージュ色のコートを着た女が、両脇を男に挟まれているのに注意をひかれた。
部長のカンが敏感に動いた。
女一人に男が二人、背中を向けているので人相は分らないが、彼らが万引犯なら、近くに店員の共犯がいるはずだった。
それらしい人物はすぐに見つかった。髪を染めた水商売ふうの若い女で、しきりに店員に話しかけている。
部長はもっと近づこうとした。
そのとき、右側にいた男の肩が動き、女の体も揺れたように見えた。
女は両脇の男をその場に残し、さりげない様子で売台を離れた。
部長は女の前方へ迂回した。
色白で、女の年は三十歳前後、大柄だがそれも脹らんだ腹のせいだ。大儀そうな歩き方で、ほとんど臨月に見える。双子が生れても不思議はない。三つ子が生れたって驚かないだろう。あるいは赤ん坊の代わりに、服地の巻反が現れたとしても部長なら驚きはしない。
部長は女と擦れ違った。
——巻反をノんでいるにちがいない。
部長は確信した。
女はトイレへ入ろうとした。

「よその赤ん坊なんか妊娠できないわ」
「ほんとうに妊娠してるのか」
部長は不安になってきた。
「疑うなら触ってみたらどう？」
女は大きな腹を部長の前へ突き出した。
「自分で触ってみなさい。叩いてみれば音でわかる」
「あたしのお腹を太鼓と思ってるのね」
女は右手をひらいてポンと叩いた。
柔らかい弾力のある音がした。
「…………」
部長はようやく失策に気づいた。焦(あせ)ったあまり、自分のカンを信じ過ぎたのだ。
「もう一度叩くわよ。よく聞いてもらうわ」
女は小気味よさそうに言った。そして上体をそらすと、前よりも強くポンと叩いた。
いい音だった。
部長は煙草をくわえていたが、煙といっしょに消えたくなった。

部長は部屋を借りた。女に犯行を認めさせてから、警視庁へつれていくのだ。
「お腹の中にしまってある物をだしなさい」
部長はきめつけるように言った。
客が多勢見ている店内では虚勢を張っている犯人も、ここにくるとたいていおとなしくなる。
「何を出せっていうのよ」
女はいささかも動じなかった。
部長は気が短かった。
「シラをきるのはいい加減にしろ」
「はっきり言ってもらうわ。あたしが何を隠したっていうの」
「巻反だよ、分ってるじゃないか。脱げるものならコートを脱いでみろ」
「変なことを言ったわね」
女は部長を睨（にら）みつけ、勢いよくコートを脱いだ。下は妊婦用のワンピースで、巻反はまだ現れなかった。
「その下で脹らんでいるのは何だ」
「その下って？」
「服の下だよ」
「赤ん坊にきまってるじゃないの」
「おまえさんの赤ん坊かね」

寺井刑事と赤松婦警は、肩を並べて歩くと似合いの夫婦にみえた。漫才の舞台に上っても似合う感じだった。

「……現れそうもないな」

寺井が呟いた。あせりながら、きょうもまた徒労に終るかという絶望に打ちひしがれた呟きだった。毎日毎日、いつ現れるか分らぬ相手を待っているのでのんきそうに見えるが、これほど辛い仕事はなかった。永遠に現れぬかもしれないし、一瞬後に現れるかもしれない。幸運を期するほかないのである。魚がいるかいないか分らぬ池に、釣糸を垂れているようなものだ。

「警戒して、もう東京には寄りつかないかもしれないわね」

赤松婦警もいい加減うんざりしたように言った。

しかし、捜査とはつねに努力と忍耐の積み重ねだった。

寺井刑事には執念があった。このままでは、万引団の本拠まで乗り込みながら、空しく引き揚げてきた自分を許せなかった。

寺井の眼は、時間が経ち腹がへってくるにつれて異様に光った。

――見たことのある顔だぞ……。

寺井が、一人の客に不審を抱いたのは、しばらく経ってからだった。

――あの大きな耳、スリッパのような平たい顔……。

寺井はすぐに思い出した。江間川署の名簿に載っていた大耳という男にちがいなかった。西横デパートで清水豊代を逮捕したとき、サングラスをかけて店びきをしていた奴に似ている。

大耳

一

休日を返上しての張込みは森沢部長に限らなかった。

丸急デパートで部長が妊娠中の女を万引犯人と錯覚して痛めつけられている頃、寺井刑事は新宿の伊勢越デパートで婦人警官の赤松刑事と待ち合わせた。夫婦づれを装って万引団一味を油断させるためだった。

そして森沢部長が変装をこらしたように、寺井刑事も口ひげをつけ黒縁の眼鏡をかけた。赤松婦警のほうは付けひげというわけにはいかないが、髪の形を変え化粧を濃くしたりすると、別人のようになった。

伊勢越の屋上で会ったときは、互いに見違えたくらいだった。

エレベーターで三階に下り、婦人服地売場を一時間あまり張り込んでから、エスカレーターで四階へ上った。

丸急と同じく、四階は呉服と和装小物の売場だった。

肌着売場を歩く勇気もない。
「あら——」
赤松が小さな叫び声を挙げた。
「どうした」
「あの人やっぱりやったわ」
「万引したのか」
「右手で首の辺をかきながら、レインコートのボタンの間から左手をだして衣桁にかかっていた裾除をレインコートに吸いこんだのよ。あのポケットは底がぬけているわ」
「狙ってたんだな」
寺井は感心した。大耳が首の辺をかいているのは見たが、左手の動きを見落としていた。しかし、盗んだ品はせいぜい千円前後だろう。逮捕したところで仕様がない。大耳はもっと大きな目的を持ってきているはずだった。いわば本芸にかかる前の小手調べだ。
小さな目的を達した大耳は、やがて腕時計を覗くと、涼しい顔をして下着売場を離れた。

二

大耳は何気ないふうに肌着売場から婚礼衣裳の売場を一巡し、また吸い寄せられるように肌着売場へ戻って、和装用のコルセットをつけたマネキンを厳粛な表情で眺めたが、ふたたび

寺井は赤松婦警の注意を促した。
「どこかしら」
赤松が聞き返した。
「肌着売場だ。焦茶色のレインコートを着ている」
「客が混んでいるわ」
「真っ赤なセーターを着た女がいるだろう。そのとなりだ」
「分った……、でも、赤いセーターの女性はつれじゃないようね。もっと若い男の人と腕を組んでいるわ」
「そのうち仲間が現れる」
寺井は気づかれぬように大耳から遠ざかり、美しい着物姿のマネキンが林立しているほうへ行った。マネキンの蔭に隠れ、赤松といっしょに着物を選ぶふりをしながら大耳を看視するのだ。
大耳は艶めかしく飾られた和装用の肌着を熱心に眺めている。
「あの人、変な趣味があるみたいね」
赤松が言った。
「うん」
寺井は生返事をした。大耳の好奇心はむしろ男性としての健康度を示した。それが変に見えるのは、人眼を気にしないで熱心に眺め入っているからだ。寺井だったら、一人では到底婦人

大耳たちは階段へむかった。
あとを追った。
階段の下り口でさりげなく追い越した。
客の多くはエレベーターやエスカレーターを利用するので、階段の往来は少かった。
寺井は踊り場まで下りて振り返った。
「警視庁の者だ」
寺井は大耳たちの行手（ゆくて）を遮（さえぎ）って言った。
赤松婦警が階段の上に待機して挟み撃ち戦法である。
大耳たち三人の顔色が変った。
途端に逃げだそうとした彼らのうち、寺井はいちばん手近にいた若い女の腕をつかんだ。上へ逃げた者は、赤松が追い落とす手はずになっている。
「何するんや」
女は勇ましく叫んで寺井を突き飛ばそうとした。
しかしたかが小娘の力である。
寺井は簡単に女を捩（ね）じ伏せた。
「痛い！」
女が悲鳴をあげた。
悲鳴を聞いて、寺井の力がつい緩（ゆる）んだ。

腕時計を覗くと、今度は目標のきまった足どりで反物売場へむかった。
すると、大耳がむかった売場には二人の先客がいた。若い男女だった。
大耳はその女の左脇に立った。
そこへもう一人、地味な着物を着た中年の女が加わって大耳の左にならび、初めに来ていた若い男女が大耳の背後をかばうように移動して、大耳のうしろに立った。
「やるわね」
赤松婦警が緊張した声で言った。
「うむ」
寺井も緊張していた。今度こそ逃がしてはならなかった。
女店員は白いマスクをした男に話しかけられ、大耳たちのほうを見ていない。
いちばん右手にいた若い女の肩が、ひとしきり微妙に動いた。
仕事は素早く終った。
まず中年の女が単独で離れ、階段のほうへ消えた。
つづいて、残る三人がかたまって売台を離れた。
売台の反物の山が、ごっそり減ったようだった。
「きみは大耳を捕まえてくれないか。おれは若いほうの二人を引き受ける」
寺井は言った。
直ちに行動した。

柔道二段の彼女を、女とみて侮ったのが不覚だった。
揉み合ううちに、
「やっ！」
という赤松婦警の掛声がかかった。
見事な背負い投げだった。
大耳の体が丸くなって吹っ飛んだかと思うと、積み重ねた男女を懸命に押えつけていた寺井刑事の背中へまともに落下した。
「ギャッ――」
寺井は気絶した。

三

寺井は間もなく意識を取り戻したが、しかし、そのときは若い二人づれは逃げ去ったあとで、大耳だけが赤松婦警に手錠をかけられていた。
二人を逃がしたのは寺井の失態か、赤松の投げ飛ばし方が悪かったのか、落下した大耳の責任かはっきりしない。
とにかく寺井刑事は憮然たる気持で、赤松婦警とともに大耳を警視庁へ連行した。
取調べは、丸急で大失敗を演じたあとの不機嫌な森沢部長があたった。

女はたちまち起き上り、寺井の腕をガブッと嚙んだ。
「痛い！」
今度は寺井が悲鳴をあげた。
そこへ、いったん階段の途中まで逃げかかった若い男が、女を助けるために駆け下りて寺井に組みついた。
さすがに男のほうは力があった。
寺井は組み敷かれそうになった。
弥次馬が集まってきたが、ただの喧嘩と思っているせいか、助太刀をする者も仲裁に入る者もなかった。
「若いの頑張れ」
犯人に声援を送る者もいた。
寺井は辛うじて踏みこたえ、左手で女の腕をつかんだまま男に足払いをかけた。
男の図体が転倒した。つづけて、仰向けに伸びた男の上に、コッペパンを重ねるように女を積んで押さえつけた。
「苦しい……」
男が呻いた。
一方、大耳は階段の上まで逃げたところで、赤松婦警に襟首をつかまれた。
「放せ！」

「トイレに行きたくなって……」
「子供を騙すような弁解はやめろ。おまえの両脇にいた女は共犯じゃないか。若い男もいておまえのうしろをカバーしていた」
「知りません。わたしは手提袋を預けられただけです。こんな災難に遭うと思いませんでした」
「とにかく、おまえさんの名前を聞こう」
部長がまた訊問を代わった。
「…………」
大耳は深刻そうに眉間に皺を寄せた。
「名前がないのか」
「あることはあります」
「もったいぶらないで教えてくれ」
「わたしは悪いことをしていないんです」
「だったら名前を言うくらい平気だろう」
「でも、わたしの名が新聞にでたりしたら、恥ずかしくて子供が学校へ行けなくなるし、女房も近所の人に顔向けできません。それではあまりに可哀相です」
「心配するな。悪いことをしていないなら、おまえの名が新聞にでることはない」
「万一ということがあります。現に、わたしは犯人じゃないのに捕まりました」

逮捕されたとき、大耳は風呂敷を二枚縫い合わせたくらいの手提袋をレインコートの下に隠し、それに盗んだ反物を詰め込んでいたので、机の上にはまず反物の山が積まれた。ウールのお召が七反、正札の合計はおよそ五万円を越えた。

いくらしぶとい犯人でも、眼の前に盗品を積まれては否認しようがないはずだった。ところが、大耳は頑として犯行を認めなかった。

「わたしが盗んだんじゃありません。となりにいた若い女に預かってくれと頼まれたんです」

「ふざけたことを言うんじゃない」部長は厳しく言った。「預かった品をレインコートの下に隠していたのはどういうわけだ。おまえさんは逃げようとして、階段の下に投げ飛ばされても手提袋をしっかり抱えていたそうじゃないか」

「預かった品を盗まれたら大変と思ったんです。刑事さんとは知りませんでした」

「刑事でなければ何と思ったんだ」

「強盗かと思いました」

「いい加減なことを言うな」寺井刑事が口をはさんだ。「声をかけたとき、おれは警視庁の者だと言ったぞ。聞こえなかったか」

「はい」

「聞こえないのに、なぜ逃げた」

「逃げたんじゃなく、戻ったんです」

「なぜ戻った」

切符とマッチ

一

「なんだね、これは」
森沢部長は呆れたように裾除を眺め、手にとって床へ垂らした。
裾除、あるいは腰巻ともいう。大耳が盗んだのは薄桃色のナイロン製で、正札の値が千二百円、レースの飾りつきである。
「…………」
大耳は返事ができなかった。裾除を見るのが恐ろしいように眼を伏せ、肩をすぼめた。
「どうしてこんなものを盗んだのだ」
「へえ」
「まさかおまえが使うわけじゃあるまい。カアチャンへ土産か」
「いえ」
「それじゃどうなんだ。やはり若い女に預かってくれと頼まれたのか」

「警察を甘く見るな」部長はついに怒鳴った。机を叩いたが、力を入れすぎて手が痛かった。

「おまえのことはすっかり分っているんだぞ。おまえの名は大耳だ、ちゃんと江間川署のリストに載っている。ワタ勝の子分で、仲間といっしょに北九州からデパート荒しに上京してきたんじゃないか。ポケットの中の物をだしてみろ」

「――――」

大耳はようやく青くなった。

寺井刑事が大耳を立たせ、所持品を探った。

レインコートのポケットはやはり底がぬけていた。背広のポケットを探ると、財布や煙草、マッチなどのほかに携帯品一時預かり所の預かり証が現れ、さらに彼が肌着売場で万引した例の裾除が、着ていたワイシャツの下から発見された。

この預かり証は半券で、他の半券が荷札になる。
「その切符は拾ったんです」
大耳は少女が恥ずかしがっているような小さな声で言った。
「拾った？」部長はもちろん信じなかった。「どこで拾ったんだ」
「道です」
「どこの道だ」
「…………」大耳は思い出そうとするように天井を仰いだ。「伊勢越の近くです」
「おまえさんは、落ちているものを拾って歩く習慣があるのか」
「いえ、いつもは百円玉が落ちていても拾いません。きょうは何となく拾ったんです」
「それを大事そうにポケットにしまっておいたのはなぜだ」
「落とした人が困ってるだろうと思って、一時預かり所へ届けるつもりでした」
「うまい言訳を考えたな。しかしおまえは、届けないままデパートへ入った。矛盾してるじゃないか」
「あとで届けるつもりだったんです」
「万引をすましたあとでか」
「わたしは万引に関係ありません」
「往生際が悪いな。この切符を持って有楽町の一時預かり所へ行き、係員に品物を預けた者の人相を聞けば簡単におまえが預け主だということが分ってしまう。ぐずぐず弁解したって無

「そんなところです」

「そんなところという答えがあるか」

「つまり……」

大耳はしどろもどろだった。鼻の頭に汗をかき、亀の子みたいに首をすくめるばかりで顔を上げることもできない。たとえ女に預けられたとしても、それをワイシャツの下に隠す理由は見当らなかった。

「はっきりしろ」寺井刑事が横合いから言った。「おまえはそいつを万引した現場を見られているんだぞ。女装の趣味があるのか」

「とんでもない。わたしはこう見えても男です」

「女が女物を着ても女装とは言わない。おまえなんかが女に見えてたまるか。どう見たって熊みたいな男だ。女装したら化け物かと思われる」

とうとう大耳は化け物にされてしまった。

抗議する勇気がなければ沈黙せざるを得ない。クスンと鼻を鳴らしただけだった。

部長が話を変えて、一時預かり所の預かり証をとりあげた。

「これは何を預けたのかね」

小さな紙片で、日本国有鉄道、一時預かり切符と印刷してある。預け主のナンバーが4958、有楽町駅発行で預かり日附下欄には昨日の日附がゴム印で押してあった。引渡日附の下は当然空欄である。

寺井刑事は大耳の財布を調べた。

千円札四枚と百円玉三個のほかに、一葉の名刺型の写真が入っていた。着物姿のオツにすました写真だった。美人である。

「女房か」

寺井は大耳の前に写真を置いた。

「いえ……」

大耳は頰が赤くなって、もじもじと体を動かした。

「おれはこの女に二度も会ったことがあるぞ。一度は新宿の京急デパート、二度目は泉口へいったときだ」

寺井は苦々しく言った。

腰石よし子の写真だった。

「知りません。写真は拾ったんです」

「嘘をつけ。この女はおまえたちの仲間だ」

「いえ、ほんとに拾ったんです」

「やはり伊勢越の近くで拾ったというのか」

「はい」

「それでは、他人の写真を千円札といっしょにしまっているのはどういうわけだ」

「捨てるのが惜しくなったんです、死んだ女房に似ていたもんで……」

駄なんだ。何もかも潔く喋ってしまえ。そうすればサッパリして気分が爽快になる。この反物も、やはり一時預かり所へ預けるつもりだったんだろう」

「ちがうんです」

「どこがちがう」

「わたしは荷物を預けません。切符は拾ったんです」

「まだ同じことを言ってるのか。警察がお前たちの手口を知らないと思ったら大間違いだ。いいか、よく聞けよ。どこかに、おまえたちが盗んだ品を一手に買い受けるズヤ（故買商）がいるはずだ。おまえたちは盗品を駅などの一時預かり所へ預け、その預かり証をズヤに渡すと、ズヤが荷物を引き取って正札の何割かで買う仕組みだ。そうだろう、それくらいのことはちゃんと分っている」

部長は半身に構えて、じっくりと凄んだ。

しかし、それくらいのことしか分っていないのだった。

二

「――――」

大耳は口を噤んでしまった。

清水豊代の場合も同じだったが、彼らは旗色が悪くなると黙ってしまう。

「知らない人です。東京駅のホームで煙草の火を借りようとしたら箱ごとくれました」
「おまえは最初からデタラメばかり言っているが、そういうデタラメは誰に教えられたのかね」
「みな本当のことです」
「嘘をつけ。おまえの仲間は全部ここに泊まっているんだろう」
「ちがいます」
「ちがうというのは、別の旅館に泊まっているということか」
「いいえ、知らないと言うつもりでした」
「つい本音がでたわけじゃないか」
「ほんとに知らないんです」
「それじゃおまえは何処に泊まっているんだ。デタラメを言っても、調べれば、すぐに分る。正直に喋ってしまえ」
「…………」
大耳はまたしても沈黙戦術だった。

三

大耳の取調べはいっこうにラチがあかなかった。

「いまの文句をもう一度言ってくれ」
「死んだ女房に似ているんです」
「なるほど。しかし、おまえはさっき名前をきかれたとき、女房が近所の人に顔向けできなくなるから言えないと言ったばかりじゃなかったかな。忘れたのか」
「――――」
大耳はまた黙ってしまった。さすがに失策を気づいたらしく、大きな耳がピクッとけいれんした。
初め寺井刑事はよし子の名を知らなかったが、泉口へ出張したときの捜査で名前がわかり、泉口でいちばん美人であるところから、近所の者に泥棒小町と噂されていることも分っていた。ただし小娘ではないから、小町娘ではなく小町年増である。
大耳が裾除を万引したのは、ハゲ寅が京都の高丸デパートでマネキンの服を盗んだのと同じで、よし子へのプレゼントを思案した結果だった。
「このマッチはどうしたんだ。これも拾ったとは言わせないぞ」
部長がつづけた。
浅草田島町の南天館という旅館のマッチだった。軸が半分ほど減っていた。
「それはよその人に貰ったんです」
大耳は自信のない声で答えた。
「よその人って誰だ」

赤松婦警はほかに急ぎの仕事ができて鑑識課へ行き、大耳の取調べには立ち会わなかったが、余計なことを喋る女性ではない。
「平気ですよ」
寺井は重ねて強調した。
そこへ、大きな革鞄を抱えた男が牡牛（おうし）のようにのっそりと現れた。でっぷり肥えた赤ら顔の、白茶けた顎（あご）ひげは坂下弁護士だった。
――厭なやつがきた。
部長は不快感を隠せなかった。
しかし部長が不機嫌でも、坂下はたいてい機嫌がよかった。ちょくちょく警察に現れるのは、弁護士稼業隆盛のしるしである。
「伊勢越で逮捕されたのがいるでしょう。選任届けをもらいにきましたよ」
坂下は相変らず汗っかきで、薄汚れたハンカチで顔を拭いた。
「被疑者の名前は何というんですか」
森沢部長は意地悪くきいた。
「本人が言いませんか」
「氏名も住所も黙秘しています」
「そいつは困った男だな。わたしが会って聞きだしましょう。いったい何をやったんですか」
「万引です。お召を七反持っていた」

部長たちはいったん取調べを切りあげ、大耳を看守係に渡すと、地階の調べ室をでて一階の大部屋へ戻った。
江間川署の笠利部長から速達が届いていた。
一週間ほど前に、泉口の泥棒村から十数人姿を消したという連絡だった。
森沢部長は読み終ると、のんびりした笠利部長が恨めしくなった。
速達にしたところをみればこれでも急いだつもりだろうが、一週間も前に消えたことが分ったなら、なぜすぐに電話連絡してくれなかったのか。そうすれば、万引団の上京にそなえて捜査三課の専従捜査班も万全の対策を樹て、一味を一網打尽に検挙できたかもしれないのだ。
しかし、大耳の逮捕は、これまでの捜査のうちで最も大きな収穫だった。
「旅館のマッチを持っていたとは、ついにシッポをだした感じですね」
寺井刑事が言った。
「旅館さえ分ればシメたものだ」
部長も張り切って言った。お先真っ暗の状態から、ようやく光が洩れてきたのである。
「ところで、寺さんの背中は医者に診てもらわなくていいのかね、大耳は平気らしかったが」
「いえ、何ともありません」
寺井は痩我慢して答えた。大耳が落ちてきたとき、寺井は気絶したほどなのだ。本当はまだ背中が痛かったが、大耳が平然としているのに、意地でも痛いとは言えなかった。気絶したことは部長に内緒なのである。あとの二人を逃がしただけでも恥ずかしいのだ。

大局的も小局的もない。ご苦労だが、あんたも焦らずに頑張りなさい」

坂下は悠々と顎ひげをしごいた。

「犯行を認めましたか」
「認めません。品物は預かったと言い張っている」
「すると、彼の言うとおりかもしれませんな。とにかくその男に会わせてください」
「その前に伺いたいことがあります。坂下先生も彼の名を知らないんですか」
「知らん」
「それなのに、どうして彼が逮捕されたことを知ったんですか」
「匿名の依頼人がきて弁護を頼まれた」
「どんな依頼人ですか」
「事情があって匿名を希望してきたのに、それを警察官に話すことは弁護士の倫理に反する」
「しかし、彼らの犯行による被害は全国で多額に上っています。先生が身柄引受人になった清水豊代も渋野いそも依然逃亡中です。もう少し大局的立場から捜査に協力して頂けませんか」
部長は腹に据えかねて言った。
日曜は検察庁も休みだし、弁護人選任の手続きを急ぐ理由はなかった。とすると、坂下が現れた目的は大耳との連絡以外に考えられない。これでは、まるで弁護士の職権を利用した万引団の顧問同然ではないか。
「森沢さんに似合わぬことを言いますな。被疑者、被告人の利益を守るのが弁護士の使命だ。警察に協力するようでは弁護人失格で、第一、そんな弁護士には依頼人が来なくなってしまう。

「電話なので詳しく聞かなかったが、ほかは誰がいたのかね」
「幕になった女がもう一人と、ずるいのでズルちゅうのが店びきをやりました」
「シケ張りはいなかったのか」
「ハゲ寅がシケ張りで、あいつがぼんやりしてるから刑事がおるのに気づかんかったのです」
「すると、六人いておまえ一人が捕まったわけか」
「運が悪いとです」
「しかし、今まで運がよすぎたと考えれば諦めがつく。人生は諦めが大切だ」
「そうは諦めきれんです。前にも三回パクられました」
大耳は悲しげに瞬いた。
万引団が組織される以前のことだが、彼はスリで三回逮捕され、二回までは起訴猶予で釈放されたものの、三回目には起訴され、懲役一年六月、四年間執行猶予という判決をうけていたのだ。
そして、その執行猶予の期間がまだ終っていないのである。
「そいつは弱ったな」坂下はさして同情しない顔で言った。「今度の事件が起訴されたら、前の執行猶予も取り消されて実刑をくうことになる」
「だから諦めきれんとです。ほんとはズルが真打ちをやる番なのに、気分が悪いというのでわたしが交替して、それが運のつきでした」
「取調べはうまく否認できたか」

接見室

一

坂下弁護士は地階の接見室でしばらく待たされた。
畳一畳ほどの空間を金網で半分に仕切り、狭くて陰気な部屋である。
やがて金網の向いに、手錠姿の大耳が看守につれられて現れた。
さすがにショボンとして、大きな耳にも生彩(せいさい)がなかった。
弁護人は、看守の立会(たちあ)いなしで直接被疑者と話をすることができる。
「婦人警官に投げ飛ばされたそうだな」
坂下は、看守が立ち去ってから口を開いた。
「野田が喋(しゃべ)ったんですか」
大耳は口惜しそうだった。
「いや、富田銀三から聞いた」
「野田が銀さんに喋ったんですよ。あいつとユキは、おれのお蔭で助かったようなものです」

「これもわたしの耳です」
「ちょっと書いてみてくれ」
坂下は小さな窓口からメモ用紙にペンを添えて渡した。
大耳は淀みなく――大耳清十郎、と書いた。
意外に達筆だった。
そのとき、看守係の巡査が顔をだして、接見時間の終了を告げた。

二

――大耳清十郎。
いかにも首をかしげたくなる名前だが、戸籍簿に記載されているというから本名なのだろう。
坂下弁護士は警視庁をでると、地下鉄で馬喰町へ行った。
平和商会まで、駅から三、四分である。店頭にバーゲン・セールの貼紙をだし、客が六、七人はいっていた。
「繁昌してるようだな」
坂下は店の奥にいた銀三に声をかけた。
春子と桃江は忙しそうに客の応対をしているが、ゴマ安の姿は見えなかった。
「二階で休んでください。すぐに手が空きますから」

「うまくありません。なにしろ現行犯ですけん……」

大耳は不利な形勢を語った。

まず万引した品をレインコートの下に隠していたのが致命的だった。抵抗したことがさらにいけない。その上、一時預かり所の預かり証と旅館のマッチまで見つかってしまった。

「運の悪いときは、運の悪いことが重なるものだ」

坂下は感心したように言った。

「助かるでしょうか」

「助からんだろうな。被害が五万円以上では難しい」

「何とか助けてください」

「努力してみよう」

「見込みはありますか」

「ないと思っていれば、あとでがっかりしない。いったん否認した以上は否認しとおすのもいいが、前科などはどうせ指紋で分ってしまう。分ることは喋ってしまうんだな。ところで、あとで弁護人選任届けにサインが必要なんだが、あんたの本名は何というのかね」

「大耳です」

「本名だよ」

「本名が大耳です」

「顔の横についている耳は？」

「構わんね。否認していれば無罪の弁論をするし、犯行を認めたなら、情状酌量して刑を軽くしてもらうように弁論をたてる。どっちでも自由自在だ」
「しかし今度の場合、それだけ不利な証拠が揃っていては否認しても無駄じゃないんですか」
「大耳にとっては裁判官の心証を悪くするだけ損だが、その代わり共犯の名を言わないで頑張れる。反対に、犯行を認めて共犯のことを全部喋れば、裁判官は彼の良心を認めるだろう」
「でも、仲間がみんなパクられたら余罪を追及されて、もっと刑が重くなることも考えられませんか」
「もちろん考えられる。大耳もそれで悩んでいるはずだ」
「どうしたらいいでしょう」
「わたしは弁護士だ。刑事の仲間でも大耳の仲間でもない。どうしろこうしろと指図するわけにはいかん」
「いい智恵をかしてください」
「わたしの智恵には金がかかるぞ」
「わかっています」
「それでは弁護料の着手金として、差当り二十万円もらわねばならんな」
「また値上げですか」
「物価が上っている」
　坂下は、弁護士の家計も楽ではないと言った。

銀三も忙しそうだった。
坂下は二階へ上り、梱包した荷物の間に腰をおろした。
「わざわざおいで頂きまして――」
銀三がまもなく上ってきて挨拶した。
わざわざ坂下が足を運ばなくても、電話さえ寄越せば銀三のほうから坂下の事務所へ訪ねるのに、足まめに現れるようになったのは桃江のせいにちがいないと銀三は感づいていた。桃江に気があるらしいのである。
ただし桃江のほうは、水商売をしていた頃の要領で適当にあしらっているが、ほとんど坂下を意にとめていなかった。
「大耳に会ってきたよ。気の毒だが、今度は実刑をくうだろうな」
坂下は情況を話した。
「あいつは泣き虫なんですが、泣いてましたか」
「わたしの前では泣かなかった。しかし今にも泣きそうだったな」
「それじゃ、きっと今ごろ泣いているでしょう」
よし子に振られるたびに、大耳が蒲団をかぶって泣くということを銀三は勝次から聞いていた。
「弁護のほうは、大耳が否認していて構わないんですか」
銀三はきいた。

あんたは勝次に対する友情で、弁護士との連絡だけ引き受けているはずだ」
「それは確かにそうなんですが、店の品の仕入先を疑われたら、ちょっと困ることがあるんです」
「そのときは、きかれても喋らなければいい」
「それで通りますか」
「通る。警察は無理にきく権利がない。いかなる商売にも秘密はつきものだ」
坂下は真面目に頷いて言った。
そこへ、桃江がお茶を淹れて上ってきた。
「桃ちゃんもよく働くね。銀三さんは幸福だよ。こんな綺麗な人といっしょに働いていられるんだから」
それまでふんぞり返っていた坂下が、急にニコニコと愛想よくなった。
彼は、警視庁をでて以後ずっと寺井刑事に尾行されてきたことを知らなかった。

三

坂下弁護士がいそいそと入っていった店の奥に、富田銀三の姿を見出したときの寺井刑事の喜びは大きかった。森沢部長の命令で尾行したものの、あまり期待していなかったのである。
——銀三がズヤだったのか。

いそや豊代が捕まったときの着手金は十万円だった。それが京都で上海（シャンハイ）が捕まったときは地方だからという理由で十五万円になり、今度はさらに五万円の値上げだった。そのほかに、裁判が始まれば出張費だの日当だのと出費がかかり、さらに裁判が一段落すれば着手金と同額の謝礼金をとられるのだ。

しかし銀三や勝次たちにとって、坂下は他にかけがえのない弁護上だった。気心の知れぬ弁護士に頼んで、組織の内容を知られたうえ警察へ通報されでもしたら、たちまち身動きできなくなってしまうからである。

その点、多少は頼りなく、また多少以上に欲張りでも、坂下弁護上なら安心して弁護を頼めた。つまり金の卵を産むかぎりは自分たちを見捨てないという信頼がおけた。気脈相通じて持ちつ持たれつ、ただし弁護士という職業の手前、坂下のほうは銀三たちのやっていることを知っても、表面上は知らぬふりで個々の弁護のみを引き受けるという建前をとっている。

度重なる弁護料の値上げは、銀三たちの弱味を握っているせいだった。

銀三は手馴れぬ商売のやりくりから、渋々と二十万円の工面を明日いっぱいに約束した。本来は勝次が払う金を立て替えるのである。この話を聞けば勝次はもっと渋い顔をするにちがいなかった。

「もし――」銀三は大耳より自分のことが心配になってきた。「警察にここを嗅（か）ぎつかれたらどうしましょう」

「気にすることはない。あんたは何も悪いことをしていないと聞いた。そうじゃなかったかね、

「挨拶をする程度にしか知りませんが、愛想のいい太った人です」

「ほかに店員は？」

「おかみさんと、おかみさんの妹と、最近安さんという人がはいりました。にぎやかにホクロのある堅そうな人です」

「品物はどこから仕入れているか分りますか」

「さあ……、あたしんとこはタオルですからね、よそさんのことは分りません。とにかく、あの店が安売りをするので、近くの店ではお客さんをとられて困っているという話を聞きました」

タオル店の店主は、ほかの店できいてみたらどうかと言った。

そのとき、銀三と桃江に見送られて、平和商会から坂下弁護士の出てくる姿が見えた。

寺井は唇を噛んだ。喜びとともに苦い思いがこみあげてきた。いつか日本橋で彼に会ったとき、彼は「つまらない仕事をやっている」と言ったが、それがズヤだったのだ。ワタ勝と組んでいるに違いなかった。

そのワタ勝にしても、銀三とは十年くらい会わぬと言ってまんまと寺井を騙(だま)したわけである。寺井は客を装って近所の店先の品をひやかしながら、平和商会を張り込んだ。

坂下は店に入ったきり、なかなか出てこない。

平和商会の前にはライトバンがとまっていて、ボディに平和商会のネームがついていた。客の出入りから察して、商売はうまくいっているようだった。

寺井はタオル専門の看板をかけた店で、店主らしい五十年輩の男に警察手帳を見せた。

「平和商会という店は、前からあそこにありましたか」

「いえ、一と月くらい前からですね。以前は学生服専門の問屋でしたが、不渡手形をつかまされて左前になり郷里(くに)へ帰ったと聞きました」

「今度の平和商会は何が専門ですか」

「それがおかしいんですよ。婦人服とか子供服とか作業服とか、問屋はみんな専門の品がきまってますが、あの店はなんでも扱っているようです。洋服生地から反物から、帯やセーターまで売ってますね。それも中途半端な揃え方で、普通なら商売にならないところでしょうが、ごらんのように安売りをして結構さかんにやっているようです」

「平和商会のご主人はどんな人ですか」

「いえ、あっちのほうはとうに廃業しました。近頃はすっかり堅くなりまして、知合いの店で働かしてもらっています」
「そいつは結構だ」
部長は信用しないでいった。あっちのほうとは、もちろんスリのことである。彼が廃業したと言うのは部長に会ったときの決まり文句だった。すっかり堅くなったと言うのも必ず口にする言葉だ。
そして、何日か経つと現行犯で捕まってくるのがゴマ安の慣例である。
ゴマ安はトランクを受け取ると、
「急ぎの用がありますんで――」
下げなくてもいい頭をペコペコ下げて、逃げるようにいってしまった。
ゴマ安のあとに客はいなかった。
部長は、大耳が持っていた預かり証を係員に渡した。
「どんな品ですか」
係員がきいた。
「分らない」
部長は警察手帳を見せた。
係員は棚が並んでいる奥へ引っこみ、やがてビニール・レザーの大きなトランクをカウンターに置いた。

講中十四名

一

寺井刑事が坂下弁護士を尾行して出かけると、森沢部長もつづいて警視庁を出た。

南天館へ行く道順なので、まず有楽町駅の一時預かり所へ寄ることにした。

先客がいて、大型トランクを受け取っていた。

「しばらくじゃないか」

森沢部長は先客の肩を叩いた。

ゴマ安だった。驚いたように息を吸いこんで見つめた。

「元気だったかい」

「へえ、お蔭さんで」

「相変らずか」

「変りません」

「あっちのほうも相変らずか」

「それじゃ大耳清十郎に間違いない。また会えば分りますか」
「分ります」
係員は確信がありそうだった。
トランクは錠がかかっていたが、部長がクリップの先を曲げて操作すると難なく蓋が開いた。
中身は西横デパートと南部デパートのラベルがついた反物だった。むろん包装なしで、一見して万引した品と分る。全部で十六反詰め込んであった。
「たった今、わたしの前にトランクを受け取っていった人の荷札を見せてくれませんか」
部長は気になっていった。
「お知合いのようでしたね」
係員は部長とゴマ安の会話を聞いていたらしかった。
ゴマ安の荷札に記された字は下手だった。住所が台東区浅草雷門三の××、名前が寺井正明となっている。
デタラメだった。
雷門は二丁目までしかない。寺井正明は寺井刑事の名と同じだ。
「トランクの預け主も、さっきの男でしたか」
「……？」
係員はまた首を傾けた。

ゴマ安が受け取っていったトランクにそっくりの、茶色いトランクだった。
「このトランクを預けた人を憶えていますか」
「さあ……？」
係員は首をひねり、トランクに結びつけてあった荷札の裏を返した。
荷札は預かり証の半券で、荷物を預ける際、預け主はその裏面に住所と名前を書き込むことになっている。
部長も荷札の裏面を覗いた。
筆蹟は大耳に似た達筆だった。多分デタラメにちがいない都内の住所、名前は森沢雄三と記されていた。
森沢雄三、部長と同名だった。
――ふざけやがって。
部長は憤慨(ふんがい)した。
「確か、四十歳くらいの男だったと思います」
係員はようやく首を真っすぐに伸ばして答えた。
「耳が大きくなかったろうか」
「ええ、はっきり思い出しました。象みたいな耳をしていた」
「象みたいは大げさだ」
「とにかく大きな耳で、靴べらみたいに平べったい顔だった」

交番の巡査は言った。
パチンコに凝ったからといって、人格に傷がつく理由はない。芸者遊びや競馬競輪に凝るよりましであろう。
部長はあらかじめ南天館へ電話しておいて、裏口から訪ねた。
南天館の主人は、六十歳くらいの瘦せた男だった。顎のエラが張っていて頑固そうだが、愛想よく部長を迎えて自室へ通した。
「早速ですが……」
部長は大耳から南天館のマッチを手に入れた次第をかいつまんで話した。
「信じられませんな、あの森沢さんが万引をしたなんて」
南天館の主人は不満そうに首を振った。
「森沢というのは誰のことですか」
「今お話のあった耳の大きな人ですよ」
「それは偽名です。耳の大きな奴は大耳という本名で、森沢はわたしです」
部長はもう一度警察手帳を見せた。
「しかし、本人が森沢と言ってたんですからね」
主人はやはり頑固だった。
「本人が何と言おうと、偽名は偽名です」
「信じられませんな。あの人は観音様を信仰しております」

返事を待つ間、部長は奥歯を嚙みしめ、唸りそうな声を抑えていた。
しかし、係員はついに思い出せなかった。
「このトランクは、このまま保管しておいてください」
部長は一刻を争うようにカウンターを離れた。

二

──ゴマ安のやつ。
部長はいきり立った。
しかし、いくら血まなこで探したところで、逃げたゴマ安がその辺にうろうろしているはずはなかった。
部長は諦めて銀座から地下鉄に乗った。
田原町下車。
「南天館の経営者はどんな人ですか」
部長は交番で道順をきいたついでに訊ねた。もし、南天館の経営者が万引団の仲間だとしたら注意してかかる必要があった。
「パチンコに凝ってますが、なかなかの人格者という評判です。防犯協会の役員で、警察官友の会の会員にもなっています」

ている」

「連中が初めて泊まったのはいつ頃ですか」

「去年の夏でした」

「今度泊まっているなかに、妊娠中の女はいませんか。三十歳くらいの女です」

「おりますよ、色の白い人で」

「ほんとですか」

部長は女の人相を詳しく話してもらった。

ベージュ色のコートを着て、丸急デパートに現れた女に違いなかった。大きなお腹を叩き、人権蹂躙だの職権濫用だのと大声にわめいて部長を震え上らせた女だ。

「髪を染めた女もいますか。水商売をやっているような若い女です」

「ええ、おりました」

主人は肯定した。

その女が、店員の注意をそらすために店びきしていたのだ。

とすると、あのとき部長が怪しいと睨んだとおりに犯行が行われ、ただし、万引した品は妊婦の両脇にいた男のどちらかが持ち去ったのである。それを、部長は妊婦服の腹に現物をノンだものだと勘違いしてしまったのだ。

「連中は今夜も泊まる予定ですか」

部長は意気込んだ。

「それも本人が言ったんですか」
「わたしは本人の言うことしか信じません」
「いや、あの話なら、全部信じるんですか」
「いや、あの人たちは本当に信心深かった。ほとんど一と月置きに上京して、ちゃんと観音さまにお詣りしていた」
「あの人たちと言いましたが、つれが何人かいるんですか」
「観音講の人たちで、たいてい十四、五人できます」
「宿帳を拝見できますか」
「どうぞ」
主人は怒ったように立ち上り、すぐに宿帳を持って戻った。
女が書いたらしい一人の字で、十四人の住所と名前がつづいていた。女八人、男は六人だった。森沢雄三、寺井正明の名前もあった。ことごとく偽名に違いない。住所は全員大阪市内になっていて、やはりデタラメに違いなかった。記載の日附は五日前である。
「みなさん静かな人ばかりで、宿代もきちんと払ってくれます」
「このメンバーは、いつも同じですか」
「半分くらい違うときもあります」
「上京すると、必ずこちらに泊まるようですか」
「そうでしょう。みなさん気に入ってくれて、今では親戚みたいな気持でうちの猫までなつい

タオル店の主人が言ったように、商品は和洋とりまぜてバラエティがあった。
「ご主人はおられますか」
「主人ですか」
「富田さんです」
「それが何でございまして」
「何ですか」
「何なんでございます」
「分りませんな」
「はい……」
春子はすっかり慌てていた。
そこへ、階段をおりる音がして銀三の顔が覗いた。
銀三は一瞬ドキッとしたようだが、春子のようには狼狽を見せなかった。
「これはお珍しい、寺井さんじゃありませんか、お久しぶりです」
「久しぶりでもないだろう、いつか日本橋で会った」
「そうでした、そうでした、その節は失礼しまして」
「別段失礼された憶えはない。あのとき新しい仕事を始めたように言っていたがこの店かね」
「つまらない商売です」
「いや、結構おもしろそうだ。この不景気に、これだけの店をやってゆくのは大へんだろう」

「いえ、みなさんお帰りになりましたよ、つい一時間ばかり前に」
南天館の主人は依然得心のゆかぬ顔つきで答えた。
部長は全身の力がぬけて喉が渇き、
「水を飲ませてください」
喘ぐように言った。

三

寺井刑事は坂下弁護士をやり過ごして、なお三軒ばかり平和商会について聞き込みをおこなった。
しかし、その結果はタオル店で聞いた話の範囲をでなかった。
客足のひいた頃合いをみて、寺井はぶらりと平和商会に入った。
「いらっしゃいませ」
店先にいた春子が笑顔で迎えた。
ところが、客と思った相手が寺井と分った瞬間に、愛想笑いは怯えたように凍りついた。かつて銀三が警視庁に逮捕されたとき、面会や差入れにいって寺井刑事の顔を知っていたのだ。
「いい店ですね」
寺井は店内を見まわした。

平和商会

一

銀三はしばらく口が利けなかった。
「坂下弁護士は何をしにきたんだね」
寺井刑事がきいた。
「何ということはありません。以前お世話になったことがあるもんですから」
「それでまたお世話になっているわけか」
「いえ、今はもう世話も厄介もありません。通りがかりに寄ってくれたんです、郷里が同じなもんで」
「郷里は福岡県だったかな」
「江間川の近くです」
「そういえばワタ勝も江間川だったが、その後彼に会わないか」
「会いません」

「楽ではありません。家賃を払うのがようやくです」
「車も持っているとは豪勢なものだ」
「あれは中古の安い出物を、月賦で譲ってもらったんです。故障が多くて困っています」
「とにかく、富田銀三が立派な店をだしていると聞いたら、森沢部長もきっと喜ぶにちがいない」
「ひやかさないでください。まだ、立派なんて言われる店じゃありません。わたしがここにいることは、どこで聞きましたか」
「どこで聞いたわけでもない」
「偶然通りかかったんですか」
「坂下弁護士のあとをついてきただけだ」
「――――」
銀三は唇の端をピクッとけいれんさせて絶句した。

「泉口へ行ったのはお仕事ですか」
「二人の女を探しに行った」
「女を？」
「わからないか」
「わかりません」
「ワタ勝は、富田銀三に時たま会うと言ったぞ。坂下弁護士のあとをついてこなくても、ここの住所はワタ勝に聞いて知っていた」
「ご冗談でしょう。わたしは勝次に会っていない。ほんとです」
銀三は誘導に乗らなかった。森沢部長と寺井刑事が泉口で三日間もねばり、手ぶらで引き揚げたことは勝次からの手紙でわかっているのだ。寺井が、銀三と勝次とのつながりに何かを感づいたとしたら、坂下弁護士を尾行して平和商会に辿りついたとき感づいたに違いない。
「しかしワタ勝が嘘をつくわけもないだろう」
勝次がそうやすやすとボロをだすはずはなかった。
寺井はなおも言った。
「聞きちがいじゃないんですか」
「確かにそう聞いた。その証拠に、ここの住所を教えてもらった」
「おかしいですね。わたしにはさっぱり分りません」
「大耳のことも分らないか」

「会わんことはないだろう」
「いえ、全然音信不通です」
「ばかに力を入れて言うじゃないか。先だって、おれは森沢部長といっしょに江間川のさきの泉口という所へ行ってきた。そして十年ぶりくらいでワタ勝に会った」
「これは驚きました」
「驚くことはない」
「勝次の噂は久しぶりです」
「それではもっと驚かしてやろう。しかし、ここで長話をしては商売の邪魔をする。奥へ上らしてもらえないか」
「奥は台所です」
「二階でもいい」
「二階は寝室なんで……」
銀三は婉曲（えんきょく）に断った。寺井のような疑り深い刑事を二階に上げたら、取り散らかした品を覗かれてとんでもないことになりかねなかった。
「どうぞ、わたしのほうは構いませんから……」
銀三は踏台兼用の丸椅子を寺井にすすめ、春子にお茶を入れさせた。ついでに煙草もすすめたが、寺井は自分の煙草をだしてくわえた。
ライターの火は銀三がつけてやった。

入れてくるのか、参考のために教えてくれないか」
「メーカーから仕入れるんです」
「そのメーカーの名は？」
「メーカーは幾つもあります」
「そいつを全部教えてもらえるとありがたい。退職したら、おれもこういう商売をしたいと考えているんだ」
「それでしたら、退職したときお教えします」
「デパートで仕入れるんじゃないのか」
「デパートはメーカーじゃありません。もったいをつけるようですが、仕入れ先は商売の秘密で滅多に教えられないことになっているんです」
　銀三は危うく回答をそらした。
　チクチクと針の先で抉るような質問攻めだが、あくまでシラを切り通すべしというのが坂下弁護士の暗示した教訓だった。
　寺井はようやく断念したらしく、煙草の火を揉み消すと苦い顔をして立ち上った。

二

　寺井刑事は銀三に不機嫌な別れを告げて平和商会をでた。

「大耳といいますと?」
「ワタ勝の子分で、耳の大きいやつだ。万引の現行犯で逮捕した」
「知りませんね」
「思い出す気になれば思い出すさ。そいつを警視庁へ連行したら、間もなく坂下弁護士が現れ大耳と接見室でコソコソ話をした。そのあとで、坂下弁護士の直行した先が平和商会だった」
「なるほど」
「分ったかね」
「何のことでしょう」
銀三は首をひねった。
「よろしい」寺井は頷いたが、怒鳴りたいのに我慢していることは明らかだった。「桶屋の銀はむかしからとぼけるのが上手かった。とぼけたいならそれも結構だ。おれを甘くみたらどんなことになるかも承知しているはずだからな。今日はもっと気楽な話をしよう。平和商会なんて名前は、どういう意味でつけたんだ」
「べつに深い意味はありません。わたしは戦争でひどい目にあいました。世界の平和を願っています」
「しかし、この商売は平和に関係なさそうじゃないか」
「戦争が起こると、こんな商売でもやっていけなくなります」
「一応もっともらしい理窟だな。大分品物が豊富なようだが、いったいどういうところから仕

がいる。
「堅気になったとは結構なことだ」
寺井はゴマ安の提げているトランクが気になったが、差し当って何の容疑もないのに持物の中身まできくことは職権の域を越えた。罪を犯さぬ限り刑事もスリも対等の人間である。トランクの中は多分生地の見本か何かだろう。
「桶屋の銀が近頃どうしているか知らないか」
寺井はそれとなく話を変えてみた。
「さあ……？」
ゴマ安は知らぬようだった。
知らなければ敢えて教える必要はなかった。
むかし馴染のモサ同士が会って、一方がズヤをしていると分ったら、どうせろくな相談をしないにきまっていた。
寺井はゴマ安の話を軽く信じて別れた。
寺井が信じやすいのは、疑り深い性質の極端な半面だった。
警視庁へ戻ると、森沢部長が渋い顔をして待っていた。
「ズヤが分りましたよ、坂下弁護士は富田銀三の店へ行ったんです……」
寺井は経過を話した。
「すると――」部長が言った。「デパートで逃げた仲間が銀三に知らせ、銀三が弁護士に連絡

地下鉄の小伝馬町駅へ向った。

すると、駅の改札口近くで右手に大きなトランクを提げたゴマ安に会った。

寺井が声をかけた。

「これはどうも、いいお天気で――」

ゴマ安は地面に頭が届きそうなほど低く頭を下げた。

「しばらく姿を見せないじゃないか」

寺井は胡散(うさん)くさい眼でゴマ安を観察した。

「お陰さんです」

「警視庁がぼやぼやしているから、仕事がやりやすいというんじゃないだろうな」

「とんでもありません。ご挨拶に伺(うかが)うつもりでしたが、わたしは足を洗ったんです」

「堅気になったのか」

「へえ、四人も娘がいるのに、いつまでもモサなんぞやっちゃいられません。来月は五人目が生れます」

「この頃は足を洗ったというのが流行(はや)ってるようだが、足を洗っただけじゃ食っていけない」

「叔父さんの店で働いています」

「何を商(あきな)っている店だ」

「洋服の仕立屋です。わたしも若いころ仕立屋に奉公したことがあるもんですから」

スリと仕立屋とはまんざら縁がないことはない。すり史上に有名な仕立屋銀次という大先輩

かった後だった」

「戻ってくるだろうか」

「戻るものか、やつらは丸急でも仕事をしたことがわかった」

部長は、それまで内緒にしていた丸急デパートにおける失策を話した。

「本物の妊婦を使うとは、連中もなかなか考えましたね。すると、連中は二組のグループにわかれて仕事をしていたわけですか」

「そうらしい。大耳とは別のグループだ」

「一時預かり所はどうでしたか」

「茶色いトランクに反物が十八反、預け主はやはり大耳だった。あとで一時預かり所の係員に面通ししてもらえばはっきりする」

「茶色いトランク」

寺井は首をかしげた。

ゴマ安が提げていたトランクも、確かに茶色いトランクだった。

気になった。

そこで、寺井は馬喰町でゴマ安に会ったことを話した。

「うむ――」部長はまた唸った。「ゴマ安も一味に違いない。ゴマ安が預けたトランクの名義は寺さんの名前だったのだ。トランクを受け取るとたちまち消えてしまったが、馬喰町で会って、ゴマ安のあとを尾けなかったのか」

していたのか」
「そうでしょう、犯人が捕まるとすぐに弁護士が現れるわけです。もちろん、事件の内容は弁護士から銀三を通じてワタ勝まで筒抜けになっている」
「銀三が丸急を退職したと聞いたとき、おれはどうも臭い気がしたんだ。しかしズヤに転向したとは気がつかなかった」
「それから、渋野いそと清水豊代の身柄引受人になった近藤春子という女がいたでしょう。ところが、平和商会へ行って思い出したけど、銀三の女房が春子という名前だった。おそらく同一人です」
「うむ――」部長は唸った。「銀三のやつ、おれをなめているな」
「部長のほうは収穫がありましたか」
「もちろん」
部長は南天館の宿帳から写しとった十四名のリストを見せた。
「森沢雄三というのは部長と同じ名前じゃないですか」
「寺さんの名前も載っている」
「あ、ほんとうだ」
「驚いたか」
「しかし、わたしは南天館に泊まったことなどありません」
「おれだって同じさ。やつらの偽名に決まっている。残念だが、おれが訪ねたときは全員ズラ

弁護士が銀三を訪ねたから、平和商会の扱う品が盗品くさいという推測では裁判所を動かすことができない。
この鶏と卵に似た関係において、捜査上の手続きは犯人より証拠の存在が先だった。
「焦(あせ)ってはいけない。大きく網を張ってじっくり追い込むのだ。その代わり、今度やつらが網にかかったときは一匹や二匹ではない。みんな刑務所の同期生にしてやる」
森沢部長も張り切って言った。
寺井刑事は捜査会議のあとで地階の留置場へ行き、しょんぼりしている大耳に会った。
「どうだ寂しいだろう。しかしすぐ賑やかになる。近いうちに仲間を多勢つれてきてやるからな」
「――――」
大耳は恨めしそうに細い眼をあげただけだった。

「迂闊でした」

「銀三の店へ行ったはずだな」

部長は肩をいからせ、睨み殺すような目つきで十四名のリストを睨んだ。

三

捜査陣はつねに万引団の後手をひいた。

しかし、すでに万引団の根拠地を突きとめ、さらにはズヤの所在も知れた。

「ここまでくればもう一押しだ。みんな頑張ってくれ」

翌日の捜査会議の席で大樫主任が言った。

指紋照会の結果、大耳は執行猶予中で、ほかに起訴猶予で釈放された逮捕歴もあることがわかった。

有楽町駅一時預かり所の係員の面通しによって、大耳が茶色いトランクの預け主だということも証言された。

しかし刑事たちがいちばん口惜しいのは、銀三が盗品を捌いていると知りながら彼を逮捕できぬことだった。証拠がないからである。逮捕して家宅捜索をすれば証拠がでてくるというのが警察側の論理だが、罪を犯したと疑うに足る相当な理由がなければ裁判官は逮捕状を発せず、家宅捜索も許されぬというのが法律の規制する論理なのだ。

にも刑事らしい男が客を装ってしばしば現れ、時には深夜まで店の附近を張り込んでいる気配があった。

一時預かり所は警視庁の手配がまわったはずだし、といって、盗品を平和商会へ直接持ち込むのはなお危険だろう。これまでは、地方で盗んだ品を駅止小荷物にして都内の最寄り駅へ送らせていたが、今やそれも警戒しなければならず、わざわざ近県の浦和駅や川崎駅へ引き取りにゆく有様だった。

しかし、営業の不振はそのせいばかりではなかった。バーゲン・セールで客がついたように思えたのは当初だけで、在庫が思うように捌けないのだ。

およそ卸問屋（おろしどんや）というものは専門の品を扱って需要に応える。ところが、平和商会の場合は和洋さまざまな小物から巻反に至るまで品種は豊富だが、見本市と同じで量が少かった。見本市の品なら注文次第で需要に応じようが、かりに一越小紋（ひとこしこもん）が一反あって、同じものをもっと欲しいと注文されても、たとえばそれが札幌で盗んだ品なら、直ちに札幌へ追加万引団を派遣するというわけにはいかないのだ。

むろん、客は商人であって一反買いの素人（しろうと）とは違う。

となれば、客足はやはり一か所で用がたりて信頼のおける専門店へ流れた。銀三も春子も元来が商売人ではないからその辺の商法が全く分らず、近頃では買入れ資金にさえ窮する始末だった。正札の五割という仕入値は、卸問屋にとってそう安売りのできる利幅でもなかったのである。不景気風は問屋街にも容赦（ようしゃ）なく吹きまくって、下手をすれば当然の赤字だった。

赤字

春子は算盤(そろばん)を膝の上に置くと溜息(ためいき)をついた。
「どうだ」
銀三がきいた。
閉店して、桃江もゴマ安も帰ったあとだった。
「やっぱり赤字だわ」
「もう一度計算してみろ」
「何度計算したって同じよ」
「ふむ」
銀三も溜息がでた。
営業不振なのである。
大耳が逮捕されて以来、捜査班は陣容を強化した様子で万引が難しくなった一方、銀三の店

電話機のベルが鳴った。
銀三が階下へ下りて受話器をとった。
勝次から至急会いたいという電話だった。上京したばかりで東京駅にいるという。
「ここに来るのはまずい。刑事が外で張っているかもしれないんだ」
銀三は錦糸町の倉庫で会うことにした。

二

倉庫といっても、裏通りのバラックのような木造建てだった。一時預かり所や駅の小荷物室で受け取った品をいったんここへ運び、商品からアシがつかぬようデパートのラベルを剝(は)いで梱包(こんぽう)し直す作業部屋を兼ねている。
この倉庫のことはまだ警察に気づかれていない。刑事の尾行が心配なので、最近は銀三自身以外は誰も倉庫へ寄せつけぬことにしていた。
勝次は間もなく足音を忍ばせて現れた。
「広島のデパートで五人いっぺんに逮捕(パク)られてしまった」
顔を合わせるなり、勝次はげんなりしたように言った。
「現行犯か」
「もちろん」

「予定日を過ぎたわ。ボーナスがでないと赤ちゃんも生れづらいんだろうって桃江に話したそうよ」
「安の子供はいつ生れる予定だっけ」
「弱ったじゃすまないわ。絶対に儲かるといって始めたのはあんたよ。安さんがボーナスをどのくらい貰えるか気にしていたわ」
「弱った」
「どうすればいいの」
「厭味だな」
「仕入れをもっと安くできないかしら」
「無理だろう。勝次のほうの仕事も最近難しくなっている」
「弁護料は値切れないの」
「そいつはなお無理だ。坂下弁護士は桃江に振られてから機嫌が悪い」
「警察には眼をつけられるし、このままいったらジリ貧だわ」
「どうも誤算だったようだ」
「万引品を万引されるなんてことも考えなかったわ」
「上には上があるものだ」
店にならべた反物類を、客に紛れて万引する者がいるのである。それも赤字になった原因の一つで、被害はかなりの額に達した。

「だから借りにきた。四、五十万都合してくれ」
「おれにそんな金があると思っているのか」
「ないのか」
「当り前だ」
銀三は経営の赤字を説明した。
開業に際して、銀三は家を売った金で店や倉庫を借り中古の車まで買ったが、自分たちの生活を賄って桃江やゴマ安のサラリーを払うのが精いっぱいで、それらの設備投資を償却できないでいるのだ。
「しかし――」勝次は言った。「平和商会にはまだ三十万円くらい売掛金があったはずだ。ちゃんと帳簿につけてある」
「それは宇都宮で捕まった二人分の弁護料として払ってしまった。未払いが十万円残っている」
「その二人分は支払いをのばして、踏み倒すことにしたはずじゃなかったのか」
「踏み倒せる相手ではない。値下げの交渉にも応じてくれなかった」
「これではまるで、坂下弁護士を儲けさせるために仕事してるようなものだ」
「ヘマをやるからいけない。もし宇都宮の二人に弁護士をつけなかったらどうなると思う。ヤケを起こして洗い浚い喋られ、挙句は全員パクられてしまう」
「なさけないことになってきた」

「まずいな」
「大いにまずいな。五人の中には梅子も入っている」
梅子は勝次の女房である。京都では上海が起訴され、東京では大耳が起訴された。十日ほど前には宇都宮でも二人捕まっている。いずれも勾留されたままだが、そこへ今度は五人まとまって捕まったというのだ。
捜査網が日本全国に張られた証拠だった。
「腰石よし子はパクられなかったか」
銀三はつい最も気がかりな質問をした。
「よし子は泉口にいる」
勝次は疑わしそうな眼をして答えた。
梅子以外は、捕まった五人のなかに銀三の親しい者は含まれていなかった。
「この仕事もそろそろ汐時がきたようだな」
銀三が言った。
「しかし、いま手をひいてしまったらパクられた連中が可哀相だ。差し当って弁護上の費用を工面しなければならんし、泉口に残された家族の生活費も要る」
「金はあるのか」
「ない、積立金は底をついた」
「弱るじゃないか」

ったかな」勝次はセンチメンタルに言った。
そのとき、もし百万円儲けたらという大耳やマーチの夢が、いまや夢のまま終りかけている
のだった。
その後一年ほどは順調に仕事が運んだ。たまに捕まる者がいても、組織の存在までは知れな
かった。百万円には遠いが、かなりの収入を得た時期もあったのだ。
そして、こう早くジリ貧になるとは知らず、濡れ手で粟の持ちつけぬ金を握った連中は、み
んな酔っぱらった蛸みたいに浮かれて費い果たし、おそらくガッチリ貯金を心がけたのはいそ
婆さんやよし子、ユキなどの女たちだけだった。
今さら心がけを改めたところで、もう全国に手配がまわっていて以前のように仕事すること
は不可能だ。
「何か大きな仕事を考えよう」
銀三は言った。
「大きな仕事？」
「弁護士の費用のほかにみんなの更生資金を百万円ずつ分配できる仕事だ」
「ばかに大きくでたな。ざっと三十人に百万円ずつとしても三千万円だぞ」
「そのくらいは必要だ」
「銀行強盗をやるのか」
「暴力は使いたくない」

「残っている十万円に対しても坂下弁護士は矢のような催促だ」
「金持ちのくせに、どうしてガメツイんだろうな」
「おれを心細くさせないでくれ。今度は五人も捕まっているんだ」
「現金を積まぬ限り坂下弁護士は一歩も動かない。口を開くのも損だと思ってあくびもしないね。広島では出張手当もかなり取られる」
「…………」
勝次は頭をかかえ、今度は地元で安上りな弁護士を探すつもりだ、と弱々しく呟いた。

三

勝次が弱れば銀三も弱った。
至急対策を考えねばならなかった。
組織を解散するにしても、当面の問題を解決しなければ退くに退けない。差し迫って必要なのは広島で逮捕された五人の弁護料とその家族の生活費だが、解散後のことまで考えるとそれぞれ更生資金が必要になる。野放しにしたら元の木阿弥で、またてんでんバラバラのスリや掻っ払いに舞い戻る恐れがあった。
「去年の夏、よし子やハゲ寅たちをつれて初めて上京し、南天館で銀さんを紹介した頃が花だ

「デパートの思惑はどうでもいい。その売上金は一か所に集まるのか」
「出納係（すいとうがかり）に札束が山のように積まれる」
「そして？」
「札束は銀行員が持っていってしまう」
「うむ」
勝次はまたしばらく考え、銀三はそれを黙って見守った。
路地うらで猫が鳴いた。銀三が見馴れている赤毛の猫なら、眼の前をネズミが通っても知らぬふりをしている猫である。飼主がこの界隈の地主で、ともに勤労意欲がない。
勝次が顔を上げた。
「その二億五千ないし三億の金を、そっくり頂戴（ちょうだい）する方法はないだろうか」
「どうやって？」
「おれが聞いているんだ。デパートの事情に詳しいのは銀さんじゃないか」
「二億五千から三億、不景気だから少く見積って二億としても、それをそっくりというわけにはいかない」
「三千万あればいい」
「しかし残念だが無理だね。実を言うと、おれもさっきから同じことを考えていたんだ……」
銀三は言った。
デパートの通用門は従業員のふりをして通りぬけられるが、集金にくる銀行員はデパート側

「すると詐欺か」
「三千万円の詐欺はそう簡単にできない」
「――――」
しばらく二人とも黙って考えこんだ。
勝次はやたらに煙草を吸った。
銀三はしきりに短い口ひげをこすった。
天井をネズミが走った。
「デパートの売上金というのは、一日平均どのくらいになるんだろう」
勝次がきいた。
「平日で六、七千万円かな」
銀三は丸急デパートに勤めていた頃の例をとって答えた。売場の現金収入の額である。
「日曜や祭日はどうだ」
「八千万から一億を超える店もある」
「歳末大売出しのころは？」
「二億五千ないし三億というところかな」
「新聞の広告で見たが、もう歳末大売出しをやっているデパートがあった」
「デパートは気が早い。十二月に入ると待ってましたとばかりにジングル・ベルを鳴らす。ジングル・ベルが鳴れば儲かると思っているんだ」

先納(せんのう)トランク

一

「銀さんの考えを聞かせてくれ」
勝次が沈黙を破った。
「うむ——」
銀三はためらっているようだった。
「難しい仕事か」
「難しくはないが、良心が少しとがめる」
「少しくらいならいいだろう。良心に無関係で三千万円は転がりこんではこない。税金をクスねて平気なやつだっている。良心が痛むのは、つまり良心的に仕事をするということじゃないか」
「それもそうだが、デパートには何となく義理がある。義理だけあって、恨みがあるわけじゃないんだ」

の台帳に登録された印鑑によって札束を受け取る。そしてもっとも重要な点は、その銀行の係員がデパートの出納係と顔馴染になっていることだ。かりに印鑑を偽造しても、初めての顔だったら必ず怪しまれてしまう。アメリカ映画の銀行強盗式にピストルを振り回し、ホールドアップさせて札束を掻っさらうという手もあるが、警察直通の非常ベル装置があるし、第一、そのような荒っぽい手口は銀三の趣味に合わない。

「それでは――」勝次が言った。「銀行員が集金して銀行へ戻る途中を山賊流に待ち伏せて襲うか」

「強盗ならばかにでもできる。そして、たいていは捕まってばかを痛感するのがオチだ。力を使うことより、頭を働かすことを考えろ」

銀三は、すでに何かを思いついているように腕組みして言った。

また天井をネズミが走り、路地うらで猫が鳴いた。

「それでも、金庫を手放させるほどの効果はない」
「別の手押車を運びこんで、注意がそれた隙に本物とスリ替えるのも無理か」
「その手はおれも考えた。しかし無理だな。可能性が乏しい」
「みんな駄目じゃないか」
「そう慌てるな」
銀三はゆっくりと煙草に火をつけた。
手押車に据えつけた金庫を奪うことは不可能に近いが、都内すべてのデパートが同じ方法で集金しているわけではなかった。
「たとえば日本橋の大松デパート」銀三は言った。「あそこは老舗（しにせ）の暖簾（のれん）を誇りにして店員も美人がそろっているが、警備などは意外におろそかで先納の集金を依然トランクでやっている……」
一、二年前まではどのデパートもジュラルミン製のトランクでレジをまわっていたが、現在はその危険性を認めてほとんどのデパートが手押車式の金庫にしたのに、大松は相変らずトランクで先納しているのだ。
「なるほど、トランクなら抱えて持ちだせるな」
勝次は大きく頷いた。
「しかし問題は、どうやって暴力を使わずにトランクを手放させるかだ。今度の仕事には、いそ婆さんやマーチやハゲ寅や、みんなの家族を合わせると数十人の運命がかかっている。絶対

「とにかく話を聞かせてくれ」
勝次は裸電球の真下へ体をのりだした。
「やはり売上金を狙う以外にない」
銀二はようやく決心したようにキッパリと言った。
不景気を見越して、デパートにおける歳末の一日平均売上高を銀二はすでに二億円と推定したが、通常、各売場の売上金はレジスターの女子職員が一万円札から百円札にいたる各札種別に百枚ずつ束ね、集金にきた出納係の職員に渡す仕組みになっている。
この仕組みを先納といって、集金にまわる出納係員はたいてい午後の二時ごろと四時半ごろの二回、二人一組で全階を二組に分れて巡回する。そのデパートの売場が地下一階から七階まであれば、一組は七階から四階までを担当し、他の一組は三階から地階までを担当して集めた現金を出納係室に納めるのである。
その集金の際、一人が金庫を据えつけた手押車を扱い、もう一人がレジから札束を受け取って伝票に受領印を押すのだ。
「すると――」勝次は言った。「集金の途中を狙って金庫ごと頂戴するのか」
「そいつは不可能だ。金庫には錠がかかっているし、手押車を押して逃げきれやしない。妊婦服やオーバーにノミこむのとはわけがちがう」
「しかし、花火の発煙筒を焚いたり八百長喧嘩をしたりして、出納係の注意をそらす手はあるだろう」

「そういう大役はワタ勝以外にいない」
「おれが階段の下で待ち伏せするのか」
「こまかい手順は実際に大松を調べた上で相談するけど、丸急の場合は、手押車を使いだしてからエレベーターを利用するようになったが、以前は店員専用通路の階段を下りていた。上の階から集金してまわるんだ」
「掃除婦にばけて油を流す女が必要だな」
「春子を口説いてみてもいい」
「ほかに必要な仲間は……？」
話がメンバーの人選に移った。
上海と大耳と梅子は勾留中だし、いそと豊代は保釈逃亡中だから初めから除外した。宇都宮や広島で捕まっている連中ももちろん対象にならない。
「よし子はどうだろう」
銀三が言った。
「よし子はいい。腕が確かで頭もきれる。しかし、彼女は寺井刑事に顔を知られているのが難だ」
「ユキはどうだ」
「度胸があってすばしっこい点ではユキがいちばんだろう。だが、彼女も寺井刑事に顔を知られている。伊勢越でパクられそうになって寺井の腕に嚙みついた」

に失敗できない」
「名案があるのか」
「ないこともない」
銀三は自信ありげに言った。

二

銀三が最初に考えたのは、雑踏する店内で先納トランクをスリ替える方法だった。
しかしそれがどうしても難しいと諦めたとき、丸急デパートに勤めていたころ親しかった掃除婆さんの顔が浮かんだ。モップでビニール・タイルの廊下をこすっている姿である。石鹸液で廊下や階段の汚れを洗っていたのだ。
石鹸液の代わりに、ツルツル滑る油を使えば、通行人は滑って転ぶにちがいない。
「転んだ瞬間にトランクを放すというのか」
勝次が先を読んで言った。
「階段で転べばかならず手放すね。もし転ばなかったら、おれがいっしょに階段を下りながらわざと滑って相手にぶつかってやる。暴力に似ているが、この程度はやむをえない。相手が自分で転んでくれればいいのだ」
「トランクを持ち逃げする役目は？」

「うむ」
勝次は唸って膝を叩いた。
「やれると思うか」
「銀さんがやれると思うなら間違いない」
「おれを信用する前に自分で考えてくれ」
「もちろん考えている。大丈夫やれそうじゃないか」
「陽動作戦の囮（おとり）とは別に、最終的にトランクを運ぶ吸取り役も欲しい」
吸取りは真打ちが盗んだ品をリレー式に受け取って逃げる役である。
「そうだな」
勝次は頷いた。出納係員が手放したトランクを、そのまま勝次が店外へ持ち去るのは危険が多かった。
「ハゲ寅はどうだろう」
銀三が言った。
「ハゲ寅なら悪くない。図々しいからいざというときにも割合落ち着いている」
勝次と銀三はなおも熱心に意見を交換した。
「どうせやるなら歳末大売出しの真最中、クリスマスの前後がいちばん売上げが多い」
銀三の提案で犯行の日取りもきまった。
クリスマス頃なら、ハゲ寅がサンタクロースの扮装をして勝次を待ち受け、トランクを受け

「すると野田もうまくないか」
「ばか力はあるけどな」
「マーチは？」
「彼も泉口で森沢部長に会っている」
「しかし顔を知られていても、現行犯でパクられぬ限り大丈夫だと坂下弁護士が言った。顔だけなら、おれや勝次はもっと知られている。むしろ顔を知られていたほうが陽動作戦に効果的だ」
「陽動作戦というと？」
「モサの常套さ、万引のとき店びきを使うのと同じだ」
犯行に際して、客の注意力を他へそらすことはスリの最も基本的な技術である。油断した隙にスリ取るのだ。これが手品師なら、右手に客の注意を惹いておき、その瞬間に左手を働かせてアッと驚かせる。
すなわち戦闘用語において陽動作戦という。敵の眼を欺いて虚をつく戦法である。
しばしば与野党攻防の国会戦術にも用いられているが、原理はすべてスリと同じだ。
「つまり——」銀三は言った。「よし子にしてもマーチにしても、主な連中はみんな警察に知られている。捜査の網を潜って団体行動をとることはできない。上京した途端に気づかれてしまうだろう。しかし、そこを逆に利用するのが陽動作戦だ。よし子たちの動きに警察の眼を集中させておいて、その隙におれたちがトランクを失礼する」

三

勝次は元気を取り戻して立ち去ったが、銀三は内心こころ細く、こういうときにいつも力強いのは女房の春子だった。

「わるい知らせね」

春子のカンは鋭く、戻ってきた銀三の顔を見るなり言った。

「広島で五人パクられて、四、五十万都合してくれという話だった」

「まさか承知したんじゃないでしょうね」

「そんな眼をしておれを睨むな。承知したくても肝心の金がない。平和商会の赤字を説明してやった」

「なさけない話だわ」

「ところが、それから先の話がおかしなことになった……」

銀三は大松デパートの先納トランクを掻っ払う計画を話した。

春子はじっくりと凄むような眼つきをしたまま、最後まで黙って聞いた。

「一種の強盗ね」

「強盗のようだが強盗ではない。相手は滑って転んでトランクを手放した隙に、通りかかった誰かに持ち逃げされたと思うだろう」

取ったらダブダブの赤い服の下に隠して堂々と逃げられるだろう。

「仕事の目安がつき次第ゴマ安を泉口へ使いにだす。それまではみんなおとなしくさせておいてくれ」

「分け前はどういうことになるんだ」

「さっきも話したように、一日の売上金は二組に分れて二回集金する。しかしそれは平日の場合だ。年末は売上げが多いから三回にわけて集金する。二組で三回というと、六つのトランクに積み込まれる札束は一日の売上総額の六分の一だ」

「二億円の六分の一か」

「ざっと三千三百万円になる」

「そいつをおれと銀さんとハゲ寅の三人で山分けか」

「欲張ってはいけない。大松の仕事に加わらなかった者も含め世帯単位で平等に分ける。一世帯百万円はわたる計算だ。勝次だって、万引のそもそもは廃山後の失業した連中を助けるために始めたはずだろう。今度の仕事は、その仲間が無事に年を越して堅気になるためだ。そうでないなら、おれは手をひく」

「わかった。万事銀さんの言うとおりにしよう」

勝次は少しがっかりしたようだが、もとより欲の張った男ではなかった。捕らぬ狸の皮算用まで済めば、あとは泉口へ帰ってゴマ安の連絡を待つばかりだった。

「まだ二十日間ある。急ぐことはない。それまでおとなしくして警察を油断させる」
「もし成功したら、あたしたちもこんな商売をやめて出直すのね」
「そうだ。何を始めるか、おまえの好きなように考えればいい」
「胸が熱くなってきたわ」
春子は膝を崩すと、銀三の手をとって胸にあてた。

「そうかしら」
「あとで気がつくかもしれないが、強盗とはやはり違う。置引きの一種だ」
「持ち逃げなんていうのも恰好がよくないわ」
「恰好にかまっている場合ではない。それに持ち逃げ役は勝次がやる」
「あたしはどうして掃除婦の役なの」
「ほかに適任者がいない。モップを持つと似合うからではなく、地元に住んでいて大松デパートの下検分に便利だからだ。ほかの女では、こんな重要な役を安心して頼めない」
「階段に掃除油を流すだけなのね」
「そうだ。おまえが捕まる心配は絶対にない。出納係が現れる前に、おまえはデパートを出てしまっている。そして三千三百万円だ」
銀三は金額を強調した。
ただし分配法を話すと反対される恐れがあるので、その点は曖昧にぼかして夢をもたせた。
春子は堅く唇を結び、しばらく深刻な表情で考えこんでいたが、やがて細い眼が明るく輝いてきた。
成功の可能性を検討し、金の重味に心が傾いたようだった。
「安さんの役目は？」
「彼には勝次との連絡を頼む。ドジだから当日は何もやらせないほうが無難だ」
「賛成ね。クリスマスまで、あと何日あるかしら」

狙いをつけたコンビの、一人は腫れぼったい眼をした中年の男で、トランクを持つ若い男のほうは敏捷そうな細い体で、女子店員に騒がれそうなハンサムだった。
七階には、大食堂、特売場、画廊、園芸用品売場などがあった。
六階には貴金属、時計、カメラ、食器、電気器具類。
五階が図書、玩具、楽器、家具、運道具など。
四階は呉服と寝具売場である。
先納の係員は階を移るとき混雑を避けて店員用通路を利用するが、四階までの集金が済んだあとは、まっすぐ、一階へエレベーターで下りた。
ジュラルミンのトランクを提げて別館を出発してから戻るまで、その間約四十分だった。
先納時刻はだいたい十二時半、二時半、四時半の三回である。
「おまえも下見をしてこい」
銀三は春子に言った。
掃除婦にばける春子も、現場の状況を充分に知っておかなければならなかった。
「丸急とちがって、大松は掃除係の職員を直接雇っていない。外部の清掃会社に頼んでいるんだ」
「すると――」春子は言った。「デパートの人に顔を知られていなくていいわけね」
「そうだ。おれたちに都合よくできている。そばを誰が通ろうと、知らんふりで掃除していればいい」

下検分

一

大松デパートの下検分に銀三はたっぷり十日間をついやした。張込みの森沢部長や寺井刑事が変装をこらしたように、彼もカツラをかぶったり眼鏡をかけたりして顔見知りの刑事たちに気づかれぬように注意した。

建物は地下一階から七階まで、日本橋の大通りに面して歳末大売出しの垂幕(たれまく)を垂らし、展望台や子供の遊戯施設があって賑やかな屋上にも、歳末大売出中という広告ネットを吊るした赤いアドバルーンが高々と浮かんでいた。

先納の集金経路は丸急と同じだった。二人ずつコンビになって二組に分れ、裏手の道路を隔てた別館をでると、一組は七階から四階まで、他の一組は三階から地階へ集金してまわった。そして別館の出納係へ戻るのである。

目標は七階から四階の組にきめた。地階へまわるトランクを狙うほうが出口に近くて逃走には便利だが、店員の往来が多かった。

「ひとごとだと思って簡単に言うわね」

「ひとごとではない。おまえはおれの女房じゃないか。いつだっておまえだけが頼りだ」

銀三は口にしたことのない殺し文句を、辛うじて言ってのけた。

「大松へ行ってくるわ」

春子は勢いよく立ち上った。

二

大松デパートにおける銀三の調査が済むと、直ちにゴマ安が福岡県泉口へとんだ。

交番で聞かなくても分るように、銀三は詳しい道順を地図に書いてやった。

ゴマ安は迷わなかった。

部落に足を踏みいれたとき軍艦マーチが鳴らなかったのは、間違っても彼が刑事に見えぬしるしだった。

「ゴマさんか」

通りかかったジーパン・スタイルの女が言った。

ユキだった。

ゴマさんという呼び方が気に入らなかったが、自分の名が初対面の若い女にまで知られていると思うと、そう悪い気はしなかった。

「でも、掃除の時間がきまっているんじゃないかしら」
「それがいちばん厄介な問題で、調べるにも苦労した。十時の開店と同時にデパートへ入っても、そのときはもう掃除が終っている」
「それじゃ困るじゃないの」
「ところがよく考えてみると、困るようで困らない……」
銀三は説明した。
清掃会社から派遣される掃除人はパート・タイマーで、一定したメンバーではなかった。そして開店前に掃除を終えて引き揚げてしまう。月に一、二度の大がかりな掃除をする場合は、閉店後から夜にかけて行うのだ。
つまり開店時間中は、清掃会社からきた正規の掃除人にぶつかる心配がない。
「その心配がないのはいいけど、あたしが開店時間中に掃除していたら変に思われないかしら」
「平気だね。モップをかついだ女がネクタイを売っていたらおかしいが、掃除をしているのだから当り前だ」
「でも掃除時間がズレているわ」
「そこはおまえの度胸で押し通す。少しは変に思う者がいるだろうが、なにも悪いことをしているわけじゃない。ただ廊下を磨いているので、いわば勤労奉仕をしているようなものだ。要するに平気な顔をしていればいい。それもごく短い時間、階段に油を流して終りだ」

が座蒲団をすすめて畳に置くと、窓から差し込む日ざしに埃が舞い上った。
「銀さんからこれを頼まれまして――」
ゴマ安は内ポケットから手紙をだした。
郵便では万一誤配されることを恐れ、またゴマ安の口伝てでは間違って話される心配があるので、犯行の段取りを便箋につづって託したのである。
勝次は時折り自分で頷きながら、新聞の社説欄を読むような難しい顔をして読み終った。
「この手紙の内容は安さんも知っているのかね」
勝次はきいた。
「大体の話は聞きました。分け前をもらったら、わたしも今度こそ本物の堅気になります」
「商売でもやるのか」
「女房はむかしからおでん屋をやりたがってるんですが、おでん屋では夏場の商いを別に考えないといけないんで、わたしはヤキトリ屋がよかろうと言っています」
どっちも似たような志だった。
「そういえば赤ん坊が生れるって聞いたけど……」
「生れました」
「男か」
「また女です。おふくろが女で女房も女で、そこへ娘が五人そろって女ですからね」
ゴマ安はうんざりしたように言った。

勝次の在否をたずねた。
「どないしてるんや言うて待ちくたびれてるわ」
ユキは風のように行ってしまった。
勝次の家の玄関口に、大きな犬が寝そべっていた。
ゴマ安は犬が嫌いだった。何年も前のことだが、空巣に入って食いつかれたことがあった。
それ以来犬とは性が合わない。
玄関に近づけないでいると、不精たらしく寝そべったまま犬が唸った。今にも食いつきそうな唸り声だった。逃げればたちまち食いつかれると思って、ゴマ安は足がすくんだ。
「だれだ」
窓があいて、勝次が顔をだした。
「なんだ、安さんじゃないか。待っていたところだ、入ってくれ」
「犬がいるんだ」
「犬なんか蹴とばせばいい」
「だめだ、助けてくれ」
「仕様がねえな」
勝次がでてくると、犬は蹴とばされぬうちに逃げてしまった。
ゴマ安は安心して玄関を入った。
梅子が逮捕されたきり戻らないので、部屋のあちこちに湯呑や灰皿などが散らばって、勝次

「午後八時、錦糸町の倉庫へきてくれ」
銀三はそう言って電話を切った。
つづいてハゲ寅からも連絡してきたが、銀三は勝次の電話と同じ時刻を約束した。
平和商会は暇だった。その後仕入れが途絶えたので品数は少くなり、たまに現れる客も寒々とした店内を眺め、何も買わずに立ち去っていく。きょうはハゲ寅を迎えさせるためにゴマ安を休ませたが、それでも営業にはいっこう差し支えない。
ひところ熱心に張り込んでいた刑事らしい姿も、この不景気な様子をみてさすがに諦めたのか、近頃はさっぱり姿を見かけなくなった。相変らず足まめなのは、桃江に未練を残しながら弁護料の残金を催促(さいそく)にくる坂下弁護士くらいである。
夕食をすませると、銀三はなおも用心深く、風呂屋へ行くふりをして出た足で錦糸町へ行った。
勝次は間もなく現れた。
「尾(つ)けられなかったろうな」
銀三は念のためきいた。
「大丈夫だ」
勝次は深く頷き、変装用の素通し眼鏡をはずした。
「大松デパートの下見をしてきたか」
「ぬかりはない。あれならうまくいきそうだ。しかし、五階から四階へ下りる途中を狙ったの

手紙に委細がつくされているので、勝次が特にゴマ安に聞いておきたいことはなかった。
犯行は十二月二十四日である。
ゴマ安が犯行に直接加わらないのは、勝次もやはりそのほうがいいと思った。
「せっかくはるばると来てくれたんだ。おれたちが上京するまで、安さんもゆっくり遊んでいってくれ。明日は原鶴温泉へ案内しよう」
勝次は言った。
しかしゴマ安は首を振り、
「赤ん坊が一昨日うまれたばかりで、まだ名前もつけてないんです……」
明日の午前中に発ちたいと言った。

三

よし子、マーチ、ユキ、野田、ズル、それに広島で逮捕された男の女房で加奈子という太った女を加えた六人が泉口を発つと、翌日、勝次とハゲ寅は別行動をとって同じく東京へ向った。
銀三は待ちかねていたが、上京した勝次からの連絡は二十三日正午すぎに電話のベルを鳴らした。
勝次とハゲ寅は手配書のまわっていそうな旅館を避け、勝次は新橋のホテルに泊まり、ハゲ寅はゴマ安の家に泊まる手筈だった。

う」

「昨日の晩よし子が電話をかけてきた。南天館に落ち着いてのんびりしているらしい」

「よし子たちのほうは、いずれにしても心配ないな。むしろ心配なのはハゲ寅だ。おれたちがうまくやっても、最後にあいつがヘマをやったらおしまいだ」

「そういえば、寅さんが遅いじゃないか」

銀三がそう言ったところへ、硝子戸にハゲ寅の影が浮かんだ。

ハゲ寅の変装については、洋裁店を営んでいたほどの春子が丹精（たんせい）をこめて、すでにサンタクロースの扮装一式を仕立ててあった。

「着てみてくれ」

銀三はさっそくハゲ寅に扮装させた。

「ダブダブだな」

ハゲ寅が言った。

「大きいくらいじゃないとトランクを匿（かく）せない。よく似合うぞ」

勝次が三角帽子をかぶせた。

白い付けひげは、ハゲ寅が自分でつけた。

確かに、よく似合うサンタクロースだった。

彼は勝次からトランクを受け取ったら、桃江の運転するライトバンに同乗して逃走するのである。

では、四階の集金が済んでいないから予算を割るんじゃないのか」
「手紙に書いたとおりだ、やむをえない。四階の集金が終ったあとでは階段を使わずにエレベーターで下りてしまう。しかし二億円の六分の一という額は少く見積っている。不景気で外商部の売上げは減っても、売場のほうはかなり混んでいる。五階まででも三千万円以上は間違いない。それに四階は呉服売場だから、刑事（デカ）に張り込まれている危険がある」
「先納にまわる係はいつも同じコンビか」
「中年と若いのと、おれが調べた限りではいつもきまっていた。明日の担当者が変っても、その点はおれが注意する。勝次はジュラルミンのトランクだけ眼をつけていればいい」
「二時半の先納を狙う理由は？　おれはそのあとの四時半のほうが売上げも多く、トランク持ちも疲れていて転びやすいと思うんだが……」
「いや、明日はクリスマス・イブで客足が早い。それに二時半の部なら、十二時半の先納が無事に済んだあとで気が緩（ゆる）んでいる」
「まっ昼間からドロボウか」
「二時半も四時半も大差はない。万引だって昼間からやっていたじゃないか。モサは朝のラッシュ・アワーから仕事を始める」
「おれは夕方のラッシュ・アワーのほうが指先が冴えた」
「縁起（ゲン）をかつぐのか」
「そんなつもりはない。今度は指先の仕事と違う。それより、よし子たちはどうしているだろ

「いえ、きょうは日本橋の観音さまです」
「日本橋の観音さま？」
主人は首をひねった。
「ご存じありませんの」
「知りませんな」
「高丸デパートの屋上にありますわ」
「――？」
疑わしそうな眼をして、主人の首が反対側へ傾いた。
高丸デパート屋上の片隅に祀られた祠は稲荷神社だった。
しかしよし子たちにとって、南天館主人の疑いはどうでもよかった。むしろ疑われたほうが好都合なくらいで、よし子たちが上京したのは一昨日だが、すると、間もなく刑事くさい二人組の男が一行の向いの部屋をとって張込みを始めた。それが張込みに違いない理由は、昨日の午後と今日の午前中、よし子はマーチたちと浅草観音へ参詣した際、その二人組に尾行されていると気づいたからである。大耳の逮捕以来警視庁の手配がまわり、よし子たちが到着すると同時に、南天館の主人は警視庁へ通報したのだ。
おそらく、張込みは南天館の内部に限らず、附近の旅館や路地の蔭にも刑事がひそんでいるに違いなかった。
「ええお天気や」

行動開始

一

南天館に陣どった陽動作戦の一行六名は、午後二時には目的地へ乗り込んでいなければならなかった。
「出かける時間だわ」
よし子は同室のユキと加奈子を促した。
となりの部屋のマーチ、野田、ズルの三人も出発の用意はできていた。
ぞろぞろと玄関へむかった。
「おでかけですか」
南天館の主人が慌てたように帳場から跳び出してきた。
「観音さまへお詣りしてきます」
よし子が答えた。
「また浅草の観音さまへ？」

「百万円入ったら、お前は参議院に立候補する言うちょったな」
「むろんや。ハゲ寅が牛鍋屋で、上海は上海へ帰る。ばってん、上海は刑務所を出んうちはどうもならん……」
マーチは、上海が気の毒だと言った。
変装のチョビひげを貼りつけた寺井刑事の姿に気づいたのは、いつもならいちばんぼんやりしている野田だった。
「ほんとだわ」
よし子は恋人の姿を見つけたように声を弾ませた。
尾行者は例の二人だけではなく、あるいは森沢部長も人ごみに紛れて、よし子たちが万引をする瞬間を押さえようと張り込んでいるのかもしれない。
四階をゆっくり一巡して、その間に、よし子は何度も寺井刑事へ流し目を送った。
寺井はあくまでも知らぬふりをして視線を避けたが、しかし気づかれたことは彼自身にも分った様子で、失望を隠せぬ悲しげな顔つきだった。

二

よし子やマーチたちが南天館を出発したころ、馬喰町では銀三が春子、桃江といっしょに平和商会をでた。

野田が眩しそうに空を仰いだ。
白い雲が泳ぐように流れていた。
一行は田原町から地下鉄に乗った。
男たち三人は似合わぬながらもバリっとした背広をオーバーにつつみ、ユキは洋装のお嬢さんスタイル、着物姿に高級そうなストールをかけたよし子と加奈子は一見奥様ふうである。
「やっぱり尾けて来おるわ」
ユキがよし子に囁いた。
南天館に泊まっている二人組のことだった。彼らが別のドアから同じ車輌に乗ったことはよし子も気づいていた。あまり優秀な刑事ではないらしい。
日本橋で下車した。
高丸は大松から二百メートルほど離れ、同じ舗道に面して建っていた。
一行は高丸デパートの正面玄関を入り、エスカレーターで四階へ上った。
四階は呉服と和服小物売場になっている。歳末大売出しとクリスマス・セールが重なって、店内は混雑していた。
「きょうきりでこの商売やめんならんちゅうのは、ちいと淋しいな」
ズルがマーチに言った。
「なに言うちょるとか。きょうだって、もう仕事をしてはいけん。その代わり、今夜は百万円の札束を拝むとたい」

「手拭いを忘れなかったろうな」
銀三はニコリともしないで話を変えさせた。
春子の変装用具はあねさんかぶりの手拭い一本、階段に流す掃除油は用意してきたがモップは大松デパートの家庭用品売場で仕入れることになっている。
手拭いは春子のふところに畳んであった。
「桃江もしっかり頼む、肝心な役だからな。おれがベレー帽を脱いだら……」
「それが合図ね、分ってるわ」
「案内係に呼出(よびだ)しを頼んで、それから車を南側の出入口へまわす」
「するとサンタクロースの寅さんがいて……」
そこへトランクを奪った勝次が駆けつけ、ハゲ寅はトランクを受け取ると桃江の車に乗って逃げる――。
「そう上手(うま)くいけばいいんだが」
銀三はやはり心配だった。
二時五分過ぎ、大松デパートの駐車場に着いた。
高丸デパートでは、すでによし子たちが刑事に尾行されながら店内をまわり始めた頃だった。
車を下りると、春子がまず単独で大松の店内へ消えた。
銀三は桃江とさりげなく別れたが、別館の出入口を張り込む彼の姿は、絶えず桃江に注目されていなければならない。

ただしこちらは地下鉄ではなく、愛用の中古ライトバンである。
「いってらっしゃい」
ゴマ安が店先で見送った。
「もし刑事が来たら――」銀三は言った。「親戚に法事があって出かけたが、すぐに戻ると答えればいい。さっき話したとおりだ」
「ほんとにすぐ戻ってくれますか」
ゴマ安は心配そうだった。
「戻らなかったら失敗したと思え。しかし最悪の場合でも、春子や桃江は無事だから連絡がつく」
「頑張ってください」
「心配するな。かならず成功して戻る」
銀三は春子とならんで後部席に乗った。
車のハンドルは桃江が握った。
日本橋へむかう途中、銀三は太い黒縁の眼鏡をかけ、黒髪のふさふさしたカツラをかぶった。さらにベレーをかぶると画家ともペンキ職人ともつかなくなったが、一応は紳士に見えた。
あとのメイクアップは春子の領分で、数日来リハーサルを繰り返している。
「ずいぶん若返ったわ」
春子は銀三の眉を眉墨ですっきりと仕上げ、惚れ直したように眺めた。

銀三は客用のエレベーターに押しこまれた。同じエレベーターに桃江も乗った。

七階で下りた。

待つほどもなく、店員用通路から係員が現れた。

特売場だけでも数か所のレジスターがあった。買わねば損をするという宣伝に煽(あお)られて、どの売場もラッシュ・アワーの国電なみの混雑だった。

銀三は腕時計で時間を計った。

下検分のときより、先納の手間は五分超過した。混んでいて歩きにくいせいもあるが、売上げが多いことも時間超過の理由だった。

七階の先納が済んだとき、銀三は桃江に合図のベレー帽を脱いだ。

振り返ったが、桃江の姿は客に紛れて分らなかった。

三

七階から六階へ、係員は店員通路をぬけ、銀三は客用の階段で下りた。

銀三がふたたび彼らを発見する手順は、七階の場合と同じである。

貴金属や時計、カメラなどの売場は比較的客が少い。

係員が食器売場のレジで札束をトランクに詰めているとき、コール・サインが鳴った。

「——毎度ご来店下さいまして、まことにありがとうございます。

二時十五分になった。
間もなく、勝次も店内にもぐり込む時刻だった。
曇りだした空に、アドバルーンが五つ並んで揺れていた。
——金が入ったら……。
おれもあんなふうにゆらゆらと揺れてのんきに暮らしたい、と銀三は思った。
二時二十分を過ぎた。
定刻どおりにサンタクロース姿のハゲ寅が長靴をひきずるような歩き方で現れた。
白い縁どりをした赤い帽子に赤い服、大きな袋の代わりに実在しない牛鍋屋のプラカードを担いだ恰好は、洒落(しゃれ)たつもりの背広姿などより遥かによく似合った。
ハゲ寅は嬉しそうにウインクして銀三の前を通り過ぎ、本館の南側出入口へ建物の角を曲った。
ちょうど二時半。
先納の係員が別館から出てきた。
コンビは下検分のときと同じだった。若い男がトランクを提げ、手ぶらの中年の男が先に立った。
銀三は彼らをやりすごして店内に入った。ジングル・ベルの音楽が流れ、客はごった返していた。
先納の係員は店員専用のエレベーターを利用する。

愛し合っているようだが、彼がトランクを奪われてクビになっても、それでも彼女は彼を愛しつづけるだろうか。
——どうかな。
銀三はベレーをかぶり直した。今度は何の合図でもなく、余計なことを考えないで心を引き緊めるためだった。
となりのレコード売場では、ホワイト・クリスマスとモダン・ジャズと鼻声の流行歌が流れていた。
先納は運道具売場へ移った。
まだ玩具、図書、家具の売場が残っている。
銀三は先納の尾行をいったん中止して、店員通路にでた。
通行人はなかった。
手拭いをあねさんかぶりにした春子が、モップで階段をこすっていた。
「どうだ」
銀三は階段の途中で立ちどまった。
「転んだ人がいたわ」
「大丈夫だったか」
「服が汚れてぶつぶつ文句を言ってたけど、出入りの業者らしかったわ」
「ほかに変ったことは？」

新橋の坂下金作さま、新橋の坂下金作さま、おつれさまがお待ちでございますから、一階正面案内所までおこしくださいませ」

店内放送の美しい声だった。

坂下金作は坂下弁護士の姓名である。むろん、自分の名が大松デパートで呼ばれているとは坂下弁護士の知ったことではない。

ベレーを脱いだ銀三の合図で、桃江が店内放送を申し込んだのだ。

この放送を聞くと同時に、春子は四階と五階の間の店員通路階段の掃除を始め、その階段下で勝次が待機し、そして桃江は駐車場のライトバンを南側出入口へまわしてハゲ寅の逃走を扶けるのだ。

先納はやがて五階に移った。

銀三は先納の係員との距離を縮めた。混んでいるから怪しまれる気遣いはなかった。

腫れぼったい眼をした中年の係員は、各レジごとに好色そうな笑いを浮かべて話しかけるが、たいていは冷くあしらわれる様子で、話しかけられた瞬間にツンと横を向いてしまう女子店員もいた。

楽器売場では、二十歳前後の愛らしい唇をしたレジ係が、トランク持ちの若い係員に秋波を送った。男の心を真空掃除機みたいに吸いこんでしまう色っぽい眼つきだった。

若い係員の頰に赤味がさした。うろたえるように顔を伏せ、札束を数えてはトランクに詰めた。

店員通路へでた。
階段にさしかかった。
——滑ってくれ。
銀三は祈った。

「天下泰平ね、退屈なくらい」
春子は落ち着いて答えた。
「勝次はきているか」
「さっきから待ちかねてるようよ」
「もうじきだ。おまえは引き揚げていい」
銀三は滑らぬように、注意して四階へ下りた。
勝次は人待ち顔でぼんやり立っていた。
視線を合わせるだけで意思が通じた。
銀三は五階へ戻った。
先納係は図書売場のレジで集金中だった。まるで薩摩芋(さつまいも)を投げこむように、札束をトランクに詰めていく。
トランクの錠はいちいちかけずに、次のレジへ移る。
最後が家具売場で、ついに七階から五階までの先納が終った。
銀三は先納係の背後に寄り添った。
人ごみをわけて、店員通路へ向った。
「こうして集めた金が全部自分のものだったらと、ぼくはいつも思うね。この金の半分でもいい、そしたらこんな勤めは辞めちまって、のんびりと釣りをして暮らしたい」
疲れた声で、中年の係員は若いトランク係にそんな話をしていた。

しかし勝次とは反対に、階段の上から駆け下りてトランクに手を伸ばした者がもう一人いた。
二方から伸びた手が同時にトランクの把手（とって）をつかんだ。
あとのことは何がどうなったのか、銀三は無我夢中だった。悲鳴をあげ、体をぶつけ合い、気づいたとき眼の前にトランクがあった。
階段の下を見ると、踊り場からさらに転がり落ちた二人の係員と勝次と、もう一人の男が犬ころみたいにもつれ合っていた。
もう一人の男——跳び入り男の凄（すさ）まじい眼つきは森沢部長だった。
銀三は体が震えた。
しかし震えてはいられない。下へ逃げるわけにもいかない。
銀三はトランクをつかむと階段を上った。
「待て！」
部長が叫んだ。
銀三は懸命に階段を上りつづけた。
「待てと言ったら待て！」
部長の声が迫った。
銀三は息がきれた。苦しかった。勝次の代わりに一階へ下りて早くハゲ寅にトランクを渡したいが、とにかく当面は逃げることだ。
「待て」

夢の形見

一

先納係が滑って転ばないときは、銀三が滑ったふりをして彼らを突き倒さねばならなかった。

春子の姿は消え、階段はきれいに油がひいてあった。

四、五段下りたとき、中年の係員が滑りそうになった。

「危ないな」

彼は若い係員に注意を与え、他にも注意するつもりか、振り返って銀三を一瞥した。

銀三は顔をそむけた。

ところがその瞬間、銀三は故意に滑るつもりはなく、足が滑って転倒した。

そのとき、前にいた二人の係員を突き倒すようになったのも自然の成り行きだった。

二人の体がもつれ合って踊り場へ転がり落ちた。

トランクは若い係員の手を離れ、壁に撥ね返った。

待機していた勝次は一瞬の間もおかなかった。素速く踊り場へ駆け上った。

銀三は「立入厳禁」の表示を越えて揚綱に縋りついた。
揚綱が手繰りよせられなかったのは風圧の力だった。
しかもそのとき、銀三を待っていたように突風が襲った。
バルーンが傾いた。パラペットの環に繋留した綱がコンクリートの縁にこすれた。
一瞬の出来事だった。
綱が切れた。
「あっ」
叫び声は誰が洩らしたか分らない。
揚綱にしがみついた銀三は、二個のバルーンとともに天高く舞い上った。

二

「消えてしまった——」
銀三が消えた空を仰いで、森沢部長は呆然と立ちつくした。
そのとなりに肩をならべて、魂をぬかれたように立っているのは勝次だった。
都条例により、バルーンの地表面に対する傾斜角度が四十五度以下になるような強風時においてはバルーンを掲揚しないと定められている。そのため、掲揚中はいつでも気象の変化に応じられるように、アドバルーンの会社では浮揚員を兼ねた看視人を置いている。

勝次の声も聞えた。
むろん勝次は、森沢部長の邪魔をして銀三を逃がすつもりである。
部長にしても待つわけがない。
どんどん階段を上りつめて、銀三はついに屋上へでた。
屋上は子供づれの客が多かった。
何処へ逃げたら助かるのか。
銀三は無闇に走った。
そのあとを部長が追い、勝次がつづいた。
まるで鬼ごっこだった。
群集がざわめいた。
銀三は次第に追いつめられた。
アドバルーンが二個、風でからみ合っていた。
もはや逃げるとしたら、屋上から跳び下りるかアドバルーンによじのぼるか、その二つしかなかった。
しかし屋上から跳び下りれば必ず死ぬ。といって、アドバルーンには人間の体重を支える浮揚力がないし、かりによじのぼれたところで、綱の先端は水素ガスを充塡したバルーンが浮かんでいるだけだ。
だが、トランクを抱えて逃げたい一心の銀三にそれらを考える余裕はなかった。

勝次は危うくあとの言葉をのんだ。

大松デパート南口の舗道では、まだハゲ寅と桃江が計画の成功を信じて待ちわびているはずだった。

「部長さんが大松デパートに来たのは偶然ですか」

勝次は話をすり替えた。

「舐めたことを言うな。偶然を期待するような甘い捜査はしていない」

部長は胸を張ったが、階段の格闘でワイシャツが破れていた。勝次の背広は右袖がちぎれかかっている。

「偶然ではないというと……？」

「銀三のあとを尾けてきた」

「どうしてですか」

「どうしてもこうしてもない。よし子たちが南天館に泊まったという情報はすぐに警視庁へ入った。寺井刑事らがさっそく張り込んだ。ところが、江間川署からの連絡ではワタ勝もハゲ寅も消えたという……」

しかし南天館に泊まったのはよし子たち六人だけで、浅草観音へ参詣したが万引にでかける気配はなかった。

部長はこれを怪しいと睨んだ。気づかれぬように部長単独で、しばらく中止していた平和商会の張込みを再開した。

しかし、看視人も腹が空けば食事にゆくし、天候のいい日は気がゆるみ退屈しのぎに街をぶらつくこともあるだろう。
銀三が消えたときも、屋上の看視人は不在だった。
バルーンの揚綱が突風などで切れることはそう珍しくない。
「どこへ飛ばされたんでしょう」
勝次がきいた。
「わからん。あっという間に雲の中だ」
部長は唸るように答えた。
それまで、一方は逃げることを忘れ、一方は逮捕することを忘れていた。
初めに気づいたのは部長だった。
「逮捕する」
手錠が勝次の手首に鳴った。
勝次はようやく慌てたが遅かった。
「銀三はどこへ逃げた」
今度は部長がきいた。
「知りません。アドバルーンといっしょです」
「最初からアドバルーンで逃げる計画じゃなかったのか」
「とんでもありません。あのトランクはわたしが運んで……」

そのハゲ寅も、プラカードを担いでデパートの前をうろうろしながら、しきりに腕時計を気にし始めている。
「様子を見てこようかしら」
桃江が言った。
「だめよ、その間に勝次さんが出てきたらどうするの。ほかに運転できる人がいないわ」
「それじゃ姉さんが様子を見にいったら？」
「そうね――」
春子はじっとしていられなくなった。
そのときだった。
デパートから森沢部長と勝次がならんで現れた。元気そうな部長の顔としょんぼりした勝次の顔をみれば両者の関係は明瞭だった。
正面からぶつかりそうになり慌てて背中を向けたハゲ寅の横を、部長と勝次が通り過ぎた。
しかし銀三はどうなったのか。
春子と桃江は顔を見合わせたまま、しばらく口がきけなかった。

その頃、よし子たちは高丸デパートの屋上へでていた。烈しい風が吹き過ぎたあとだった。
相変らず寺井刑事たちに尾行されているが、気にする必要は全くなかった。
コーラを飲んでから、六人とも観覧車に乗った。よし子とマーチ、ユキと野田、ズルと加奈

張込みのために筋向いの店の二階を借りた。
そこへ、南天館の一行が外出するという電話があった。
銀三、春子、桃江の三人がライトバンで外出したのはそれから間もなくだった。
「……おれは借りた店の自転車でライトバンを追跡した。決して偶然ではない。大松に着いてライトバンから下りる姿も見ているから、銀三の変装などにごまかされなかった」
「すると、最初からずっと尾けていたんですか」
「尾けていたから、先納トランクを狙うことがわかった。しかし、ワタ勝にも会えるとは思わなかったぞ」
「わたしだって、部長さんに会うとは思わなかった」
勝次は首を垂れて手錠を眺め、こんな手錠姿も何年ぶりかと悲しく思った。
周囲はすでにいっぱいの野次馬だった。

三

「遅いわね」
春子は桃江の腕時計を覗いた。
彼女の役割は終ったので帰宅してもよかったが、やはり結果が気がかりで助手席に乗りこみ、トランクを受け取ったハゲ寅と同行することにしたのである。

「何のビラかな」
空を仰いでいたマーチが言った。
ヘリコプターが撒いたチラシのように、何千枚ものビラが舞い落ちてきた。
「千円札だぞ」
その一枚を宙に受けとめて、びっくりしたようにマーチは言った。
事実だった。
すでに屋上の群集は、大混乱で舞い落ちる札ビラを奪い合っていた。
「早く下りて拾おう」
ズルは焦った。
しかし彼らは、その札ビラが大耳や上海や、いそ婆さんや豊代をふくむみんなの夢の一部、二億円の六分の一が空中分解した夢の形見とは気づいていなかった。

意識を取り戻したとき、銀三は長い夢を見ていたような気がした。
手足をアドバルーンの広告ネットにからまれ、木の枝に宙吊りになっている自分に気づいても、頭がもうろうとして容易に状況を理解できなかった。
——どこだろう。
宙吊りのまま、銀三は周囲を見まわした。
四囲を高いコンクリートの塀にかこまれ、どこかの内庭のようだった。しかも初めて見る場

子とが二人ずつ並んで腰をおろした。
彼らの希望を乗せて、観覧車はゆっくりと回転した。
「いちばん儲かる商売は、やっぱりドロボウだな」
ズルが浮き浮きした声で言った。
「そんなことないわ。パクられたときの刑期を計算にいれたら、割に合わん商売よ」
亭主が広島で勾留されている加奈子は反対意見だった。
「ユキちゃん——」
野田は言った。百万円ずつ手に入ったら結婚して、何か真面目な商売をしようと言いたかったが、あとの言葉がなかなか出てこなかった。
「何や」
ユキはほかのことを考えていたらしく、色気のない返事だった。
「腹が空かへんか」
「コーラを飲んだばかりや」
よし子は寺井刑事を見下ろして手を振った。
「寺井さん——」
大声で呼んでみた。
何度も呼ばれてから、寺井はいまいましそうに顔をあげた。
よし子が手を振ると、彼も諦めたように手を振った。

所ではなく、懐しい記憶を揺すぶられるような気がした。

——どこだったかな。

バルーンにしがみついて吹き飛ばされたことまでは次第に思い出したが、現在地の記憶がどうしても甦(よみがえ)らない。

地上へ下りたいが、網にかかった小鳥のように自由がきかなかった。

そこへ、青い服を着た坊主頭の一隊が列をつくって現れた。

「だれだ、おまえは」

先頭にいた紺の制服の男が銀三を見つけて怒鳴った。

「ここはどこでしょう」

銀三はきいた。

「どこから入ってきた」

「空からです」

「嘘をつけ」

「ほんとうです。ここはどこなのか教えてください」

「刑務所に忍びこんで、そんなことをきく奴があるか」

制服は本気で怒ったらしく、靴底で土を蹴った。

銀三は枝にからんだアドバルーンを見上げ、もう一度吹き飛ばしてくれと祈った。

帯を訪ねたが、それは荒廃した現実に接して構想をたてるためで、かつてのドロボウたちには敢えて会わなかった。すでに私は彼らの現実とはかかわりなく、炭鉱の不況とドロボウ団の発生とを結びつけ「白昼堂々」の世界をつくりあげることに懸命だった。

したがって、作中の人物にモデルはいない。内容もまた架空である。

それでも、日本橋三越の事件から六年も経って、彼らがふたたび検挙された記事を読んだとき、私は呆然として筆が鈍った。彼らはとうに堅気になったろうと甘く考えていたし、逮捕された者の中に小説中の人物と似たのまでいて驚いたのである。

元手いらずのドロボウ稼業は容易にやめられぬらしい。

銀三も勝次もついに捕まってしまったが、法律専門家のご意見を伺ってみると、彼らの犯行はひったくりに類し、判例によれば強盗ではなく窃盗罪で処罰されるそうである。

しかし逃げようとして警官たちと乱闘したから準強盗ということになり、気の毒だが強盗と同じ扱いで五年以上の有期懲役に処せられる。

まことに憐憫の情を禁じえない。

そして一味の共同謀議が立証されるなら、他の連中もことごとく共同正犯として銀三たち同様に罰せられるらしい。

儲けたのは坂下弁護士だけで、万引団の末路、惨憺といわねばならない。

しかし、銀三と勝次が罪を引き受け、ほかの者たちのことをいっさい喋らなければ、春子と

あとがき

本篇は昭和四十年六月から十二月にかけて「週刊朝日」に掲載された。

ところが連載後間もなく、北九州から上京した本物の万引団十三人が検挙されるという事件が起こった。本物のという意味は、私の書いている万引団がニセ物ということではなく、小説の発想を彼らから得ていたからである。

私が初めて彼らの存在を知ったのは昭和三十四年の新聞紙上だった。日本橋の三越で犯行中を一斉検挙されたのである。

私は両親がドロボウだったわけではないが、子供の頃からドロボウに対して一種の憧れを抱いていた。おそらく少年講談のネズミ小僧などのせいにちがいない。長ずるに及んで憧れは単なる好奇心と親近感に変ったが、ドロボウを書きたいという願いは残っていて、昭和三十四年の事件を記憶にとめた。

それで連載小説を書けという編集部の交渉をうけたとき、すぐ頭に浮かんだのが件の万引団のことだった。

しかし実在した万引団はあくまでも発想のヒントにすぎない。私は執筆前に北九州の炭鉱地

ノート

本文につながりが深いので単行本にしたときの「あとがき」をそのまま附したが、現実の万引団はその後も活躍している模様で、北九州の新聞社から「――捕まった本人が〝白昼堂々〟のモデルだと言っているが本当か」という問合わせがあったり、それと似たような問合わせが再三におよんだ。なかでもいちばん弱ったのは、ある新聞が「泥棒村潜入記」というルポルタージュを連載した影響で村の人びとから苦情を寄せられたことだった。

しかし、私は「あとがき」で書いたように発想のヒントを得たに過ぎない。地名なども自分で考えたし、万引団結成の動機も創作である。現実の万引団とはまったく関係のない別世界をつくろうとしたので、かりに読者の立場から小説という読物を「われを忘れて読む小説」と「身につまされて読む小説」の二つに分けてみるなら、私は前者を選び、かねて書きたいと思っていたクライム・コメディを書いたと申し上げる以外にない。作中のドロボウたちに愛着さえ抱いているのである。もし彼らを好きになれなかったら、書く気が起こらなかったろうと思う。

ちなみに、以下は楽屋落ちになるが、富田銀三という名は明治時代にスリの大親分として有

ハゲ寅と桃江は逮捕されずに済むだろう。よし子やマーチたちも大丈夫だ。たとえ取調べをうけても先納トランクのことなどは知らぬと頑張れば、検察側が共同謀議を立証することは難しい。

銀三や勝次自身にしても、うっかり素直に喋ると余罪を追及され、さらに刑期が重くなることくらいは分っている。愛すべき仲間をかばうためにも、決して余分なことは喋らぬと期待していい。

銀三と勝次はやがて裁判をうけ、むかし懐しい刑務所へ舞い戻ってゆく。

しかし、よし子やハゲ寅やゴマ安たちの将来はどうなるのか。

心配することはあるまい。

彼らは雑草のように逞しい生命力をもっている。どんな烈しい風にぶつかってもへこたれる連中ではない。スリや万引はもう懲りたろうから、どこか別の道を探しだして、やはり何の屈託もなく堂々と生きてゆくにちがいない。

——さらばドロボウ諸氏よ。

私は彼らとの別れが辛い。

昭和四十一年一月

結城昌治

（一九六六・二　朝日新聞社『白昼堂々』）

解説——犯罪集団に投影された悲喜劇

山前(やままえ)譲(ゆずる)
（推理小説研究家）

本書『白昼堂々』は、一九六五年六月四日から十二月三十一日まで「週刊朝日」に連載後、一九六六年二月、朝日新聞社より刊行された。その後、報知新聞社（一九六八）、朝日新聞社（一九七〇 新装版）、角川文庫（一九七一）より刊行されたほか、朝日新聞社版『結城昌治作品集』第四巻（一九七四）にも収められている。そして、講談社大衆文学館の一冊として一九九六年三月に刊行されているが、それはまだ満六十八歳で作者が亡くなった直後だった。白昼の有名デパートの売り場で、巧みに万引きを繰り返す泥棒集団と、ベテラン刑事の虚々実々の駆け引きを、作者ならではのユーモラスなタッチで描いている。

「食わざるの記」（一九七六）と題したエッセイで結城昌治は、〝それにしてもわたしの偏食はかなりのものらしく、嫌いな物を並べたら尻取り遊びができるのではないかと言われたこともあるが、なぜこんなに偏食なのか、確かに嫌いな物は多い〟と記していた。そこに挙げられていたものだけでも、穴子にウナギ、卵、酢の物、ニラやミツバ、ウニ、スジコなどがあり、料理屋に招かれても〝喜んで頂戴するのは味噌汁とご飯〟だけになるらしい。洋食も同様で、

名だった仕立屋銀次の本名富田銀蔵からとったもので、渡辺勝次も、仕立屋銀次とならんで三大親分の一人といわれた鼈甲勝の本名渡辺勝次郎からとって名づけた。三大親分のもう一人は湯島の吉こと伊藤由太郎だが、いずれも警察と親密な仲になって羽振りをきかしていたのに、前文部次官が伊藤博文に贈られた時計を掏られた事件がもとで明治末年に検挙され、銀次は懲役十年、鼈甲勝は懲役十五年、湯島の吉は懲役十三年の刑をうけた。銀次の表むきの職業は父親の代からの仕立屋だったそうで、スリの親分になる前は警察官、大正七年に仮釈放で出獄したが、相変らず足を洗えないで大正八年にまた検挙され、懲役八年の刑をうけている。ときに五十四歳だったという。明治末年に検挙された頃は金杉に立派な屋敷を構え、刑事が盆暮の挨拶にうかがって小遣いをもらっていたという話も伝わっている。公認会計士という職業があるが、銀次たちは公認まがいの親分だったらしい。

（一九七四・三　朝日新聞社『結城昌治作品集４』）

『仲のいい死体』、『ゴメスの名はゴメス』と、デビュー以来毎年、候補に挙げられていたのである。一九五〇年代後半から一九六〇年代初頭にかけて、推理小説はかつてないブームを迎えていた。それだけに出版点数も多く、有望な新鋭がまさに綺羅星のごとく登場していたなかで、デビューから五年連続のノミネートは、結城作品がいかに注目されていたかを証明している。

十代の若者を主人公にロマンチックな味わいの『美しい囮』（一九六四）、家族の問題をベースに日本社会の現状を描いた『幻影の絆』（一九六四 後に『幻の殺意』と改題）、芸能界を舞台にしての『夜は死の匂い』（一九六五）といった作品では、謎解きの魅力とともに、それぞれの舞台設定ならではのサスペンスを醸し出していた。また、『穽』（一九六五 後に『裏切りの明日』と改題）は、『夜の終る時』に続いて、悪に手を染めていく警官を描いていたが、もちろんその手法は異なり、主人公の葛藤がより切実だ。

そして、本書『白昼堂々』である。結城作品らしいユーモアは全編に漂っているものの、これまた既刊作品とはがらりと趣を変えた犯罪小説である。すでに権力側に位置する警察官の犯罪はテーマとしてきたが、ここでは犯罪者を主人公にして、犯罪そのものを描いている。なにかしら事件があって、それが解決されていくという推理小説の基本的なスタイルを、はじめて大きく逸脱した長編と言えるかもしれない。

そもそも、推理小説の源流のひとつには犯罪小説があった。犯罪者から転じて国家警察パリ地区犯罪捜査局の初代局長になった、フランスのヴィドック（一七七五－一八五七）のような人物もいる。まだ警察組織の確立されていない時代には、犯罪者の一部と犯罪を取り締まる側

ドレッシングやマヨネーズ、トマトにセロリ、ニンジンがダメなので、サラダは食べられない。ビフテキ、鶏肉、ハム、ソーセージも食べないとなると、これは生半可な偏食ではないが、こと創作の世界になると反対のようだ。雑食というと言葉は悪いが、さまざまなものを味わいたかったようである。

初めての長編は、一九五九年の年末に刊行した『ひげのある男たち』だった。『白昼堂々』の刊行までには六年と数か月の時が流れ、その間に十作を超す長編が刊行されているが、作品の舞台や推理小説のジャンル的に、とても同一作家とは思えないヴァラエティに富んだ作品が並んでいる。

『ひげのある男たち』以下、『長い長い眠り』（一九六〇）、『仲のいい死体』（一九六一）と書き継がれた郷原部長刑事シリーズは、日本の推理小説界では珍しかったユーモア本格である。『罠の中』（一九六一）は、戦時中の隠していた過去が迫ってくるサスペンスだった。『隠花植物』（一九六二）では当時としては異色のテーマを扱ってけだるいムードが印象的だ。郷原部長刑事も登場する『死者におくる花束はない』（一九六二）は、私立探偵の佐久を主人公にしたユーモアタッチのハードボイルドで、謎解きもたっぷり楽しめたが、ハードボイルドへの興味は、私立探偵・真木のシリーズ第一作となる『暗い落日』（一九六五）に結実している。

『ゴメスの名はゴメス』（一九六二）でスパイ小説に挑戦したあと、悪徳警官の姿を二部構成でくっきりと浮かび上がらせた『夜の終る時』（一九六三）で第十七回日本推理作家協会賞を受賞する。じつはこの受賞は五度目の正直だった。『ひげのある男たち』、『長い長い眠り』、

しかも、汗水流して働いた人の金を盗むのはよくないと、デパートを舞台にした万引きに専念するというのだから、犯罪そのものを描くという発想ではないだろう。組織に収まりきれず結局は個人プレーに走る犯罪者の姿や、万引き集団とそれを捕らえようとするベテラン刑事の駆け引きは、結城作品ならではの悲喜劇のひとつのバージョンなのである。

もっとも、コメディとしての犯罪には、惹かれるものがあるようだ。結城昌治は自身の体験をもとにしたというエッセイ「詐欺にかかった話」（一九七五）の冒頭でこう語っている。

詐欺という犯罪には愛嬌がある。この世智辛い世の中に、見ず知らずの他人がうまい儲け話など持ってくるはずはないので、引っかかるほうが間抜けなのだ。詐欺師の側は、欲の皮の突っ張った先に餌を仕掛けるわけで、心理の機微を衝いたところが面白くてどことなく憎めない気がする。憎むより、悪知恵に感心してしまうのである。

『白昼堂々』にしても、被害者は儲かっているデパートであって個人ではない。被害者はいないようなものだ、という発想が根幹にある。実際には、間接的な被害者が必ず出てくるだろうが、白昼堂々、犯罪防止対策の目をかいくぐっての犯罪にも、スリルと一種の愛嬌がある。ついつい、うまくやれよ、という思いをもってしまうのだ。ただ、その軽妙さは、第五十五回直木賞の候補作に挙げられた時には、あまり評価されなかった。

なお、本書収録の「ノート」で触れられているように、作中人物のひとりの名前は、スリの

とは、かなり密接な関係にあったのだ。

そして推理小説の多くが犯罪を扱うから、そこには必ず犯罪の実行者がいる。犯人側から描く倒叙推理というスタイルもある。また、怪盗ルパンや怪人二十面相の活躍も、ミステリーの一ジャンルとして楽しまれてきた。マッカレーの地下鉄サムや久山秀子の隼お秀のような、スリを主人公にしたシリーズも書かれた。そして、コンゲーム小説と呼ばれる、詐欺犯罪の騙しのテクニックを楽しむジャンルも確立されている。

だから、推理小説でその作家活動をスタートさせた結城昌治が、犯罪者の視点からの物語に創作意欲を駆られても不思議ではない。そもそもは実際にあった事件がヒントとなったというが、本書収録の初刊本の「あとがき」によれば、犯罪集団を知ったのは一九五九年、つまりデビューの年である。ただ、推理作家の新鋭として注目されていたデビュー直後の時期には、やはりそのモチーフを具体的にするまでにはいたらなかったようだ。

『白昼堂々』にも、万引きのテクニックなど、主人公たちの画策する犯罪にはミステリーらしい仕掛けはいろいろある。だが、高木彬光『白昼の死角』（一九六〇）のように、そのテクニックの妙がメインとはなっていない。あくまでも、作者の視線は犯罪にかかわる人間たちに向けられていく。当時の不況による生活困窮を背景とした犯罪は、じつに現実的で切迫している。それは悲劇であるはずだが、結城昌治の作品となれば同時に喜劇だ。

生活困窮者の救済手段として組織的な犯罪を企み、経済的に立派に更生させ、そして相互扶助の共済組合までシステム化している犯罪集団は、日本社会にたいする痛烈な皮肉でもある。

いくことで、推理小説らしさを拡散させることにもなってしまった。そして、再び熱気を取り戻すためには、さらに数年間が必要となる。こうした流れを結城昌治は「推理小説の行方」（一九七二）と題したエッセイで分析している。そこで、推理小説は特殊な制約を負っていて、〝読者の推理をいかにまどわすかという、およそ非文学的なテクニックを要求されている〟としたあと、以下のように述べている。

とにかく、ブームはもともと過ぎ去るのが当り前で、それほど先走って悲観することはない。推理小説はなお多様化の余地を残しているが、その大筋は謎解きを主眼とした狭義の推理小説と、「罪と罰」を一つの指標とする犯罪小説に二分されてゆくだろう。むろんその間において、前衛的な作家が実験を重ねてきた成果を見逃がすという手はないし、読者の参加（推理、想像）を要求する手法が、実はもっとも現代的な小説の特徴になっていることなどを思えば、まだまだ推理小説の行詰りを云々するのは性急で、あるいはロス・マクドナルドのように、文学史の流れに逆らって自分の作風を確立することも推理小説なら可能である。さきに挙げた制約は俳句における季語と定型に似ているが、これだって見事に打破った例がいくつもあり、まるで他人ごとのように書いてきたけれど、推理小説は論理的に推理をたのしむ娯楽であることを肝に銘じておけばいいと私は思っている。

大親分として明治期後半の犯罪史にその名を残した、仕立屋銀次こと富田銀蔵のもじりとなっている。常に数百人のスリを配下にしていたとも伝えられる伝説的な人物だけに、光文社文庫刊の満坂太郎『真説 仕立屋銀次』など、いろいろと取り上げられてきた人物だが、結城昌治も『白昼堂々』の刊行からちょうど十年後、その銀蔵を主人公にした推理小説の連作をスタートさせている。『仕立屋銀次隠し台帳』と題して全八作が一冊にまとめられたのは、一九七八年三月だった。

面白いことに、そのシリーズの余話ともいうべき結城昌治のエッセイ「実説・仕立屋銀次」(一九七八)に引用されている「都新聞」によれば、仕立屋銀次は昭和五年、六十七歳のときに、新宿三越分店の呉服陳列場で、錦紗の反物一反を万引きして取り押さえられたというのだ。これが銀次の最後の消息らしいが、結城昌治は記事にある名前や年齢が、他の資料と微妙に異なっていることもあって、「実説・仕立屋銀次」を〝私は銀次だと思いたくない気持ちが強い〟と締めくくっていた。伝説的な人物には相応しくないエンディングと思ったのだろう。

そしてさらに時が経ち、亡くなった直後の一九九六年九月に刊行されたのが、連作短編集『泥棒たちの昼休み』だった。刑務所で受刑者たちが収監された理由を語っているが、まさに悲喜劇としか言いようのない犯罪での人間模様で、結城昌治の作品世界は完結を見たのだった。

『白昼堂々』が刊行された一九六六年、日本の推理小説界はほんの数年前の勢いをすっかり失っていた。松本清張作品を牽引車として多くの読者を得ていたが、その広範囲の読者に応えて

その後の日本の推理小説の流れを見透した分析である。そして、推理小説の本質をしっかり捉えていた結城昌治自身は、このエッセイを執筆した時点で、すでに『白昼堂々』で犯罪小説に一歩踏みだし、まさに「罪と罰」を問いかける『軍旗はためく下に』で、一九七〇年、第六十三回直木賞を受賞していた。一九六〇年代後半以降、推理小説以外の作品が多くなっていく結城昌治にとって、『白昼堂々』がひとつのターニング・ポイントとなる長編だったことは間違いないだろう。

光文社文庫

結城昌治コレクション
白昼堂々
著者　結城昌治

2008年6月20日　初版1刷発行

発行者　駒井　稔
印刷　萩原印刷
製本　関川製本

発行所　株式会社　光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部

© Shōji Yūki 2008
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-74434-2　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

講談社文庫　大衆文学館（一九九六年三月　講談社刊）を底本としました。

＊この作品中には、今日の観点から見て、差別的な用語・表現が含まれています。しかしながら、著者がすでに故人であること、作品が書かれた時代背景などを考慮し、また、著者が差別助長の意図で使用したのではないと判断し、発表時のままとしました。

（編集部）

21世紀に甦る推理文学の源流！

江戸川乱歩全集 全30巻

新保博久　山前　譲 監修

❶屋根裏の散歩者
❷パノラマ島綺譚
❸陰　獣
❹孤島の鬼
❺押絵と旅する男
❻魔　術　師
❼黄金仮面
❽目羅博士の不思議な犯罪
❾黒　蜥　蜴
❿大　暗　室
⓫緑衣の鬼
⓬悪魔の紋章
⓭地獄の道化師
⓮新　宝　島
⓯三角館の恐怖
⓰透明怪人
⓱化人幻戯
⓲月と手袋
⓳十　字　路
⓴堀越捜査一課長殿
㉑ふしぎな人
㉒怪人と少年探偵
㉓ぺてん師と空気男
㉔悪人志願
㉕鬼の言葉
㉖幻　影　城
㉗続・幻影城
㉘探偵小説四十年(上)
㉙探偵小説四十年(下)
㉚わが夢と真実

光文社文庫

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

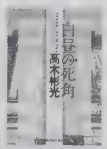
光文社文庫編集部

高木彬光コレクション 新装版

成吉思汗（ジンギスカン）の秘密
巻末エッセイ・島田荘司

誘　拐
巻末エッセイ・折原　一

白昼の死角
巻末エッセイ・逢坂　剛



刺青殺人事件
巻末エッセイ・芦辺　拓

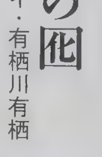
ゼロの蜜月
巻末エッセイ・新津きよみ

能面殺人事件
巻末エッセイ・深谷忠記

人形はなぜ殺される
巻末エッセイ・二階堂黎人

破戒裁判
巻末エッセイ・柄刀　一

黒白（こくびゃく）の囮
巻末エッセイ・有栖川有栖



邪馬台国の秘密
巻末エッセイ・鯨　統一郎

光文社文庫

巨匠の名編をセレクト **贈る物語** 全3冊

Mystery ミステリー ～九つの謎宮～
綾辻行人 編

Wonder ワンダー ～すこしふしぎの驚きをあなたに～
瀬名秀明 編

Terror テラー ～みんな怖い話が大好き～
宮部みゆき 編

ミステリー文学資料館編 傑作群

時代ミステリー傑作選 **剣が謎を斬る**
恋愛ミステリー傑作選 **恋は罪つくり**
文芸ミステリー傑作選 **ペン先の殺意**
ハードボイルド傑作選 **わが名はタフガイ**
ホラーミステリー傑作選 **ふるえて眠れない**
ユーモアミステリー傑作選 **犯人は秘かに笑う**

江戸川乱歩と13の宝石
江戸川乱歩と13の宝石 第二集
江戸川乱歩と13人の新青年 〈論理派〉編

光文社文庫

山田風太郎ミステリー傑作選 全10巻

1 眼中の悪魔 本格篇
2 十三角関係 名探偵篇
3 夜よりほかに聴くものもなし サスペンス篇
4 棺（かん）の中の悦楽 凄愴篇
5 戦艦陸奥 戦争篇
6 天国荘奇譚 ユーモア篇
7 男性週期律 セックス&ナンセンス篇
8 怪談部屋 怪奇篇
9 笑う肉仮面 少年篇
10 達磨峠の事件 補遺篇

都筑道夫コレクション 全10巻

女を逃すな〈初期作品集〉
猫の舌に釘をうて〈青春篇〉
悪意銀行〈ユーモア篇〉
三重露出〈パロディ篇〉
暗殺教程〈アクション篇〉
七十五羽の烏〈本格推理篇〉
翔び去りしものの伝説〈SF篇〉
血のスープ〈怪談篇〉
探偵は眠らない〈ハードボイルド篇〉
魔海風雲録〈時代篇〉

光文社文庫

土屋隆夫コレクション 新装版

影の告発
危険な童話
天狗の面
針の誘い
天国は遠すぎる
赤の組曲
妻に捧げる犯罪
盲目の鴉
不安な産声

鮎川哲也コレクション

鬼貫警部事件簿

ペトロフ事件
人それを情死と呼ぶ
準急ながら
戌神(いぬがみ)はなにを見たか
黒いトランク
死びとの座
鍵孔のない扉 新装版
王を探せ
偽りの墳墓
沈黙の函(はこ) 新装版
白昼の悪魔
早春に死す
わるい風

星影龍三シリーズ

朱の絶筆
消えた奇術師
悪魔はここに

結城昌治の作品

❖結城昌治コレクション

ゴメスの名はゴメス

白昼堂々

Mateo
Library

開高 健　ルポルタージュ選集

日本人の遊び場
ずばり東京
過去と未来の国々
声の狩人
サイゴンの十字架

水上 勉　ミステリーセレクション

虚名の鎖
眼
薔薇海溝
死火山系

光文社文庫

9784334744342
1920193006193
定価(本体619円＋税)
ISBN978-4-334-74434-2
C0193 ¥619E

白昼堂々◆結城昌治

筑豊の廃坑の村。スリを生業とする人々の住むその村に、デパートの保安係をしている昔の仲間・銀三が現れて、もっと安全で割りのいい仕事――デパートの集団万引きを勧めた。チームワークと巧妙な手口で、窃盗団の稼ぎは上々、前途は洋々と思われたが、ベテラン刑事も黙ってはいない。陽気な泥棒集団の破天荒な活躍を軽妙諧謔の筆致で描いた、著者会心の悪漢小説。

San Mateo Public Library
3 9047 09484857 5